鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（178）

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（ＸＩ）

芝原遺跡（しばはらいせき）４

（南さつま市金峰町）

弥生時代・古墳時代編

２０１３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

上空から見た芝原遺跡

土器集中遺構４号

古墳時代の出土遺物

丸底甕，銅鏡・破鏡

序　　文

この報告書は，万之瀬川の河川改修事業に伴って，平成11年度から平成16年度にかけて実施した，南さつま市金峰町に所在する芝原遺跡の発掘調査の記録（弥生時代・古墳時代編）です。

芝原遺跡では，縄文時代中・後期の遺構・遺物をはじめ，近世まで連綿とした生活跡が発見されました。各時代とも新発見や資料の充実がありましたが，本報告書に掲載している弥生時代終末から古墳時代にかけても，畿内や北部九州・有明海沿岸地域などとの交流をうかがわせる資料が多数出土し，技術の伝播や人の動きなど，今後，万之瀬川周辺地域のみならず，南九州全域の弥生・古墳時代の調査・研究に大いに貢献するものと思われます。

また，本報告書をもって，芝原遺跡をはじめ，本改修事業に伴って調査された南田代遺跡，古市遺跡，持躰松遺跡，上水流遺跡，渡畑遺跡の発掘調査報告書（全13巻）のすべての刊行を終了しました。

これらの報告書を，県民をはじめ多くの方々に御覧いただき，地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくことにより，国民の共有財産として文化財が保護・活用されることを祈念しております。

最後に，調査に当たり，御協力いただいた南薩地域振興局建設部（旧伊集院土木事務所），南さつま市教育委員会，関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成25年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田仁志

報 告 書 抄 録

ふりがな	しばはら いせき 4
書名	芝原遺跡4
副書名	中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	XI
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	178
編著者名	関明恵・長野眞一・大久保浩二
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号　TEL0995-48-5811
発行年月日	西暦2013年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積 (㎡)	調査起因
しばはらいせき 芝原遺跡	みなみさつまし 南さつま市 かなさとちょう 金峰町 おおあざみやざき 大字宮崎 あざしばはら 字芝原・ はまさき 濱崎	462209	35-81	31° 25′ 40″	130° 19′ 37″	1999.10.15 ～ 2000.3.22 2000.4.24 ～ 2001.1.25 2001.5.7 ～ 2002.3.19 2002.5.7 ～ 2003.3.20 2003.5.6 ～ 2004.3.22 2004.5.14 ～ 2004.7.21	49,600	中小河川改修 （万之瀬川）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芝原遺跡	集落跡	弥生時代		井出下式土器 高橋式土器 入来式土器 黒髪式土器 須玖式土器 山ノ口式土器 下大隈式土器 松木園式土器 石包丁， 銅鏃，銅鏡， 石製勾玉	小型仿製鏡，破鏡
		古墳時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構 土坑 ピット 溝状遺構 焼土遺構 土器集中遺構	中津野式土器 東原式土器 辻堂原式土器 笹貫式土器 庄内・布留式土器 （中～北部九州系） 鉄鏃 砥石	

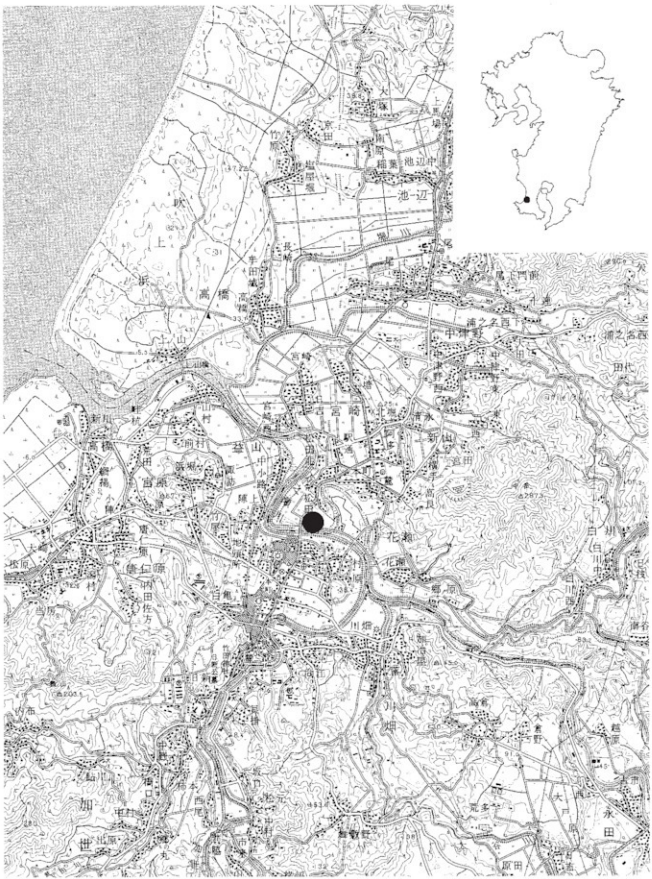
遺跡の概要

芝原遺跡は，縄文時代中期から近世までの遺構・遺物が発見されている複合遺跡である。これまでに縄文時代遺構編，遺物編，古代・中世・近世編の3冊の報告書を刊行しており，今回の報告は弥生時代・古墳時代編である。

弥生時代では，小型仿製鏡と破鏡，銅鏃が出土している。遺構との関わりは不明であるが，南九州においては希少な資料である。

古墳時代では，土器集中遺構から在地の中津野式土器を中心とする大量の土器が出土している。これらの中には，中・北部九州地域から搬入されたと考えられる土器やその地域を経由して伝播した製作技法によりつくられたと思われる土器（薄手で軽量な甕など）も出土しており，当時の交易や製作技術の伝播等を考える上で興味深い資料である。

このように，芝原遺跡は弥生時代から古墳時代における社会や交易を考える上で貴重な遺跡である。



芝原遺跡の位置図（1/50,000）

例　言

1　本書は，中小河川改修事業（万之瀬川）に伴う芝原遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町（旧日置郡金峰町）宮崎に所在する。
3　発掘調査及び報告書作成（整理作業）は，県土木部河川課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
4　発掘調査は，平成11年10月15日～平成12年３月22日，平成12年４月24日～平成13年１月25日，平成13年５月７日～平成14年３月19日，平成14年５月７日～平成15年３月20日，平成15年５月６日～平成16年３月22日，平成16年５月14日～平成16年７月21日にかけて実施し，整理作業・報告書作成は平成17年度から平成24年度に実施した。
5　遺物番号は，通し番号とした。本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
6　芝原遺跡の遺物注記の略号は「ＳＨＢ」である。
7　挿図の縮尺は，各図面に示した。
8　本書で用いたレベル数値は，県土木部が提示した工事計画図面に基づく海抜絶対高である。
9　発掘調査における図面の作成，写真の撮影は，各年度の調査担当者が行った。空中写真撮影は，有限会社ふじた，有限会社スカイサーベイ九州に委託した。
10　遺物の実測・トレースは，整理作業員の協力を得て，関明恵・長野眞一が行った。土器の一部は株式会社九州文化財研究所に委託し，監修は関・長野が行った。
11　自然科学分析は当センター南の縄文調査室の中村幸一郎が担当した。
12　古代・中世編の補遺については，長﨑慎太郎の協力を得た。
13　遺物の写真撮影は，西園勝彦・吉岡康弘・辻啓明が行った。
14　本書の執筆は長野・大久保・関が担当し，編集は関と長野が行った。執筆の分担は次のとおりである。

第１章～第２章 …… 大久保
第３章　第１節～第２節 …… 大久保
　第３節　調査の成果
　　１　弥生時代 …… 長野・関
　　２　古墳時代 …… 長野・関
第４章　総括
　第１節 …… 長野
　第２節 …… 関
　第３節 …… 大久保
補遺 …… 関・長﨑・中村

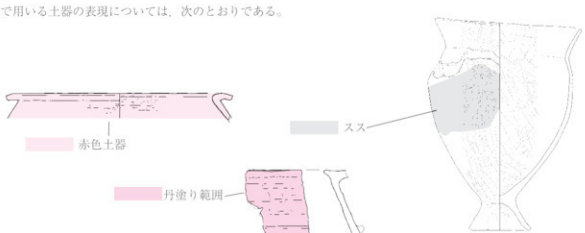
15　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。

凡　例

1　本書で用いる遺構の表現については，次のとおりである。

焼土・炭化物集中

2　本書で用いる土器の表現については，次のとおりである。



本文目次

巻頭カラー
序文
報告書抄録
例言
凡例
目次

第１章　調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査…… 1
　第３節　本調査…… 2
　第４節　整理・報告書作成…… 6

第２章　遺跡の位置と環境……11
　第１節　地理的環境……11
　第２節　歴史的環境……11

第３章　調査の方法と成果……17
　第１節　調査の方法……17
　第２節　層序……18
　第３節　調査の成果……19
　　１　弥生時代の調査……19
　　２　古墳時代の調査……32

第４章　総括…… 242
補遺…… 256
図版…… 271

挿図目次

第１図　芝原遺跡の調査範囲とグリッド図…… 9
第２図　年度別調査範囲グリッド図…… 10
第３図　遺跡周辺の旧地形…… 13
第４図　周辺遺跡位置図…… 14
第５図　弥生土器１…… 20
第６図　弥生土器２…… 21
第７図　弥生土器３…… 23
第８図　弥生土器４…… 24
第９図　弥生土器５…… 25
第10図　弥生土器６…… 26
第11図　弥生時代土器出土状況図および弥生土器７…… 27
第12図　弥生時代土器出土状況図および弥生土器８…… 28
第13図　弥生土器９…… 29
第14図　石包丁…… 30
第15図　銅鏃・銅鏡・鉄鏃・勾玉・垂飾…… 31
第16図　古墳時代全体遺構図１…… 36
第17図　古墳時代全体遺構図２…… 37
第18図　古墳時代遺構配置図１…… 38
第19図　古墳時代遺構配置図２…… 39
第20図　古墳時代遺構配置図３…… 40
第21図　古墳時代遺構配置図４…… 41
第22図　古墳時代遺構配置図５…… 42
第23図　古墳時代遺構配置図６…… 43
第24図　古墳時代遺構配置図７…… 44
第25図　古墳時代遺構配置図８…… 45
第26図　古墳時代遺構配置図９…… 46
第27図　古墳時代遺構配置図10…… 47
第28図　古墳時代遺構配置図11…… 48
第29図　竪穴住居跡１号および出土遺物…… 51
第30図　竪穴住居跡２号および出土遺物…… 52
第31図　竪穴住居跡３号および出土遺物…… 53
第32図　竪穴住居跡４号…… 54
第33図　竪穴住居跡５号…… 55
第34図　竪穴住居跡６号…… 56
第35図　竪穴住居跡６号内出土遺物…… 57
第36図　竪穴住居跡７号…… 58
第37図　竪穴住居跡７号内出土遺物１…… 59
第38図　竪穴住居跡７号内出土遺物２…… 60
第39図　竪穴住居跡７号内出土遺物３…… 61
第40図　竪穴住居跡８号…… 62
第41図　竪穴住居跡８号内出土遺物１…… 63
第42図　竪穴住居跡８号内出土遺物２…… 64
第43図　竪穴状遺構１号…… 65
第44図　竪穴状遺構２・３号および２号内出土遺物…… 66
第45図　竪穴状遺構４号…… 67
第46図　竪穴状遺構５号および出土遺物…… 68
第47図　竪穴状遺構６・７号…… 70
第48図　竪穴状遺構７号内出土遺物１…… 71
第49図　竪穴状遺構７号内出土遺物２…… 72
第50図　竪穴状遺構７号内出土遺物３…… 73
第51図　竪穴状遺構８号および出土遺物…… 74
第52図　竪穴状遺構10号…… 75
第53図　竪穴状遺構10号内出土遺物…… 76
第54図　竪穴状遺構11号…… 77
第55図　竪穴状遺構11号内出土遺物および12号…… 78
第56図　竪穴状遺構13号および出土遺物…… 79
第57図　竪穴状遺構14号および出土遺物…… 81
第58図　竪穴状遺構15号および出土遺物…… 82
第59図　竪穴状遺構16号…… 83
第60図　竪穴状遺構16号内出土遺物１…… 84
第61図　竪穴状遺構16号内出土遺物２…… 85
第62図　竪穴状遺構16号内出土遺物３…… 86
第63図　竪穴状遺構17号内出土遺物１…… 87
第64図　竪穴状遺構17号内出土遺物２…… 88
第65図　竪穴状遺構18号および出土遺物…… 89
第66図　竪穴状遺構19号…… 90
第67図　土坑１号…… 91
第68図　土坑２号および出土遺物…… 92
第69図　土坑３号および出土遺物…… 93
第70図　土坑４～６号および６号出土遺物…… 94
第71図　土坑７号および出土遺物…… 95
第72図　土坑８～11号および出土遺物 …… 97
第73図　土坑12～14号 …… 98
第74図　土坑15号および出土遺物…… 99
第75図　土坑16～20号および16・17号内出土遺物 …… 100
第76図　土坑21～23号および22・23号内出土遺物 …… 101
第77図　土坑24号および出土遺物…… 103
第78図　土坑25～30号および30号内出土遺物 …… 104
第79図　土坑31～36号および32号内出土遺物 …… 105
第80図　ピット１・２号および出土遺物…… 106
第81図　ピット３号および出土遺物…… 107
第82図　ピット４～６号および出土遺物…… 108
第83図　ピット７～９号および出土遺物…… 109
第84図　ピット10～13号および出土遺物 …… 111
第85図　溝状遺構…… 112
第86図　溝状遺構内出土遺物１…… 113
第87図　溝状遺構内出土遺物２…… 114
第88図　溝状遺構内出土遺物３…… 115
第89図　溝状遺構内出土遺物４…… 116
第90図　溝状遺構内出土遺物５…… 117
第91図　溝状遺構内出土遺物６…… 118
第92図　溝状遺構内出土遺物７…… 119
第93図　焼土遺構…… 120
第94図　土器集中遺構１号…… 122

第95図　土器集中遺構1号内出土遺物1 …… 123
第96図　土器集中遺構1号内出土遺物2 …… 124
第97図　土器集中遺構1号内出土遺物3 …… 125
第98図　土器集中遺構1号内出土遺物4 …… 126
第99図　土器集中遺構2号および出土遺物 …… 127
第100図　土器集中遺構3号全体図 …… 129
第101図　土器集中遺構3号1 …… 130
第102図　土器集中遺構3号2 …… 131
第103図　土器集中遺構3号3 …… 132
第104図　土器集中遺構3号断面図 …… 133
第105図　土器集中遺構3号内出土遺物1 …… 134
第106図　土器集中遺構3号内出土遺物2 …… 135
第107図　土器集中遺構3号内出土遺物3 …… 137
第108図　土器集中遺構3号内出土遺物4 …… 138
第109図　土器集中遺構3号内出土遺物5 …… 139
第110図　土器集中遺構3号内出土遺物6 …… 140
第111図　土器集中遺構3号内出土遺物7 …… 141
第112図　土器集中遺構4号　1 …… 143
第113図　土器集中遺構4号　2 …… 144
第114図　土器集中遺構4号内出土遺物1 …… 145
第115図　土器集中遺構4号内出土遺物2 …… 147
第116図　土器集中遺構4号内出土遺物3 …… 148
第117図　土器集中遺構4号内出土遺物4 …… 149
第118図　土器集中遺構4号内出土遺物5 …… 150
第119図　土器集中遺構4号内出土遺物6 …… 151
第120図　土器集中遺構4号内出土遺物7 …… 152
第121図　土器集中遺構4号内出土遺物8 …… 153
第122図　土器集中遺構5号 …… 154
第123図　土器集中遺構5号内出土遺物1 …… 155
第124図　土器集中遺構5号内出土遺物2 …… 156
第125図　土器集中遺構5号内出土遺物3 …… 157
第126図　土器集中遺構6号および出土遺物1 …… 158
第127図　土器集中遺構6号出土遺物2 …… 159
第128図　土器集中遺構7号および出土遺物 …… 160
第129図　土器集中遺構8号 …… 161
第130図　土器集中遺構8号内出土遺物 …… 162
第131図　古墳時代　土器出土状況図・甕1 …… 164
第132図　古墳時代　土器　甕2 …… 165
第133図　古墳時代　土器　甕3 …… 166
第134図　古墳時代　土器　甕4 …… 167
第135図　古墳時代　土器　甕5 …… 168
第136図　古墳時代　土器　甕6 …… 170
第137図　古墳時代　土器　甕7 …… 171
第138図　古墳時代　土器　甕8 …… 172
第139図　古墳時代　土器　甕9 …… 173
第140図　古墳時代　土器　甕10 …… 174
第141図　古墳時代　土器　甕11 …… 175
第142図　古墳時代　土器　甕12 …… 176
第143図　古墳時代　土器　甕13 …… 177
第144図　古墳時代　土器　甕14 …… 178
第145図　古墳時代　土器　甕15 …… 179
第146図　古墳時代　土器　丸底甕1 …… 181
第147図　古墳時代　土器　丸底甕2 …… 182
第148図　古墳時代　土器　壺1 …… 183
第149図　古墳時代　土器　壺2 …… 184
第150図　古墳時代　土器出土状況図・壺3 …… 185
第151図　古墳時代　土器　壺4 …… 186
第152図　古墳時代　土器　壺5 …… 187
第153図　古墳時代　土器　壺6 …… 188
第154図　古墳時代　土器　壺7 …… 189
第155図　古墳時代　土器　壺8 …… 190
第156図　古墳時代　土器　丸底壺・小型丸底壺1 …… 192
第157図　古墳時代　土器　丸底壺・小型丸底壺2 …… 193
第158図　古墳時代　土器　蓋 …… 195
第159図　古墳時代　土器　鉢1 …… 196
第160図　古墳時代　土器　鉢2 …… 197
第161図　古墳時代　土器　鉢3 …… 198
第162図　古墳時代　土器　鉢4 …… 200
第163図　古墳時代　土器　鉢5 …… 202
第164図　古墳時代　土器　高坏1 …… 203
第165図　古墳時代　土器　高坏2 …… 204
第166図　古墳時代　土器　高坏3 …… 205
第167図　古墳時代　土器　坩1 …… 207
第168図　古墳時代　土器　坩2 …… 208
第169図　古墳時代　土器　坩3 …… 209
第170図　古墳時代　土器　坩4 …… 211
第171図　古墳時代　土器　坩5 …… 212
第172図　古墳時代　土器　坩6 …… 213
第173図　古墳時代　土器　坩7 …… 214
第174図　古墳時代　土器　坩8 …… 215
第175図　古墳時代　土器　手捏1 …… 216
第176図　古墳時代　土器　手捏2 …… 217
第177図　古墳時代　土器　手捏3 …… 218
第178図　古墳時代　土器　坏蓋 …… 219
第179図　古墳時代　その他 …… 220

補遺

補遺　第1図　縄文時代中期後葉～後期　遺構…… 256
補遺　第2図　遺構配置図1 …… 257
補遺　第3図　遺構配置図2 …… 258
補遺　第4図　遺構配置図3 …… 259
補遺　第5図　遺構配置図4 …… 260
補遺　第6図　古代　遺構 …… 261
補遺　第7図　中世　遺構 …… 262
補遺　第8図　古代・中世　遺物1 …… 263
補遺　第9図　墨書土器分布図 …… 265
補遺　第10図　古代・中世　遺物2 …… 266
補遺　第11図　古代・中世　遺物3 …… 267

図版目次

巻頭図版１　上空から見た芝原遺跡
巻頭図版２　土器集中遺構４号
巻頭図版３　古墳時代の出土遺物
巻頭図版４　丸底甕，鋼鏡・破鏡

図版１　芝原遺跡遠景
図版２　①・②芝原遺跡近景　③作業風景　④竪穴住居跡１号
図版３　竪穴住居跡①２号　遺物出土状況　②・③銅鏡　④鉄鏃
図版４　竪穴住居跡　①３号　②４号
図版５　竪穴住居跡　①５号　②６号
図版６　竪穴住居跡①７号　②～④７号内出土遺物　竪穴状遺構⑤６号　⑥10号　⑦11号　⑧13号
図版７　竪穴状遺構　①16号　②14号　③18号　④19号　土坑　⑤１号　⑥２号
図版８　①土坑５号　②土坑６号　③６号内遺物出土状況④ピット８号　⑤ピット10号　⑥土器集中遺構２号
図版９　土器集中遺構　①・②１号　③～⑤３号
図版10　土器集中遺構　①～③４号　④７号　⑤８号
図版11　土器集中遺構　①５号１段　②２段目　③３段目　④A・B－24区土器集中出土状況
図版12　土器集中出土状況　①～③C・D－36・37区　④E－31区　⑤D－37区，⑥A・A'　－27区
図版13　①溝状遺構　②焼土遺構
図版14　遺物出土状況　①・②鋼鏡　③鋼鏃　④線刻文のある鉢形土器
図版15　弥生土器
図版16　①石包丁　②鉄鏃・銅鏃・勾玉・管玉
図版17　竪穴住居跡内出土遺物
図版18　竪穴状遺構内出土遺物
図版19　土坑内出土遺物
図版20　土坑・ピット・溝状遺構内出土遺物１
図版21　溝状遺構内出土遺物２
図版22　土器集中遺構内出土遺物１
図版23　土器集中遺構内出土遺物２
図版24　土器集中遺構内出土遺物３
図版25　土器集中遺構内出土遺物４
図版26　土器集中遺構内出土遺物５
図版27　土器集中遺構内出土遺物６
図版28　土器集中遺構内出土遺物７
図版29　土器集中遺構内出土遺物８
図版30　土器集中遺構内出土遺物９
図版31　土器集中遺構内出土遺物10
図版32　土器集中遺構内出土遺物11
図版33　土器集中遺構内出土遺物12
図版34　土器集中遺構内出土遺物13
図版35　土器集中遺構内出土遺物14　古墳時代　土器１
図版36　古墳時代　土器２
図版37　古墳時代　土器３
図版38　古墳時代　土器４
図版39　古墳時代　土器５
図版40　古墳時代　土器６
図版41　古墳時代　土器７
図版42　古墳時代　土器８
図版43　古墳時代　土器９
図版44　古墳時代　土器10
図版45　古墳時代　土器11
図版46　古墳時代　土器12
図版47　古墳時代　土器13
図版48　古墳時代　土器14
図版49　古墳時代　土器15
図版50　古墳時代　土器16
図版51　①弥生時代　鋸歯文付壺口縁部　②古墳時代　坏蓋・坏
図版52　古墳時代　土器（鋸歯文）１
図版53　古墳時代　土器（鋸歯文）２
図版54　補遺１　縄文時代中期後葉～後期集石　①１号～３号　②１号　③３号完掘状況・古代土坑　④検出状況　⑤完掘状況　⑥・⑦出土遺物
図版55　補遺２　①古代竪穴建物状遺構　②中世方形竪穴建物跡　③・④古代の出土遺物　⑤～⑧中世の出土遺物
図版56　補遺３　古代　墨書土器・刻書土器

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護と活用を図るため，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて各開発関係機関との間で協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部河川課（以下「県土木部」）は，中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化課（現文化財課，以下「県文化財課」）に照会した。

これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川床遺跡，松ヶ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が判明した。

この結果を受けて，県土木部・県文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県立埋文センター」）の三者で協議した結果，対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとした。

芝原遺跡の確認調査は県立埋文センターが担当し，平成10年度に実施した。その結果，予定地において49,600㎡の範囲に遺跡が残存していることが確認された。

これを受けて，再度三者で協議した結果，本調査は，県立埋文センターが担当し，平成11年度から平成16年度に調査を実施した。

報告書作成作業は，県立埋文センターが担当し，平成17年度から報告書作成作業に着手した。これまで，平成21年度に「芝原遺跡１縄文時代遺構編」，平成22年度に「芝原遺跡２縄文時代遺物編」，平成23年度に「芝原遺跡３古代・中世・近世編」を刊行した。そして，平成24年度も継続して作業を実施し，「芝原遺跡４弥生時代・古墳時代編」（本報告書）を刊行した。

第２節　事前調査

１　分布調査

（１）調査概要

県土木部は，中小河川改修事業（万之瀬川）の日置郡金峰町内（現南さつま市）における事業計画実施に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，県文化財課に照会した。

これを受けて県文化財課，金峰町教育委員会が平成５年度に事業区域内の分布調査を実施したところ，事業区域内に万之瀬川川床遺跡，松ヶ鼻遺跡，持躰松遺跡，渡畑遺跡，芝原遺跡，上水流遺跡の６遺跡の所在が明らかとなった。

２　確認調査

（１）調査概要

平成10年８月に県土木部・県文化財課・県立埋文センターの３者で今後の調査の進め方について協議した結果，平成10年度中に芝原遺跡の確認調査を実施することとした。

確認調査は，平成10年11月に実施した。

（２）調査体制

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	吉永　和人
調査企画	次長兼総務課長	尾崎　進
	調査課長	戸崎　勝洋
	調査課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	主任文化財主事	青崎　和憲
調査担当	文化財主事	安藤　浩
	文化財研究員	中村　和美
事務担当	主査	前屋敷裕徳
	主査	政倉　孝弘
	主査	溜池　桂子

３　調査経過

事業区域内に２m×10mを基本としたトレンチを，ほぼ50mおきに13本設定した（第１図）。確認調査面積は339㎡であった。

各トレンチの概要は，表１のとおりである。

表１　各トレンチの概要

トレンチ	遺物	遺構	時代	包含層までの深さ
１	有	有	中世・古墳・縄文後期	20 ～ 40cm
２	有	有	中世・古墳・縄文後期	30cm
３	有	有	中世・古代	20cm
４	有	無	中世	85cm
５	有	有	中世	70 ～ 85cm
６	有	有	中世・縄文後期	80cm
７	無	無	―――	―――
８	無	無	―――	―――
９	無	無	―――	―――
１０	無	無	―――	―――
１１	有	有	中世	20cm
１２	有	無	中世	70 ～ 110cm
１３	有	有	古墳	40cm

表１の結果のとおり，７トレンチから10トレンチを除く９か所のトレンチで，遺物包含層または遺構が確認された。７トレンチから９トレンチの範囲は，土層の堆積状況から旧河道に相当すると判断できた。事業区域内はすでに圃場整備が行われ，中世から古墳時代の包含層は地点によっては残存が悪く，包含層までの深さは極めて浅い状態であった。縄文時代については，やや深い砂層から出土している。

確認調査の結果から，芝原遺跡の範囲はC－１区からB～E－３８区（第１図）であり，遺跡面積は49,600㎡である。また，その時代は，縄文時代中・後期，古墳時代，古代，中世（前期・後期）であるが，地点によってその密度が異なっている。

この確認調査の結果を受け，県土木部・県文化財課・県立埋文センターの３者で協議し，現状保存や設計変更が不可能であることから，平成11年度から記録保存のための本調査を実施することとなった。

第３節　本調査

１　調査概要

本調査では，平成11年度及び平成12年度に築堤部分，平成13年度に新堤防と旧堤防の間，平成14年度に新堤防と旧堤防の間及び万之瀬橋橋脚部分，平成15年度に橋梁部及び樋門から新堤防の間，平成16年度に前年度の調査未了部分を調査した。（第２図参照）

２　調査体制

（平成11年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	吉永　和人
調査企画	次長兼総務課長	黒木　友幸
	調査課長	戸崎　勝洋
	調査課長補佐兼	
	第一調査係長	新東　晃一
	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財主事	安藤　浩
		西郷　吉郎
		栗林　文夫
事務担当	総務係長	有村　貢
	主事	溜池　佳子

（平成12年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井上　明文
調査企画	次長兼総務課長	黒木　友幸
	調査課長	新東　晃一
	調査課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼	
	第一調査係長	青崎　和憲
調査担当	主任文化財主事	中村　耕治
	文化財主事	栗林　文夫
	文化財研究員	福永　修一
	文化財調査員	橋口　亘
事務担当	総務係長	有村　貢
調査指導	鹿児島大学歯学部	
	助手	竹中　正巳
	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	
	助手	中村　直子

（平成13年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井上　明文
作成企画	次長兼総務課長	黒木　友幸
	調査課長	新東　晃一
	調査課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼	
	第一調査係長	青崎　和憲
	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財主事	栗林　文夫
		日高　正人
	文化財調査員	橋口　亘
事務担当	総務係長	前田　昭伸
	主査	今村孝一郎
調査指導	鎌倉考古学研究所	
	所員	馬淵　和雄
	鹿児島県立短期大学生活科学科	
	助教授	揚村　固
	鹿児島大学教育学部	
	助教授	日隈　正守
	鹿児島大学歯学部	
	助手	竹中　正巳

（平成14年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井上　明文
調査企画	次長兼総務課長	田中　文雄

	調査課長	新東　晃一
	調査課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼	
	第一調査係長	池畑　耕一
	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財主事	中村　和美
		日高　正人
		最上　優子
		黒川　忠広
	文化財調査員	橋口　亘
事務担当	総務係長	前田　昭仲
	主査	脇田　清幸
調査指導	鹿児島大学歯学部	
	助手	竹中　正巳
	株式会社九州テクノリサーチ	
		大澤　正巳

（平成15年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	木原　俊孝
調査企画	次長兼総務課長	田中　文雄
	調査課長	新東　晃一
	調査課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼	
	第一調査係長	池畑　耕一
	主任文化財主事	中村　耕治
調査担当	文化財主事	湯之前　尚
		中村　和美
		日高　正人
		元田　順子
		富山　孝一
		最上　優子
事務担当	総務係長	平野　浩二
	主事	池　珠美
調査指導	広島大学文学部	
	教授	河瀬　正利
	西南学院大学	
	教授	高倉　洋彰

（平成16年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	木原　俊孝
調査企画	次長兼総務課長	賞雅　彰
	調査課長	新東　晃一
	調査課長補佐	立神　次郎
	主任文化財主事兼	
	第二調査係長	彌榮　久志
	主任文化財主事	長野　眞一
調査担当	文化財主事	富山　孝一
		抜水　茂樹
		黒川　忠広
	文化財研究員	上床　真
事務担当	総務係長	平野　浩二

3　調査経過

調査の具体的経過については，調査日誌をもとに主な出来事を月単位で記していきたい。

◇　平成11年度

平成11年10月15日～
平成12年３月22日　実働83日

〈10月〉

器材搬入。A～E－7～11区のⅢ層掘り下げ。中世の溝検出（B～C－8～10）。

〈11月〉

A・B－3～10区，C～E－4～6区のⅢ層掘り下げ。土坑，溝状遺構，竪穴建物検出。C－4区から白磁碗出土。D－4境土内から青磁稜花皿の完形品出土。

〈12月〉

C・D－1～3区Ⅱ層掘り下げ。A'～C－16～22Ⅲ層上面検出。A'・A－20区で掘立柱建物跡検出。A－18区で土坑墓検出。B･C－18区で鍛冶遺構検出。A'・A－21・22区Ⅲ層掘り下げ。

〈1月〉

A～C－11～16区Ⅲ層上面検出。A～C－11～13区，B・C－14・15区，A～C－16～18区Ⅲ層掘り下げ。B・C－13～15区で畠検出。空中写真撮影（27日）。

〈2月〉

A～C－17・18区，A'～C－19～22区Ⅲ層掘り下げ。B・C－11・12区，A～C－13～17区Ⅳ層掘り下げ。D－15区で炉跡検出。B・C－13・14区Ⅴ層で畠検出。東側調査区埋め戻し（7日）。竹中正巳氏（鹿大歯学部助手）による土坑内人骨の鑑定（15日）。

〈3月〉

A～C－14～16区，A－17・18区Ⅲ層掘り下げ。A～C－17～19区Ⅵ層掘り下げ。縄文後期，晩期の土器多数出土。調査終了（22日）

◇　平成12年度

平成12年４月24日～

平成13年１月25日　実働107日

〈４月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（24 日）表土の剥ぎ取り，Ⅲ層面検出。

〈５月〉

Ａ～Ｃ－24～29 区のⅢ層上面検出。溝状遺構，ピット，畝状遺構検出。Ａ・Ｂ－20～24 区のⅢ層上面検出。近世土坑墓２基検出（古銭有り）。Ａ'～Ｃ－11～22 区Ⅵ層検出。かまど遺構切り取り保存。

〈６月〉

Ａ'～Ｃ－19～22 区Ⅳ層掘り下げ。Ａ・Ｂ－22～26 区Ⅲ層上面でピット，土坑，溝跡，掘立柱建物跡検出。Ａ'～Ｃ－21～29 区の空中写真撮影。Ａ'～Ｂ－27～29 区Ⅲ層掘り下げ。Ａ・Ｂ－11～17 区Ⅳ層掘り下げ。　Ａ'～Ｂ－15・16 区のⅣ層上面で遺構検出。

〈７月〉

Ａ'～Ｃ－20～29 区Ⅲ層掘り下げ及びⅣ層上面で遺構検出。Ａ'－29 区で竪穴建物検出。Ａ'～Ｃ－11～21 区のⅧ層掘り下げ。Ｂ－19 区竪穴建物検出。

〈８月〉

Ｂ－21～24 区，Ｃ－22～25 区のⅣ層の遺構掘り下げ。Ｃ－24～25 区で土坑墓３基（人骨３体）検出。Ｂ－17～19 区Ⅷ層掘り下げ。Ａ～Ｃ－20～23 区のⅥ層掘り下げ。Ａ'　～Ｂ－26～29 区Ⅳ層の遺構掘り下げ。Ａ・Ｂ－20～24 区Ⅵ層検出。

〈９月〉

Ａ～Ｃ－22～29 区Ⅵ層掘り下げ。Ａ－25 区で集石検出。Ａ－26 区から指宿式土器出土。Ａ'・Ａ－17～19 区Ⅱ層掘り下げ，遺構検出，Ⅵ層上面検出，掘り下げ。Ａ～Ｃ－21～23 区Ⅷ層掘り下げ。

〈10月〉

Ａ・Ｂ－26～28 区Ⅵ層掘り下げ。Ａ'・Ｂ－23～30 区Ⅷ層掘り下げ。Ａ～Ｃ－21～23 区Ⅷ層掘り下げ。

〈11月〉

Ａ'・Ｂ－30・31 区の表土剥ぎ，Ⅲ層掘り下げ。ピット，井戸跡，土坑，溝跡，掘立柱建物跡検出。

〈12月〉

Ａ'・Ｂ－30・31 区Ⅲ層検出のピット，土坑，竪穴建物の掘り下げ。Ⅳ層検出。Ⅳ・Ⅴ層重機で剥ぎ取り。

〈１月〉

Ａ'・Ｂ－30・31 区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。遺物取上げ。調査終了（25 日）

◇　平成13年度

平成13年５月７日～

平成14年３月19日　実働174日

〈５月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（７日）。Ｅ・Ｆ－９・10 区表土の剥ぎ取り。Ｅ～Ｈ－２～５区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。畠跡検出。Ｅ～Ｇ－２～５区Ⅳ層上面検出。ピット，木棺墓，大溝検出。Ｅ～Ｇ－７～12 区掘り下げ。大溝内人骨出土。土坑墓検出(Ｆ･Ｇ－８区)。Ｅ～Ｇ－５～12 区のⅡ層・攪乱層掘り下げ。Ｄ～Ｆ－11～14 区の攪乱層，溝の掘り下げ。畠跡検出。

〈６月〉

Ｄ～Ｇ－12 区の大溝内から青磁碗・皿の完形品出土。Ｅ－13 区の土坑墓から古銭，人骨出土。Ｄ～Ｇ－６～12 区Ⅱ層上面検出の遺構掘り下げ。ピット，芋穴，土坑，掘立柱建物，大溝検出。Ｅ－７区の土坑墓から人骨出土。Ｅ・Ｆ－７・８区Ⅳ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－13 区大溝検出。Ｅ・Ｆ－16・17 区Ⅱ層で畠跡検出。

〈７月〉

Ｅ・Ｆ－９・10 区，Ｄ～Ｆ－11・12 区，Ｄ・Ｅ－13 区，Ｄ～Ｆ－14 区Ⅵ層掘り下げ。Ｄ～Ｆ－15～23 区Ⅱ層掘り下げ。畠跡，土坑，かまど跡検出。

〈８月〉

Ｄ～Ｇ－15～22 区Ⅱ層掘り下げ。Ｅ・Ｆ－８区で炭化物，鉄滓の入った遺構検出。Ｅ・Ｆ－17・18 区で土器・石器の集積検出。Ｄ・Ｅ－14 区のⅥ層掘り下げ。

〈９月〉

Ｄ～Ｆ－18～28 区Ⅱ層掘り下げ。Ｅ・Ｆ－15～17 区Ⅱ層掘り下げ。畠畝跡多数検出。Ｄ－18 区から多口甕出土。

〈10月〉

Ｄ～Ｆ－25～31 区のⅡ層掘り下げ。Ｄ・Ｅ－20～26 区Ⅲ層検出。Ｃ～Ｆ－14～17 区Ⅵ層掘り下げ。Ｄ－24 区で焼失建物跡検出。

〈11月〉

Ｃ～Ｅ－23～31 区Ⅲ層掘り下げ。Ｄ～Ｆ－19～23 区Ⅳ層検出の遺構掘り下げ。

〈12月〉

Ｂ・Ｃ－25～29 区Ⅳ層掘り下げ。　Ｂ・Ｃ－30・31 区Ⅲ層掘り下げ。Ｃ・Ｄ－18～21 区表土剥ぎ，Ⅱ層掘り下げ。Ｂ・Ｃ－30・31 区で中世土坑墓検出。Ｅ－27 区で建物に伴う４面庇部検出。

〈１月〉

Ｂ～Ｅ－26～31 区Ⅲ層掘り下げ。２×３間の掘立柱建物検出。Ｃ・Ｄ－20～25 区Ⅱ層掘り下げ。Ｃ～Ｅ－24・25 区Ⅳ層上面検出。Ｂ・Ｃ－17 区のⅣ層上面で，かまど跡，古道，ピット検出。空中写真撮影（29 日）。

〈２月〉

Ｂ～Ｅ－24～31 区Ⅳ層掘り下げ。かまど跡，ピット検出。遺構の写真撮影。

〈３月〉

C～E－24～28区Ⅳ層掘り下げ。集石，かまど跡等の遺構実測。
調査終了（19日）。

◇　平成14年度
平成14年5月7日～
平成15年3月20日　実働157日
〈5月〉
器材搬入・オリエンテーション実施（7日）。C～E－18～25区Ⅵ層掘り下げ。集石検出。D～F－14・15区Ⅵ層上面検出。
〈6月〉
E－22～26区，D－24・25区，C－25区Ⅵ層掘り下げ。B・C－15・16区Ⅲ層掘り下げ。C・D－25区から指宿式土器多数出土。D－25区からサメの歯出土。旧堤防下の試掘実施（14日）。
〈7月〉
D・E－19～24区Ⅳ層掘り下げ。C－18～23区，D－19～22区Ⅷ層掘り下げ。C－15～17区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ。D－19区から春日式土器が部分的に集中して出土。C－16区から「開元通宝」出土。橋脚部表土剥ぎ（11日～23日）。
〈8月〉
橋脚部掘り下げ。C・D－20，24・25区Ⅷ層掘り下げ。D～G－30～32区で近世畠跡検出。D－32・33区で製鉄遺構検出。D－34区から成川式土器，須恵器，染付出土。C－36・37区で成川式土器出土。
〈9月〉
C・D－36・37区Ⅲ層掘り下げ。C～F－30～32区Ⅲb層掘り下げ。D～E－32・33区Ⅲ層掘り下げ。E－31区でかまど跡検出。E－32区で竪穴住居検出。
〈10月〉
D～F－30区，C・D－32～34区，C・D－36・37区Ⅲb層掘り下げ。E・F－30～32区，C・D－33・34区，C・D－36・37区Ⅳ層掘り下げ。E－31区の土坑墓から人骨検出。C－32区の方形竪穴建物跡から鋼製鏃検出。D－37区から黒髪式土器出土。
〈11月〉
C・D－32・32，36・37区Ⅳ層掘り下げ。C～D－33・34区Ⅷ層掘り下げ。F～H－23～29区表土掘り下げ。C・D－33・34区から市来式土器出土。遺構実測，写真撮影多数。
〈12月〉
E～G－26～29区Ⅲ層掘り下げ，畠跡検出。C～F－32区Ⅶ層掘り下げ。E・F－30・31，C・D－33・34，36～38区Ⅷ層掘り下げ。
〈1月〉
F・G－25～27区Ⅰb層掘り下げ。溝遺構検出。E～G－18～24区Ⅱ層掘り下げ。遺構検出。B・C－32・33，D－31・32，E・F－30～33区Ⅷb層掘り下げ。C・D－35・36区X層掘り下げ。鐘崎式土器出土。
〈2月〉
E・F－32区Ⅷb層掘り下げ。市来式土器多数出土。D・F－30・31区内から指宿式土器，春日式土器多数出土。E・F－30～32，B～D－32・33区Ⅸb層掘り下げ。集石，ピット，土坑検出。D～F－20～24区X層掘り下げ。F～G－17～21区Ⅳ層掘り下げ。空中写真撮影（21日）。
〈3月〉
E－30・31区Ⅸ層掘り下げ。指宿式土器多数出土。E・F－24・25区Ⅱ層掘り下げ。E－24区でかまど跡，焼土集中検出。D～F－19～24区X層掘り下げ。調査終了（20日）。

◇　平成15年度
平成15年5月6日～
平成16年3月22日　実働153日
〈5月〉
器材搬入・オリエンテーション実施（6日）。F・G－15～20区Ⅳ層掘り下げ。F～H－13・14区Ⅲ層掘り下げ。E・F－23～29区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器出土，土坑検出。F－28・29区で集石検出。E・F－26～29区Ⅵ層掘り下げ。E－30区で集石検出。E・F－19～23区の縄文時代後期包含層より，生木，ドングリ等の木の実多数出土。
〈6月〉
F・G－14～18区Ⅱ層掘り下げ。G－16・17区で焼土，炭化物検出。E・F－19～23，26～29，D・E－29・30区Ⅵ層掘り下げ。E・F－26～29区で集石9基，土坑，配石遺構1基検出。A・B－36・37区Ⅱ層掘り下げ。
〈7月〉
E・F－24～26区，D～F－26～30区，D－35，37区Ⅵ層掘り下げ。E・F－27区から磨消縄文土器出土。E－29区，D・E－30区で竪穴住居検出。A～C－35～37区Ⅱ層，D－36区Ⅳ層掘り下げ。
〈8月〉
作業員一部上水流遺跡へ（7日）。E－27～30区Ⅵ層掘り下げ。A～D－32～37区Ⅱ・Ⅲ層掘り下げ。D－34～36区Ⅲ層掘り下げ。製鉄炉検出。D－37区Ⅳ層掘り下げ。成川式土器溜り検出。空中写真撮影（6日）。
〈9月〉
A～C－32～35区Ⅲb層掘り下げ。B－33・34区で溝状遺構，須恵器，土師器溜り検出。B－34・35区で溝状遺構検出。A～C－36・37区Ⅲb層掘り下げ。C・D－37区Ⅳ層掘り下げ。D－37区から成川式土器溜り検出。

〈10月〉

A～C－31～37区Ⅲb層掘り下げ。ピット，土坑検出。A・B－36・37区から銅鏃出土。C－35区から市来式土器，磨製石斧出土。

〈11月〉

B・C－31～35区Ⅲb層掘り下げ。B－33・34区の古墳時代竪穴住居跡周辺から青銅製の小型倣製鏡出土。B－31区から入佐式土器出土。B・C－31～35区Ⅳ層掘り下げ。ピット，土坑検出。B－31区から市来式土器出土。F－34区の河川堆積層から「寛永通宝」出土。D～F－35～37区Ⅳ層掘り下げ。E－35区で焼土遺構検出。

〈12月〉

C～E－36～38区Ⅳ層掘り下げ。B～C－31～33，A～C－34・35区Ⅵ層掘り下げ。ピット検出。A・B－35区から市来式土器多数出土。

〈1月〉

B・C－31～35区Ⅵa・Ⅵb層掘り下げ。ピット検出。遺構掘り下げ，実測，写真撮影等を行う。Ⅵ層遺物多量に出土のため2mグリッドにて一括取り上げ（9日～）。

〈2月〉

B・C－31～35区Ⅵb，Ⅶ層掘り下げ。阿高式土器，春日式土器出土。B・C－35区から鋸歯状尖頭器出土。D－35区の溝状遺構から染付，滑石製品，龍泉窯系青磁出土。

〈3月〉

B～D－31～35区のⅧ～X層掘り下げ。ピット等の検出。B－34区で集石2基検出。A～C－36・37区Ⅵ層掘り下げ。調査終了（22日）。

◇　平成16年度

平成16年5月14日～

平成16年7月21日　実働37日

〈5月〉

器材搬入・オリエンテーション実施（14日）。A～C－36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B－36区から完形の縄文土器3点出土。赤色顔料付着の南福寺式土器（鉢形）出土。軽石製加工品出土。

〈6月〉

A～C－36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B－36区から足形土製品出土。

〈7月〉

A～C－36・37区Ⅵ～Ⅷ層の掘り下げ。B・C－36・37区で集石2基検出。北側土層断面清掃，写真撮影（5日）。

調査終了（21日）

第4節　整理・報告書作成

1　作成概要

県土木部・県文化財課・県立埋文センターの3者で報告書作成作業の進め方について協議した結果，中小河川改修事業（万之瀬川）の整理・報告書作成業務を平成25年度までとし，次のように計画した。

平成17年度　整理作業
　芝原遺跡・上水流遺跡
平成18年度　整理作業
　持躰松遺跡・芝原遺跡
　報告書刊行
　　上水流遺跡1
　「縄文時代後期から弥生時代編」
平成19年度　整理作業
　芝原遺跡
　報告書刊行
　　上水流遺跡2
　「古墳時代から近世編」
平成20年度　整理作業
　渡畑遺跡・芝原遺跡
　報告書刊行
　　上水流遺跡3
　「縄文時代前期・中近世遺物編」
平成21年度　報告書刊行
　上水流遺跡4
　「縄文時代前期末から中期前半編」
　渡畑遺跡1
　「縄文時代編」
　芝原遺跡1
　「縄文時代遺構編」
平成22年度　報告書刊行
　渡畑遺跡2
　「弥生時代から中近世編」
　芝原遺跡2
　「縄文時代遺物・土器編」
平成23年度　報告書刊行
　芝原遺跡3
　「縄文時代遺物・石器編」
　芝原遺跡4
　「弥生・古墳時代遺構編」
平成24年度　報告書刊行
　芝原遺跡5
　「弥生・古墳時代遺物編」
平成25年度　報告書刊行
　芝原遺跡6
　「古代・中世・近世編」

上記の計画に従い，平成21年度まで整理作業・報告書の刊行を進めてきたが，平成21年10月13日に3者で再度

協議した結果，報告書の内容と刊行予定を見直し，中小河川改修事業（万之瀬川）の整理・報告書作成業務を平成24年度までとした。

また，古墳時代に関しては遺物量が膨大なため，「古代・中世・近世編」と並行して２年計画で整理作業を進めていくこととし，刊行順を入れ替えた。よって，平成22年度以降の計画を次のように変更した。

平成22年度　報告書刊行
　渡畑遺跡２
　「弥生時代から中近世編」
　芝原遺跡２
　「縄文時代遺物編」
平成23年度　報告書刊行
　芝原遺跡３
　「古代・中世・近世編」
　整理作業
　　弥生・古墳時代の遺構・遺物
平成24年度　報告書刊行
　芝原遺跡４
　「弥生時代・古墳時代編」

２　作成体制

（平成17年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	上今　常雄
作成企画	次長兼総務課長	有川　昭人
	次長兼調査第一課長	新東　晃一
	主任文化財主事兼調査第一課第二調査係長	長野　眞一
作成担当	文化財主事	東郷　克利
		富山　孝一
		廣　栄次
事務担当	主幹兼総務係長	平野　浩二

（平成18年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	上今　常雄（18年7月まで）
		宮原　景信（18年8月から）
作成企画	次長兼総務課長	有川　昭人
	次長	新東　晃一
	調査第一課長	池畑　耕一
	主任文化財主事兼調査第一課第二調査係長	中村　耕治
作成担当	主任文化財主事	繁昌　正幸
	文化財主事	東郷　克利
		富山　孝一
		廣　栄次
		抜水　茂樹
		黒川　忠広
	文化財研究員	上床　真
事務担当	総務係長	寄井田正秀

（平成19年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	宮原　景信
作成企画	次長兼総務課長	平山　章
	次長	新東　晃一
	調査第一課長	池畑　耕一
	主任文化財主事兼調査第一課第二調査係長	中村　耕治
作成担当	文化財主事	溝口　学
		東郷　克利
		富山　孝一
		抜水　茂樹
		森　雄二
		黒川　忠広
	文化財研究員	上床　真
事務担当	総務係長	寄井田正秀

（平成20年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター所長	宮原　景信
作成企画	次長兼総務課長	平山　章
	次長	池畑　耕一
	調査第一課長	青崎　和憲
	主任文化財主事兼調査第一課第二調査係長	井ノ上　秀文
作成担当	文化財主事	溝口　学
		佐藤　義明
		木之下　悦朗
		黒川　忠広
	文化財研究員	上床　真
事務担当	総務係長	紙屋　伸一

（平成21年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下 吉美
作成企画	次長兼総務課長	齊藤 守重
	次長	青崎 和憲
	調査第一課長	中村 耕治
	主任文化財主事兼調査第一課第二調査係長	宮田 栄二
作成担当	文化財主事	溝口 学
		小林 晋也
		日高 勝博
	文化財研究員	上床 真
事務担当	総務係長	紙屋 伸一
	主査	高崎 智博

（平成22年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	山下 吉美
作成企画	次長兼総務課長	田中 明成
	次長	中村 耕治
	調査第一課長	長野 眞一
	調査第一課第二調査係長	八木澤一郎
作成担当	文化財主事	溝口 学
		小林 晋也
		池畑 耕一
	文化財研究員	平屋 大介
事務担当	総務係長	紙屋 伸一
	専門員	鳥越 寛晴
調査指導	早稲田大学理工学術院	
	准教授	山本 信夫
	鹿児島女子短期大学	
	教授	竹中 正巳

（平成23年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田 仁志
作成企画	次長兼総務課長	田中 明成
	次長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込 秀人
	調査第一課第二調査係長	大久保浩二
作成担当	文化財主事	関 明恵
		長崎慎太郎
		有馬 孝一
	文化財研究員	平屋 大介
事務担当	総務係長	大園 祥子
	主事	岡村 信吾
調査指導	早稲田大学理工学術院	
	准教授	山本 信夫
	鹿児島女子短期大学	
	教授	竹中 正巳

（平成24年度）

事業主体	鹿児島県土木部河川課	
作成主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
作成統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田 仁志
作成企画	次長兼総務課長	新小田 譲
	次長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込 秀人
	調査第一課第二調査係長	大久保浩二
作成担当	文化財主事	長野 眞一
		関 明恵
事務担当	総務係長	大園 祥子
	主事	岡村 信吾
調査指導	鹿児島大学	
	埋蔵文化財調査センター	
	准教授	中村 直子
	福岡市教育委員会	
		久住 猛雄
	鹿児島県考古学会副会長	
		池畑 耕一

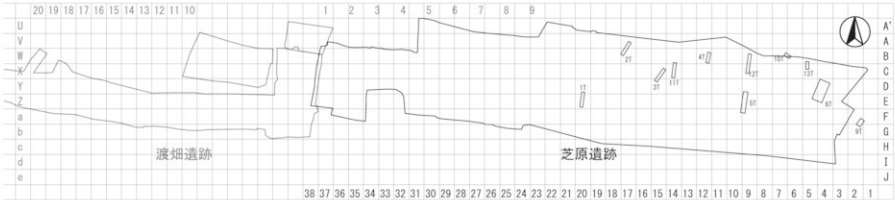
3　作成経過

芝原遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業は，平成17年度より実施した。作業は，県立埋文センターにおいて，他の万之瀬川流域の遺跡群の整理作業と同時進行で行った。

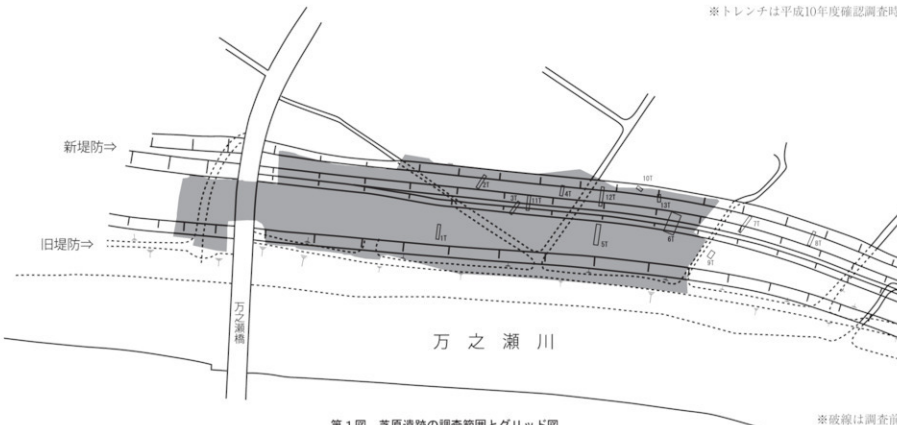
芝原遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡であることから，時代ごとに報告書の刊行計画を立て，出土遺物の洗浄・注記後，時代及び遺構ごとに土器・石器の分類を行った。

遺構は，調査担当者の記述・意見を基に，実測図・写真等から，その埋土・形状・大きさ等を再検討し，遺構の認定を行った。

膨大な遺物や遺構を効率的に処理するために，ジェットマーカーやパソコン・土器実測補助器の活用や，土器・石器の外部への実測委託も行った。

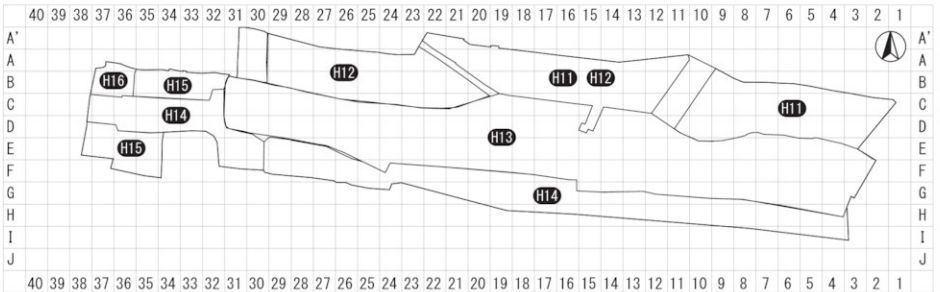


※トレンチは平成10年度確認調査時のもの



第１図　芝原遺跡の調査範囲とグリッド図

※破線は調査前の状況



第２図　年度別調査範囲グリッド図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

芝原遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町大字宮崎に所在し，万之瀬川下流の右岸，標高約4mの自然堤防上に立地する。

南さつま市金峰町の地形は大きく山地・シラス台地・沖積平野・砂丘に分けられる。山地は町の東半分を占め，標高200mを超える山系が南北に縦断する形で連なっており，金峰山や中岳などがある。シラス台地は，錦江湾奥部の姶良カルデラ噴出起源の入戸火砕流（シラス）が堆積したものである。

万之瀬川は，鹿児島市錫山に源を発し，南さつま市加世田万世に至る延長36km，流域面積367km²の二級河川である。河口周辺には砂丘が広く形成されており，下流域には沖積平野が広がっている。また，中流域には万之瀬川の蛇行によって浸食されたシラス台地がみられ，こうした砂丘地とシラス台地には，縄文時代から弥生時代にかけて良好な遺跡が存在している。

遺跡周辺では万之瀬川が大きく蛇行しており，かつ，加世田川や長谷川などの支流の合流点も近くにあり，周辺の沖積平野は，過去梅雨や台風の時期になるとたびたび水害に遭っている。特に享和三年（1803）の大洪水では河口が移動して現在の流れとなったが，それ以前は南側に蛇行して流れ，現在より約３km南の地点で東シナ海に注いでいたことがわかっている。また，明治35年測量の第３図と現在の航空写真（13頁下）を比較すると，本遺跡東側の村原付近で河川改修（昭和初期）が行われ，低地において蛇行する部分を直線化したことがわかる。

本遺跡から東を望むと，標高約200m前後の山々が南北を縦断している。このなかでも約７km北東方向にある金峰山は，旧町名（金峰町）の由来ともなった標高636mの薩摩半島中央部における最高峰で，古来より信仰の対象となっている。また，海上航行の際には，薩摩半島南西端にある野間岳と共に，ランドマーク的役割を果たしていた。

第２節　歴史的環境

南さつま市では，旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が数多く発見されている。これらの中には，学史上極めて重要な遺跡も含まれており，当地域が考古学研究の良好なフィールドであることを改めて示唆している。ここでは，旧石器時代から近世に至るまでを概観していきたい。

旧石器時代では，金峰町小中原遺跡（17）・加世田祝原遺跡からナイフ形石器が，金峰町山野原遺跡（9）・加世田平田尻遺跡から細石器が発見されている。平田尻遺跡では礫群も発見されている。

縄文時代草創期の遺跡としては，加世田に椈ノ原遺跡（43）がある。ここでは，連穴土坑・集石等の遺構が発見され，隆帯文土器・磨製石斧などの遺物が出土している。特に，出土した丸ノ状の磨製石斧は椈ノ原型と称されるほど特徴的である。平成9年には国史跡に指定された。また，加世田内山田にある志風頭遺跡では，連穴土坑から完形の隆帯文土器が出土している。この土器の放射性年代測定の結果，11,860±50年BPとされている。また，金峰町中尾遺跡からも同時期の遺物・遺構が確認されている。

縄文時代早期の遺跡には，草創期でも紹介した椈ノ原遺跡が著名である。昭和52年（1977）の発掘調査で出土した土器の中で6類として分類された資料は，早期前葉の土器型式設定を検討する上で重要な資料となった。金峰町小中原遺跡（17）では，前平式土器の円筒形・角筒形土器がまとまって出土している。特に，角筒形土器は，上半分は角筒形を，下半分は円筒形を呈しているものもあり，角筒形の発生を考える上で重要な資料となっている。

縄文時代前期の遺跡には，金峰町阿多貝塚（19），上焼田遺跡（20），上水流遺跡（37）がある。阿多貝塚（19）から出土した資料の一部は，「阿多Ⅴ類土器」（西唐津式土器）と称され，縄文時代前期土器研究に欠かすことのできない資料である。上焼田遺跡では，玦状耳飾が出土している。周辺からは，轟式土器が出土しているが，報告書では，轟式土器ではなく曽畑式土器ないしは春日式土器に伴うものとしてまとめている。上水流遺跡からは曽畑式土器が単独に出土しており，石器組成も含めて良好な資料となっている。また，前期末から中期初頭とされる深浦式土器も大量に出土している。

縄文時代中期の遺跡としては，上水流遺跡から大型の集石と大量の春日式土器が出土しており，河川沿いの低地における遺跡の在り方が注目される。石堂遺跡や上焼田遺跡では並木式土器・阿高式土器が出土している。

縄文時代後期の遺跡には，本遺跡の他に先述の上水流遺跡がある。上水流遺跡からは後期前半の指宿式土器や松山式土器が出土している。指宿式土器の底部圧痕からは，従来大隅半島に分布すると考えられていた「スダレ状圧痕」が確認されている。また，本遺跡と隣接する渡畑遺跡からは本遺跡出土の足形土製品と接合する資料が確認されている。

縄文時代晩期の遺跡としては，上加世田式土器の標識遺跡である上加世田遺跡（45）がある。この遺跡からは，大型土坑等の遺構が検出されている。また，土器や石器の他に，土偶や軽石製岩偶・石棒などの祭祀をうかがわせる資料や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など様々な遺

物が出土している。なお，この上加世田式土器は，近年の広域編年研究により縄文時代後期に位置づける説もある。また，金峰町下原遺跡では，縄文時代晩期終末から弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って朝鮮半島系無文土器・籾痕土器・石包丁等が出土している。

弥生時代から古墳時代にかけて，市内では数多くの遺跡が発見されている。金峰町高橋貝塚（4）は，弥生時代前期を主体とする貝塚で，万之瀬川の支流堀川の右岸，標高11mの洪積世砂丘上にある。昭和37・38年に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果，縄文時代晩期の夜臼式土器と高橋Ⅰ式土器の共伴関係が確認されたことや，南海産の貝を素材とした貝輪や南海産貝が出土したことなど，学史的に重要な遺跡である。平成18（2006）年には，鹿児島国際大学が隣接する高橋遺跡の発掘調査を実施し，弥生時代に属する遺構を確認した。また，金峰町下小路遺跡（5）は，弥生時代中期の須玖式土器を用いた甕棺が検出された埋葬遺跡で，棺内の人骨にはゴホウラ製の貝輪が着装されていた。金峰町松木薗遺跡（8）では弥生時代後期の環濠の可能性のある大溝が松木薗式土器を伴って発見されている。金峰町中津野遺跡（14）では，床面が3段構造になる竪穴住居跡が発見され，最下段である3段目からは完形品が40個出土しているという。また，ここは中津野式土器の標識遺跡でもある。この中津野式土器は，弥生時代終末の土器とする考えの他に，一部は古墳時代に入る土器があるという説があり，明確には位置付けがなされていない。現状としては，弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として認識されている。

古墳時代の遺跡には，加世田小湊にある奥山古墳（六堂会古墳）が特筆される。この遺跡は，昭和6（1931）年に発見され，石棺の内部には赤色顔料が塗られており，ガラス玉や長さ180cmの鉄剣，刀子が副葬されていた。平成17（2006）年に実施された鹿児島大学の再調査の結果，周溝の一部と考えられる遺構が発見され，4世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。金峰町白糸原遺跡（25）では，竪穴住居跡19軒が検出され，辻堂原式土器から笹貫式土器にかけての集落であるとされる。上水流遺跡からは竪穴住居跡11軒が検出されている。遺構内から，初期須恵器の出土がみられた。また，中津野遺跡に隣接する南下遺跡では，木製品をはじめ古墳時代の良好な資料が得られている。

古代にも多くの注目される遺跡が発見されている。金峰町小中原遺跡（17）では多くの掘立柱建物跡と「阿多」という字がヘラ書きされた土器などが発見されている。これらのことから阿多郡衙の可能性が考えられている。金峰町山野原遺跡（9）でも多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器などが発見されている。また，祭祀遺構や土師器焼成遺構の可能性が考えられる遺構が発見されており，在地豪族に関わる施設であった可能性が考えられている。加治屋遺跡では，土師甕を用いた埋設遺構と竪穴住居跡とされる遺構が確認されている。本遺跡(30)，持躰松遺跡（28），上水流遺跡（37）でも墨書土器をはじめ多数の古代遺物が発見されている。

荒平窯をはじめとする中岳山麓古窯跡群は金峰町にあり，9世紀から10世紀にかけて稼働していたと考えられる須恵器窯である。発掘調査は行われていないが，表面採集された遺物が熊本県荒尾市荒尾窯跡群の製品との類似性が高いことから，人的・物的な交流があったと考えられている。

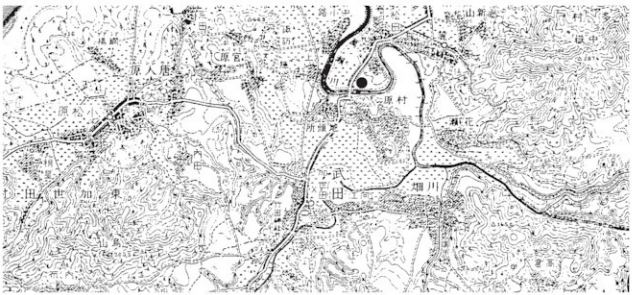
中世には，ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって，阿多郡は唯一大宰府領であった。その後13世紀前半には，金峰町が属する阿多郡は阿多氏･鮫島氏などによって支配を受け，加世田が属する加世田別府は別符氏・塩田氏などによって支配を受けることとなる。城館跡・山城跡も多く所在しており，上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻﨑城跡などは発掘調査が行われている。加世田益山の寺園氏宅には，二重の堀があったと伝えられ，現在もその痕跡が残っている（上東2004）。中世のものであるか明らかでないが，館であった可能性も考えられる。白糸原遺跡では，中世末から近世の土坑墓が24基検出された。この中からは，南海産の夜光貝が出土している。加えて，竪穴建物跡や双魚文青磁なども発見されている。

古代から中世においては，本遺跡も属する万之瀬川流域の遺跡群も近年特に注目されている。全国各地の窯で焼かれた陶器類や，中国からの輸入陶磁器類などが多量に出土した持躰松遺跡や本遺跡を中心に，広範な交流の拠点であったことを示すものであり，今後大いに検討されるべき遺跡群である。

近世においては，前述の上水流遺跡の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川系）等が，福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。また，万之瀬川河口付近を含む吹上浜海岸では，東南アジアとの交易に関連するという指摘のある漂着遺物が確認されている（橋口1999）。

外城制度（天明４［1784］年，外城から郷に改称）に関しては，行政の中心である地頭仮屋が阿多と田布施の２か所，武士の居住区である麓集落はその周辺にあった。渡畑周辺に点在した阿多麓集落は，享保13年（1728年）の新田川掘削工事の完成後に台地上に移転している。新田開発のため，万之瀬川上流の南九州市川辺町腰ヶ原より16kmに及ぶ用水路を宮崎の台地に引く難工事であった。この時の工事監督は，後の木曽川宝暦治水で奉行を務めている。商人の居住区である野町は，金峰地域では阿多公民館付近と池辺の２か所にあった。また，藩の浄土真宗禁制に対し，かくれ念仏講により信仰が続けられた。

交通網では，薩摩半島を縦貫する近世街道の「伊作筋」



第３図　遺跡周辺の旧地形　（明治35年測量）

上空から見た芝原遺跡周辺　（国土画像情報国土交通省より）

第４図　周辺遺跡位置図

表２周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代							備考
			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	
1	上ノ山後遺跡	南さつま市金峰町高橋上ノ山後			●	●	●	●		
2	上ノ山遺跡	南さつま市金峰町上ノ山			●					
3	草原町遺跡	南さつま市金峰町宮崎				●				
4	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋			●					「九州考古学」18
5	下小路遺跡	南さつま市金峰町高橋下小路			●					
6	牟田城跡	南さつま市金峰町高橋字真門砂入						●		中世城館跡二階堂氏
7	篠田遺跡	南さつま市金峰町尾下					●			
8	松木薗遺跡	南さつま市金峰町尾下松木薗			●					「鹿児島考古」14号
9	山野原遺跡	南さつま市金峰町尾下字山野原		●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(5)(7)
10	鳥追薗遺跡	南さつま市金峰町尾下鳥追薗		●	●		●			
11	尾下遺跡	南さつま市金峰町尾下			●					
12	中津野下原遺跡	南さつま市金峰町中津野下原			●					「鹿児島県考古学紀要」2号
13	平畑遺跡	南さつま市金峰町中津野		●	●	●		●		金峰町埋文報(8)
14	中津野遺跡	南さつま市金峰町中津野 1119			●					
15	中津野城跡	南さつま市金峰町新山						●		別称「江田城」
16	立野原遺跡	南さつま市金峰町新山				●				
17	小中原遺跡	南さつま市金峰町新山小中原	●	●	●	●	●	●		金峰町埋文報(5)県埋文報(57)
18	野村原遺跡	南さつま市金峰町中津野				●				
19	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎上焼田		●	●	●				人類学史講座第1巻金峰町埋文報(1)
20	上焼田遺跡	南さつま市金峰町宮崎上焼田	●	●	●	●	●	●		金峰町埋文報(15)
21	上花立遺跡	南さつま市金峰町								
22	万之瀬川床遺跡	南さつま市加世田益山万之瀬川川床			●	●				「鹿児島考古」12号
23	上川原遺跡	南さつま市金峰町宮崎上川原			●	●				
24	古城跡	南さつま市金峰町宮崎西						●		別称「古ノ城」
25	白糸原遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●	●	●		●		
26	上宮寺跡	南さつま市金峰町松田南						●		坊津一条院の末寺
27	松田南遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●		●		●		
28	持躰松遺跡	南さつま市金峰町松田南		●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(10)県埋セ報(120)
29	渡畑遺跡	南さつま市金峰町宮崎字渡畑・渡原		●	●	●	●	●	●	県埋セ報(151)(159)
30	**芝原遺跡**	南さつま市金峰町宮崎字芝原・濱崎		●	●	●	●	●	●	**本報告書**県埋セ報(149)(158)(170)
31	市薗遺跡	南さつま市金峰町宮崎		●				●		
32	阿多城跡	南さつま市金峰町阿多						●		阿多平四郎忠景
33	鶴之城跡	南さつま市金峰町花瀬鶴之城						●		
34	大迫田遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●		金峰町埋文報(14)
35	花瀬今城原遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原		●	●	●				金峰町埋文報(14)
36	上水流Ｄ遺跡	南さつま市金峰町花瀬						●		金峰町埋文報(14)
37	上水流遺跡	南さつま市金峰町花瀬上水流・森山		●	●	●	●	●	●	金峰町埋文報(9)県埋セ報(113)(121)(136)(150)
38	上水流Ｃ遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●		●		●		金峰町埋文報(14)
39	花瀬遺跡	南さつま市金峰町花瀬今城原				●		●		
40	針原遺跡	南さつま市金峰町花瀬		●			●			金峰町埋文報(14)
41	加治屋遺跡	南さつま市加世田川畑岩山		●	●	●	●			県埋文報(82)
42	二頭遺跡	南さつま市加世田川畑 3377 他		●		●		●		南さつま市埋文報(1)
43	栫ノ原遺跡	南さつま市加世田村原栫ノ原	●	●	●	●		●	●	国指定遺跡加世田市埋文報(1)(5)(15)(17)(20)
44	永田遺跡	南さつま市加世田川畑永田				●				
45	上加世田遺跡	南さつま市加世田川畑上加世田 2715 他		●	●	●	●	●		加世田市埋文報(3)(4)(13)
46	杉本寺跡	南さつま市加世田川畑杉本寺			●					蔵骨器出土(加世田市史掲載)
47	別府城跡	南さつま市加世田武田城ノ山			●	●		●	●	加世田市埋文報(10)
48	佐方原・内田原遺跡	南さつま市加世田唐仁原佐方原他				●				
49	下東堀遺跡	南さつま市加世田宮原下東堀 176 他	●	●		●				
50	田武平遺跡	南さつま市加世田益山田武平		●		●				
51	油免・本寺遺跡	南さつま市加世田宮原油免他		●		●				県埋セ報(148)
52	西荒田遺跡	南さつま市加世田益山西荒田		●	●	●	●			加世田市報(7)
53	宮ノ脇・口畑遺跡	南さつま市加世田宮原宮ノ脇他				●				
54	陣跡	南さつま市加世田益山陣						●		
55	内ノ田遺跡	南さつま市加世田益山内ノ田	●			●		●	●	
56	中小路遺跡	南さつま市加世田益山中小路・屋郷			●	●		●	●	加世田市報(6)(19)
57	浜堀遺跡	南さつま市加世田宮原浜堀				●				
58	鵜ノ塚陣跡	南さつま市加世田益山宇都						●		
59	上山野遺跡	南さつま市加世田益山上山野			●	●				
60	川ノ畑遺跡	南さつま市加世田益山川ノ畑			●	●				
61	高橋遺跡	南さつま市金峰町高橋字高橋他			●					鹿国大研究報第５号
62	天神原遺跡	南さつま市金峰町大字宮崎神原		●	●	●				
63	下堀遺跡	南さつま市金峰町大字宮崎上焼田・下堀		●	●	●		●	●	金峰町埋文報(20)
64	堀川貝塚	南さつま市金峰町大字宮崎下堀		●						「鹿児島考古」10
65	東柳原遺跡	南さつま市加世田益山東柳原			●	●				
66	松ヶ鼻遺跡	南さつま市加世田益山松ヶ鼻				●			●	平成９年度確認調査

と旧南薩鉄道が，渡畑遺跡内で現在の国道270号線と併走していた。「伊作筋」は加世田の村原渡口で渡船し，渡畑を斜行し上宮寺前，伊作峠，谷山を経由して鹿児島と結んだ。南薩鉄道は枕崎市から日置市伊集院を経由し，国鉄線で鹿児島市と連絡していた。大正３年（1914）に始まり，昭和58年(1983)の豪雨災害で翌年廃線となった。

近・現代においては，第二次世界大戦時，加世田の唐仁原・高橋に，陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ，戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となった。

参考文献

田畑智子（2002）「鹿児島県万之瀬川流域の地形発達」『大分地理』15:9-14 大分大学教育福祉科学部地理学教室

上東克彦（2004）「鹿児島県薩摩半島に伝世された華南三彩－クンディと果実形水注－」『貿易陶磁研究』24号　日本貿易陶磁学会

橋口　亘（1999）「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19号　日本貿易陶磁学会

加世田市教育委員会

（1985）「上加世田遺跡１」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（３）

（1987）「上加世田遺跡２」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（４）

（1995）「千河原遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(12)

（1999）「志風頭遺跡・奥名野遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)

金峰町教育委員会

（1978）「阿多貝塚」『金峰町埋蔵文化財発掘調査』(１)

（1998）「上水流遺跡－第１次調査－」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(９)

（1998）「持躰松遺跡　第１次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)

（2000）「小園遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)

鹿児島県教育委員会

（1991）「小中原遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(57)

鹿児島県立埋蔵文化財センター

（2007）「上水流遺跡１」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(113)

（2007）「持躰松遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(120)

（2008）「上水流遺跡２」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(121)

（2009）「上水流遺跡３」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(136)

（2010）「芝原遺跡１」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(149)

（2010）「上水流遺跡４」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(150)

（2010）「渡畑遺跡１」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(151)

芝原遺跡周辺（下流側から持躰松・渡畑・芝原の各遺跡）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法

平成10年度に行われた確認調査をうけて，平成11年度から平成16年度に本調査を行った。

確認調査の結果，遺跡の範囲は，国家座標X＝-174390からX＝-174490，Y＝-63900からY＝-63500であり，調査区を国家座標をもとに10mグリッドを設定して発掘調査を実施した。

第１図に示すように，南北方向にA′，A，B…としてⅠまで，東西方向に１，２，３，…として38までを付け，A－37区などと呼称することとした。A′～E－１～31区（万之瀬川の新築堤防部分）の調査を平成11年度・12年度に行い，B～H－２～31区（新堤防と旧堤防の間）を平成13年度，C～I－３～38区（新堤防と旧堤防の間及び万之瀬川橋橋脚部分）を平成14年度，A～C－31～36区及びD～F－34～38区（橋梁部及び樋門から新堤防の間）を平成15年度・平成16年度に調査を行った。

発掘調査は，重機でⅠa層（表土・耕作土）を除去した後，遺物包含層であるⅠb層からX層までを人力で掘り下げた。また，場所によりⅡ層以下に無遺物層が認められる場合も重機で除去した。最終的には重機で下層確認のためのトレンチを設定して掘り下げた。

これらの調査の結果，Ⅰb層からX層にまで，縄文時代中期から近世の数多くの遺構，遺物が発見された。

遺物の出土量は膨大であったため弥生時代以降の遺物は基本的に層とグリッドごとに一括して取り上げた。また，縄文時代の遺物は，原則として平板実測及びレベル測定により現位置を記録し取り上げた。ただ，小グリッドごとに一括して取り上げたものもある。

遺構は検出状況を写真で撮影し，位置を記録してから個別に実測を行った。必要に応じて実測途中と実測後の状況も写真撮影した。図化作業に関しては，作業の効率化のため業者委託を実施した。

２　遺構の検出と認定

各遺物包含層上面を検出した際，精査を行い，土色及び土質の違いから遺構の有無を確認した。また，遺構内外で異なる土の境界をたどり，平面的に遺構の輪郭（平面プラン）を確定していった。

その後，主軸を確認し，土層確認用のベルトを設定し，遺構の掘り下げを行った。その際，埋土の色・質・硬さなどの違いを比較し掘り下げた。

さらに，遺構を検出した層や埋土状況，遺構の形態，遺構内出土遺物などの情報から遺構の帰属時期の検討を行った。

３　整理作業の方法

古代から近世の遺物については，平成22・23年度に分類・選別，接合，補強・復元にかかり，平成23年度に実測・拓本・トレース等を行った。整理作業の具体的経過については，主な作業を年度ごとに記していきたい。

◇平成17年度

洗浄，注記，区・層ごとの分類，レベル入力等

◇平成18年度

注記，区・層ごとの分類，人骨処理，鉄器等のクリーニング　等

◇平成19年度

注記，区・層・遺構ごとの分類，人骨処理，鉄器等のクリーニング，石器実測委託　等

◇平成20年度

縄文時代遺構内出土土器分類・選別，接合・復元・補強，実測，拓本，縄文時代遺構内出土石器仕分け・選別，実測委託・縄文時代遺構配置図作成，集石トレース，鉄器等のクリーニング　等

◇平成21年度

土層図作成・トレース，縄文時代土坑トレース，縄文時代遺構内出土土器実測・実測委託，写真撮影，レイアウト，整理指導，原稿執筆，縄文時代包含層出土遺物接合，復元，形式分類，実測　等

「芝原遺跡１　縄文時代遺構編」刊行

◇平成22年度

縄文時代包含層出土土器選別，実測，実測委託，拓本，復元・補強，トレース，縄文時代包含層出土土器選別，実測，実測委託，トレース，レイアウト，写真撮影，整理指導，原稿執筆，弥生・古墳時代出土土器接合　古代・中世遺物分類　等

「芝原遺跡２　縄文時代遺物編」刊行

◇平成23年度

古墳時代から近世までの遺構選別・トレース，遺構内出土遺物実測・トレース，包含層出土遺物実測・トレース，写真撮影，レイアウト，整理指導，原稿執筆，古墳時代遺物分類・接合・復元・実測・トレース　等

「芝原遺跡３　古代・中世・近世編」刊行

◇平成24年度

弥生時代から古墳時代までの遺構選別・トレース，遺構内出土遺物実測・トレース，包含層出土遺物実測・トレース，写真撮影，レイアウト，整理指導，原稿執筆　等

「芝原遺跡４　弥生時代・古墳時代編」刊行

報告書作成指導委員会
　平成24年11月26日　井ノ上次長ほか８名
報告書作成検討委員会
　平成24年11月26日　寺田所長ほか11名

第２節　層序

芝原遺跡は万之瀬川中流の右岸にあり，標高約４ｍの自然堤防上に立地する遺跡である。表３に平成15年の調査時に作成された本遺跡の基本土層を示す。

万之瀬川は過去に何度も大きな洪水を繰り返しており，その氾濫堆積層などを含んでいるので，遺跡内において必ずしも安定した層序を成している状況ではなかった。加えて各年度ごとに遺跡を分断して調査を進めざるをえなかった結果，各年度の層序の整合がとれない状況も発生した。

例えば平成12年度のＢ－19区Ⅶ層からは春日式土器が集中して出土しているのに対し，平成13・14年度のⅨ層としたものからは，春日式土器より新しい市来式土器が出土している。このため平成22年度に刊行した「縄文時代遺物編」では，平成12年度の春日式土器出土集中区のみ独立させ，それ以外に関しては一括して取り扱わざるをえなかった。

整理作業を進める中でも，基本土層では中世前期の包含層とされているⅡａ層から，近世前期の遺物が多数出土していることが確認され，基本土層の年代に疑問を呈する状況となった。

よって基本土層はあくまでもめやすとし，整理作業は基本土層にある包含層年代には依らず，遺物の年代観による時期決定を優先して作業を進めた。

ちなみにⅡｂ層の白色砂層については，遺跡を広く覆っていることから，河口を現在の位置に変えた享和三年（1803）の大洪水時のものと仮定すれば，その下位から近世前期の遺物が出土することに矛盾はないことも考えられる。

基本土層以外では，旧堤防部分に縄文時代後期土器を伴う泥炭層がみられた。また，その他の調査区でも河川氾濫時の堆積層とみられる砂層が所々みられた。

本遺跡では明確な火山灰層はみられなかったが，本遺跡上流の上水流遺跡では，縄文時代晩期包含層であるⅢｂ層中に，開聞岳起源の「灰ゴラ」がブロック状に含まれていたと報告されている。芝原遺跡では部分的に見られたにせよ，明確なブロック状の堆積は見られなかった。

表３　芝原遺跡の基本土層図（平成 15 年調査時）

Ⅰ層	灰褐色土，現表土	
Ⅰｂ層	灰褐色砂質土	中世～近世前期包含層
Ⅱａ層	茶褐色砂質土 炭化物・赤褐色の焼土を含む	中世中期包含層
Ⅱｂ層	白色砂層 万之瀬川の洪水層	
Ⅲａ層	黒色砂質土	中世前期包含層
Ⅲｂ層	明黒褐色砂質土	古代，古墳時代包含層
Ⅳ層	黄褐色砂質土	弥生時代包含層
Ⅴ層	暗黄褐色砂質土	
Ⅵａ層	黄橙色砂質土	縄文時代後・晩期包含層
Ⅵｂ層	暗茶褐色砂質土 炭化物多く含む	縄文時代後期包含層
Ⅶ層	白色砂層	部分堆積
Ⅷ層	茶褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
Ⅸａ層	白色砂層	
Ⅸｂ層	にぶい黄橙色砂層	
Ⅹ層	にぶい黄褐色砂質土	縄文時代中期～後期包含層
Ⅺ層	黄褐色砂質土	

土層堆積状況

第３節　調査の成果

１　弥生時代の調査

（１）調査の概要

弥生時代については，遺構は検出されなかった。遺物は特にＢ～Ｄ－33～37区で多く出土したが，総点数は約200点と少ない。弥生時代単独の包含層は確認されず，Ⅲｂ層およびⅣ層より古墳時代の遺物とともに出土している。特筆すべき出土遺物としては，弥生時代終末期頃のものと思われる小型仿製鏡３面と破鏡２点，銅鏃が２点出土した。そのうち小型仿製鏡１点は古墳時代の竪穴住居跡２号から，銅鏃１点は土器集中遺構1号から出土しているため，古墳時代の遺構の中で掲載した。

（２）遺物（第５～９図）

Ⅰａ類（第５図１）

河口貞徳により命名された井出下式土器〔註１〕で，夜臼Ⅱ式土器及び板付Ⅰ式土器と並行するとされるもので，中町馬場甕Ⅰａ類〔註２〕に該当する。

１は，口縁部と胴部屈折部に小さな刻目突帯文を施す甕で，胴上部で屈折し，口縁部突帯文は口縁端部から若干下がった位置にある。外面は丁寧にナデ，内面口縁部周辺は指頭押圧で調整する。器壁は薄く，赤色粒や1mm未満の長石や石英を主とする精選された胎土を使用する。口径22.4cm。

〈註１〉　河口貞徳「串木野郷土史」「日本の古代遺跡鹿児島」1988

〈註２〉　川口雅之編「中町馬場遺跡Ⅱ」「薩摩郡里村教育委員会」2004（現：薩摩川内市里町）※本遺跡の弥生式土器群は，層位毎の把握や遺構内一括の把握等ができないことから，型式分類の把握に努めることとし，類似性の高い中町馬場遺跡の分類に準拠した。なお，その類似性の背景には，両遺跡が本県の西海岸に立地し，東シナ海を共有すること等があると推測される。

Ⅰｃ類（第５図２）

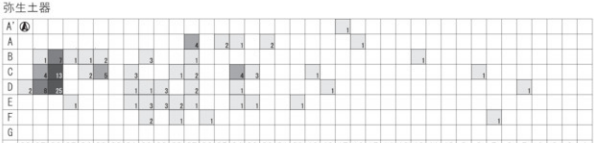
高橋Ⅰ・Ⅱ式土器で，板付Ⅱ式土器並行で，中町馬場甕Ⅰｃ類に該当する。

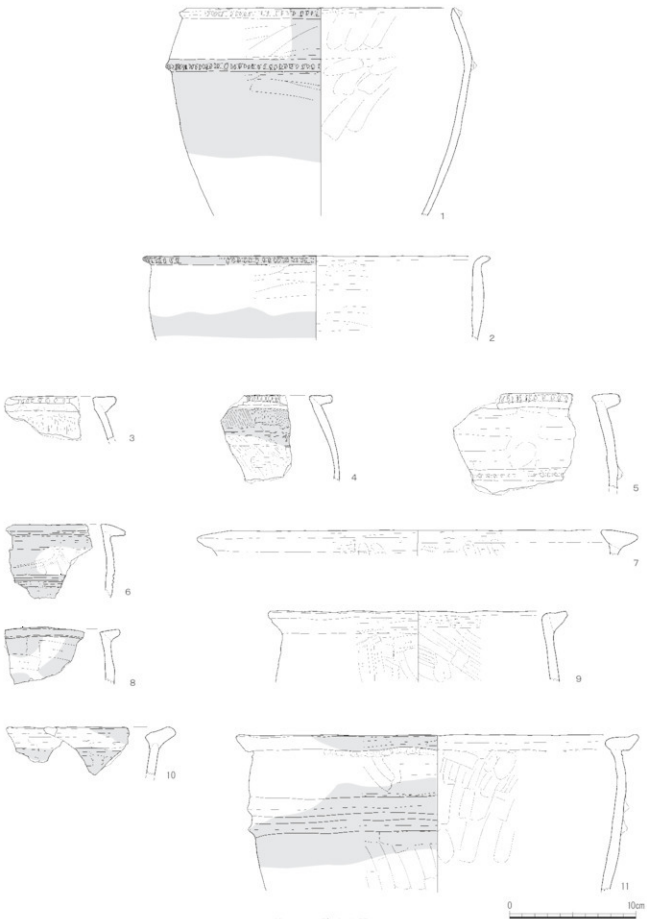
２の口縁端部は，緩やかに外反する如意形口縁で，口唇部は内外面とも密に刻まれる。復元口径27.6cm。

Ⅰｄ類（第５図３～５）

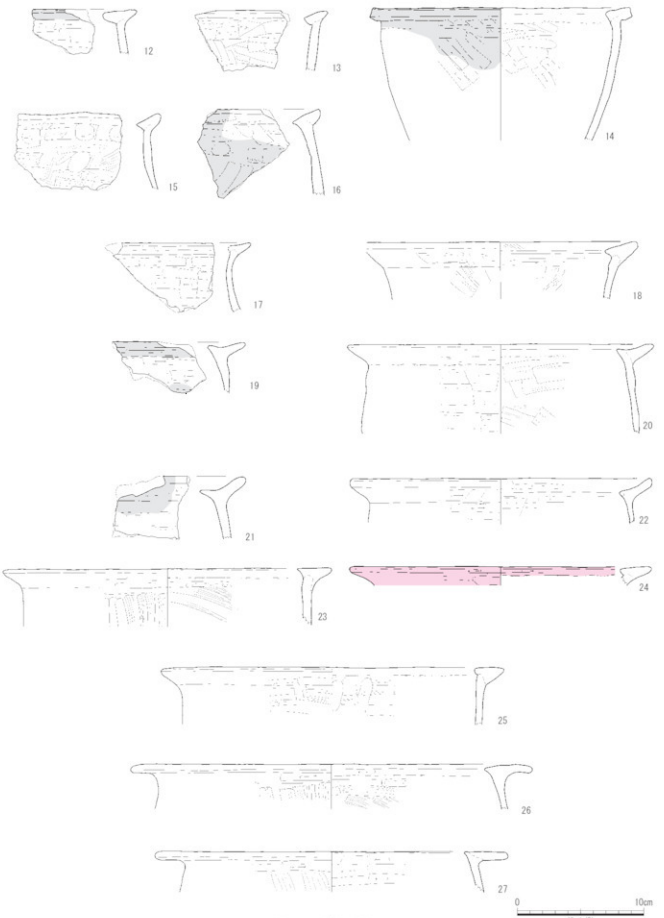
入来Ⅰ式土器で，城ノ越式土器並行とされ，中町馬場甕Ⅰｄ類に該当する。口縁部突帯文が肥大化し，口唇部は平坦面を形成する。

３はカクセン石等の黒色鉱物が目立つ胎土で，灰白7.5YRを呈す。４は端正な造りで，口縁部直下は刷毛目調整で仕上げる。５の口縁部突帯文は，肥大化した平坦口縁で，胴部は緩やかに膨らむ。口唇部をヘラで刻み，胴





第５図　弥生土器１



第６図　弥生土器２

部上位に小さな刻目突帯文を施す。1mm程の赤色粒や黒色鉱物が目立つ胎土で，浅黄橙7.5YRの特徴的な器肌をなす。

Ⅲa類（第5図6～7）

入来Ⅱ式土器で，中町馬場薗Ⅲa類に該当する。

6は典型的な入来Ⅱ式土器と判断したもので，口縁部が下方へ垂れ，口唇部は浅く凹む。7の復元口径は34.4cmで，口唇部は浅く凹む。

Ⅳa類（第5図8～11）

黒髪Ⅰ式土器で，中期前葉後半に比定され，中町馬場薗Ⅳa類に該当する。

9は復元口径21.2cmで，厚みのある口縁部が上方へ傾き，胴部が弱く張る。8・10の口縁部も同様の特徴を持つ。11は復元口径32cm，断面三角形の口縁部は上方へ傾き，口唇部が若干凹む。胴部外面はヘラミガキ，内面は縦方向に小さくナデられ，突帯文を中心に多量の煤状炭化物が付着する。

Ⅳb類（第6図12～20）

黒髪Ⅱ式土器で，中期前葉後半に比定され，中町馬場薗Ⅳb類に該当する。

14は復元口径20.5cm，口縁部は上方へ傾き，口唇部が若干凹む。両面とも丁寧にナデて仕上げ，外面に多量の煤状炭化物が付着する。15の外面はヘラミガキ，内面は工具や指等でナデて仕上げる。16の外面はヘラミガキ，内面は工具や指等でナデて仕上げ，15より一回り大型となる。18は口縁部内面の突出が強く，浅黄橙10YRの個性的色調をなす。復元口径21.5cm。17は微細な金雲母を含むもので，内面は横方向に入念にみがかれる。20は復元口径24cmで，口縁部上面の反りが強いもので，内面の突出も明瞭である。1mm程の長石や石英，白色鉱物，黒色鉱物，火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で，特徴的なにぶい黄橙10YRを呈す。19は20と酷似し，火山灰性のガラス質粒子を多く含む。

Ⅳc類（第6図21・22）

黒髪Ⅲ式土器で，口縁部上面の反りがⅡ式よりさらに強くなり，内面の突出も明瞭な一群で，中期前葉後半に比定され，中町馬場薗Ⅳc類に該当する。

21の上面の反りは明確で，22は口縁幅が大きく，上面の反りも強くなる。22の復元口径は23.8cm。

Va類（第6図23～25）

須玖Ⅰ式土器中段階で，中町馬場薗Va類に該当する。

23は水平な口縁部を持つもので，胴部の張りは強くない。復元口径26cmで，大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。24の復元口径24cm，25の復元口径27.2cm。

Vb類（第6・7図26～31）

須玖Ⅰ式土器新段階で，中町馬場薗Vb類に該当する。

26は口径32cmでにぶい橙7.5YR，27は口径28cmでにぶい橙5YRの鋤先口縁で，内面の突出が強い。28は口径30cmの鋤先状のL字口縁で，内面突出も明瞭で強い。器壁は薄く，火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し，外面は縦方向の刷毛目調整で，軽量に仕上げる。にぶい黄橙10YR。29の口縁部は胴部から強く外反し，口唇部は平坦面をなす内外面丹塗りの甕で，口径18cmが復元できる。なお，両面とも横方向のミガキ調整で，精選された胎土が使用される。31は復元口径46.3cmの大甕で，甕棺使用が考えられる。にぶい黄橙10YR。30は丹塗りで，微細な金雲母を含む精製胎土を使用する。

Vc類（第7図32）

須玖Ⅱ式土器古段階で，中町馬場薗Vc類に該当する。

32は火山灰性のガラス質粒子を含む赤色の化粧土を使用し，口縁内部は大きく突出する。

Ⅲb類（第8図33～39）

山ノ口Ⅰ式土器で，中町馬場薗Ⅲb類に該当する。

34は赤色塗彩されたもので，復元口径が30cm。35は24cm。36は21.6cmで火山灰性のガラス質粒子を多量に含み，煤状炭化物の付着が見られる。37は25cm，38の口径は34cmである。39は復元口径52cmの大甕で，胎土に大粒の金雲母を大量に含む。口縁部はくノ字に外反し，胴部に口縁部同様先端がM字に凹む突帯文を持つ。口縁部はにぶい橙5YR。なお，胎土に含まれる金雲母の特徴から，大隅地域で製作されたと考えられる。

Xc類（第9図40～43）

山ノ口Ⅱ式土器の寺山・下堀タイプと称されるもので，中町馬場薗Ⅲc類に該当する。

40は復元口径32.5cm。41の復元口径は30.2cmで，胴部は縦方向のミガキで仕上げる。42は復元口径46.5cmの大甕で，口縁部と頸部突帯文間を縦に突帯文で繋いでいる。

X類（第9図44・45）

立ち上がりの弱いくノ字口縁で，松木薗式土器古相，中町馬場薗X類に該当する。

45の復元口径31.5cm。

Ⅺ類（第9図46～49）

Ⅻ類より立ち上がりが強くなるくノ字口縁で，松木薗式土器，中町馬場薗XⅡ類に該当する。

46はくノ字口縁で，屈折部に1条の無刻目突帯文を持つ。赤色粒や白色鉱物を中心に，火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で，器壁は薄い。47は復元口径44cmの大甕。48も大甕。49の大甕の復元口径60.8cmとなる。

弥生時代壺（第10～13図）

前期壺（第10図50～57）

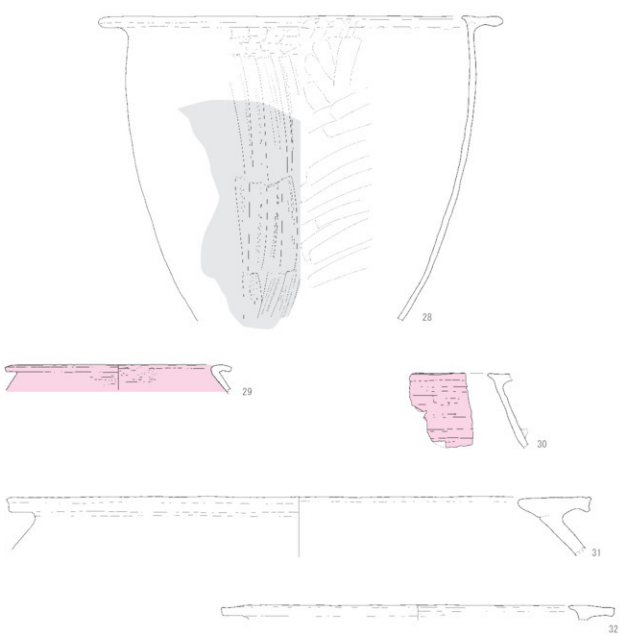
50はヘラ描き沈線文。53の復元口径は13.2cmで，内外ともミガキ仕上げが見られる。54は復元口径16cmで，大粒の金雲母含む。52の頸部と肩部の境界にヘラ描沈線文を施し，胎土に微細な金雲母を含む。51・55は肩部にヘラ描き沈線文を施し，内外ともミガキ仕上げを行う。56はC－36区から出土した壺で，口径11.6cm，高

さ24.2cm，底径7.6cmの完形品で，肩部はヘラで削り段差を設け，並走する沈線文と鋸歯文を施す。胎土は，2～3mm程の長石や石英を多量に含むいわゆる花崗岩質地域特有のもので，移入品と見られる。また，橙2.5YRの器面は，器面調整も丁寧で，横方向のミガキ仕上げである。光沢を残している胎土を使用する。57の口径は17.8cmで，胴下部から底部を欠くが，肩部には段を有し，内面胴部以下には輪積み痕が残されるが，内面口縁部と外面は横方向に入念にヘラでみがかれ，緩やかな曲線を呈し，部分的には光沢を残す。赤色粒や白色鉱物，カクセン石等の黒色鉱物，火山灰性のガラス質粒子を大量に含む胎土を使用し，にぶい橙5YRを呈する。

入来Ⅱ式土器壺（第12図58～62）

甕Ⅲa類に伴う壺で，59の口縁形状は入来Ⅱ式土器を踏襲する。58は逆L字状に屈折する口縁部に付随する外側の立ち上がりであるが，傾きは若干疑問も残る。60の口径は16.5cmで口縁部に櫛描文を施す。61も口縁部に櫛描文を施し，口縁形状は入来Ⅱ式土器を踏襲する。

62はE－29・30区のⅣ層上部で出土した壺で，口径17.3cm，高さ37.6cm，底径7.1cmで，胴部の最大径33.7cmで，内外面共に，工具でナデた後横方向に繰り返しみがかれている。口唇部はM字状で，肩部に並行沈線文を持つ広口の研磨土器で，丹塗りされていた可能性が高い。



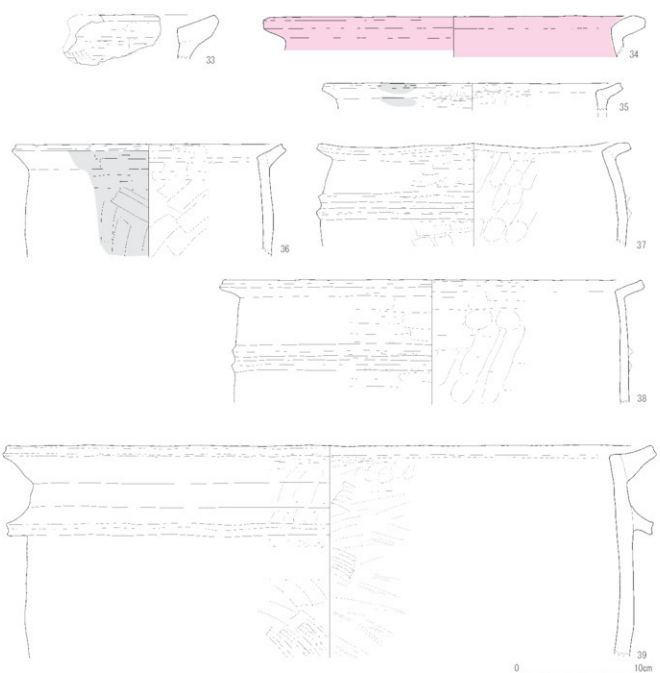
第７図　弥生土器３

須玖Ⅰ式土器新段階壺（第13図63～87）

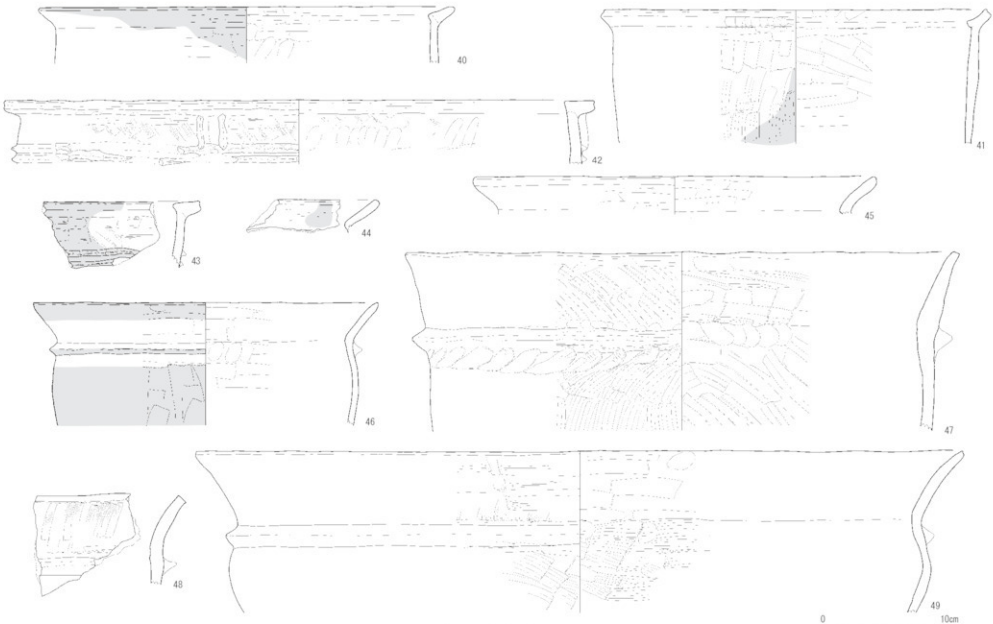
甕Va類に伴う壺で，口縁部が大きく外反する，いわゆる垂下口縁タイプの壺で，口縁部上面に櫛描波状文を施すものが抽出される。また，全資料が破損し，砕片化して採取されているが，数個体が存在したと見られる。また，その全てできめの細かい精製胎土が使用される。

63の口唇部は丸く，64では内面端部がヘラで削られ段を持つ。65・76の口唇部は直線的な平坦面に，71・72・78では斜めに平坦面が作られる。66ではヘラ削りした内面端部とさらにその内側に施文し，同様に77・74・81・82・83・84・85でも２重の施文が見られる。70や81の口縁端部は更に垂下する。81の口縁部は木目間の小さい刷毛目が使用され，85ではやや間隔が大きくなる。また，その全てできめの細かい精製胎土が使用されるが，中でも81・83では多量の火山灰性ガラス質粒子が含まれる。80や82，85はにぶい橙10YR，76や77，85は橙5YRと赤い。86は口縁内面端部に櫛描波状文。口径13.8cm，精製胎土を使用し，丁寧にナデで仕上げる。87は口縁部内面に竈歯文を巡らし，そのさらに内側に断面三角の突起を持つ壺で，きめの細かい胎土に含まれる微細な金雲母が特徴的で，にぶい橙7.5YRの色調からも搬入品と見られる。

口径が復元できたものについては，76が18cm，77が17cm，79が21.5cm，78が19.6cm，81が22.2cm，80が20cm，83が20.2cm，82が17cm，84が27cm，85が



第８図　弥生土器４



第９図　弥生土器５

22.8cmが復元される。したがって，この種の壺の口径は17cm（77・82），20cm（78・80・83・88），22cm（79・81・85），27cm（84）等に集約される。

須玖Ⅱ式土器古段階(第13図88・89)

甕Ve類に対応する須玖Ⅱ式土器の広口壺で，88は傾き不明，内面は丁寧にみがき，頸部に暗文が確認できる。89も傾き不明で，両面に暗文が確認できる。

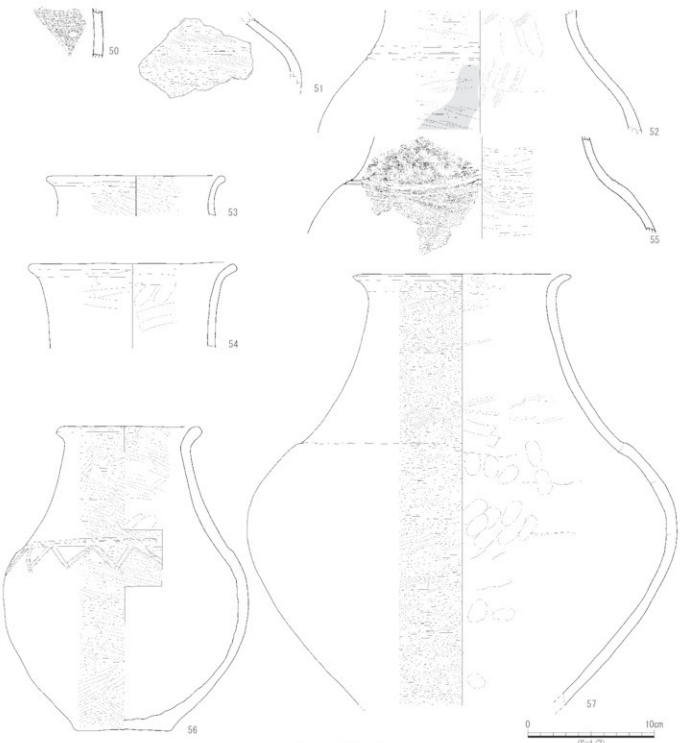
弥生時代底部

前期壺底部（第13図90・91）

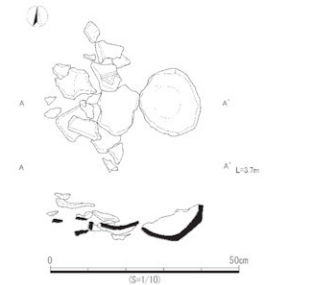
90は，安定した台状やミガキ仕上げから前期壺と判断される。91も類似するが，やや小振りである。なお，火山灰性のガラス質粒子に加え2～3mm程の赤色粒や白色鉱物が目立つ胎土を使用している。

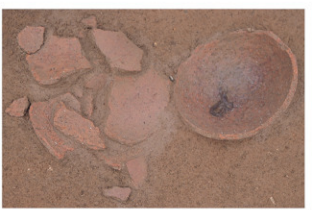
中期甕底部（第13図94～98）

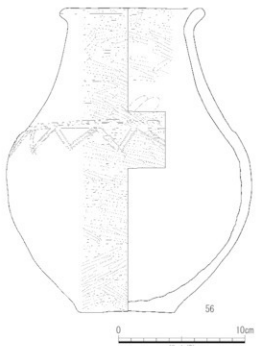
95の中央部はわずかに凹み，他は平底で充実した脚部



第10図　弥生土器６







第11図　弥生時代土器出土状況図および弥生土器７

を持つもので，入来Ⅱ式土器及び山ノ口式土器の甕の底部に帰属すると見られる。94 は丁寧なナデ仕上げで，端部は凹み，多量の大粒の金雲母を含んでいる。95・99 は刷毛目，98は工具ナデ後部分的にミガキ仕上げが見られる。

時期不明（第13図92・93）

２点とも2mm程の白色鉱物を含む胎土を使用し，92 はにぶい橙10YR，93はにぶい橙7.5YRとなる。

石包丁（第14図99 ～ 103）

使用石材は全て粘板岩で，100と101では精巧な研磨技術が存在したことが垣間見られる。

99は４個の穿孔を持ち，そしてその穿孔部で破損することに加え，V字状の鋭角な刃部をなし且つ，2.8cmと丈が短いことから，研ぎ返しが繰り返されたと推測される。なお，元来背は直で，刃部は緩やかな半月形の可能性がある。100の丈は4cmで，穿孔間で半裁するが半月形であったと見られる。両面は密な研磨で，また両面からの穿孔作業も合致している。なお，欠損後，二次加工を加え，再利用した可能性が高い。101は背と左部が欠損するもので，刃部は片側のみ磨く。なお，両面は密な研磨で100同様，ほとんど抵抗が感じられない。102は実測表示が表裏逆で，左側穿孔部周辺が残存する。裏面は若干弯曲する。103はほぼ全形を示す資料で，幅8.4cm，丈3.4cm，厚さ0.6cm程である。穿孔及び刃部の研磨は両側から行い，刃部には刃こぼれを伴う二次的使用痕が認められる。

円盤状有孔石製品（第14図104）

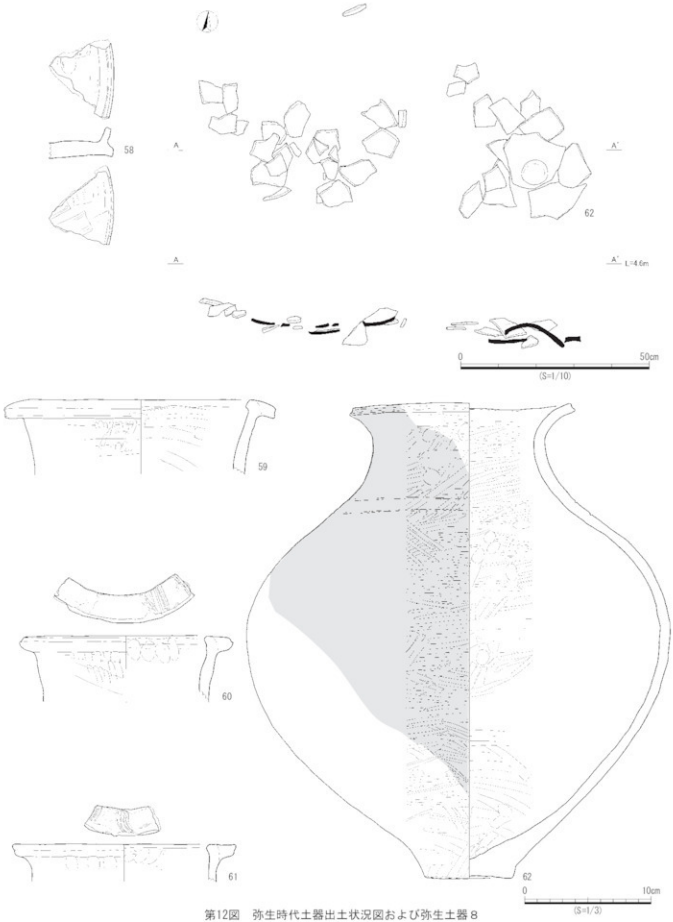
104の１点で，器種は不明であるが，成型状況から円盤状の形状が復元される。２つの穿孔は両側から行っており，側縁部は平坦面を基調とするが，部分的には体部より狭くなり，また，背面の穿孔部を横断して浅い溝状に削り込まれている。使用石材は粘板岩である。

銅鏃（第15図105・106）

105は裏面がスキー状に凹む特徴から，骨鏃系銅鏃の可能性がある。

銅鏡（第15図107 ～ 110）

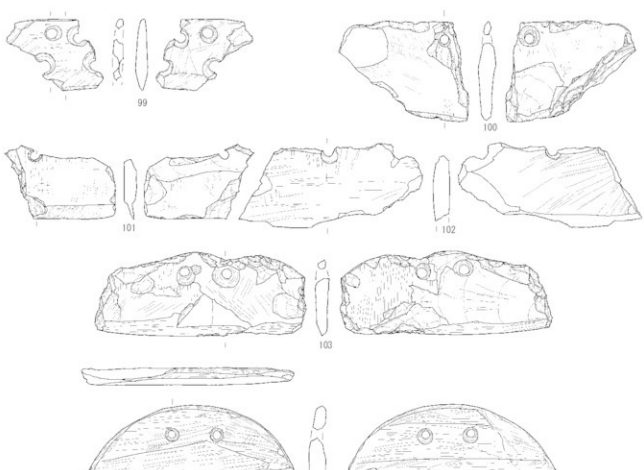
107は破鏡であるが，部位等については不明である。108も破鏡で，図示した右側と下側は両面ともから磨か



第12図　弥生時代土器出土状況図および弥生土器８

63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
0
10cm
(S=1/3)

第13図　弥生土器９



第14図　石包丁

れた摩耗面である。109の縁は低い蒲鉾状で，直径4.8cm，円鈕の小型仿製鏡である。110は円鈕，平縁で主文帯は○で構成し，直径8.4cmの小型仿製鏡で，鈕には紐状の繊維が付着している。

①麦之浦貝塚：破鏡：流雲文縁方格規矩鏡

舶載鏡で，唐津市桜馬場遺跡出土と類似。直径14.4cm，外縁部4.9cm，外側に流雲文，内側に鋸歯文が確認できるが，内区は不明。中津野式土器と東原式土器が出土している。

〈註〉「麦之浦貝塚」『本川地区造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』川内市土地開発公社1987

②横瀬遺跡：破鏡：変形渦文鏡（復元径6.5cm）

小型仿製鏡で，外縁部は狭い平縁をなし，直径6.5cm，厚さは1.5 ～ 1.8mmとされる。２号竪穴住居の出土とされ，山ノ口式土器や中津野式土器（本遺跡褒１類）様の甕，高坏１型式や長頸壺が出土している。

〈註〉「横瀬古墳」『指宿市埋蔵文化財調査報告書６』指宿市教育委員会1982

③本御内遺跡：破鏡：方格T字鏡

安国寺式土器の袋状口縁壺と出土したとされる破鏡で，規格等の詳細は報告されないが，方格にT字と四乳はあるが，L字とV字等を欠く，方格T字鏡とされる。

〈註〉「本御内遺跡（舞鶴城跡）」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書12』鹿児島県立埋蔵文化財センター1994

鉄鏃(第15図111 ～ 119)

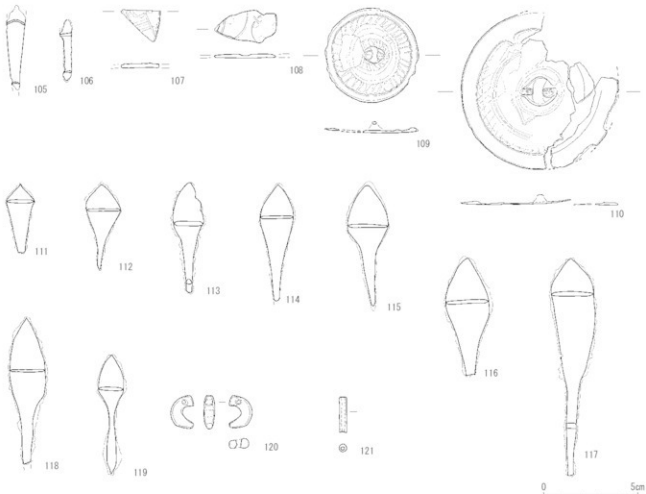
111と112は圭頭鏃，113・114・115・116・117・118は柳葉鏃，119は短頸鏃に属す。基本的には平根式の菱形式鉄鏃である。それぞれ残存状況は異なるが，114と115の全長は約6.3cm・鏃身部約2.1cm。116の鏃身部は4.2cm，茎尻が欠損する。

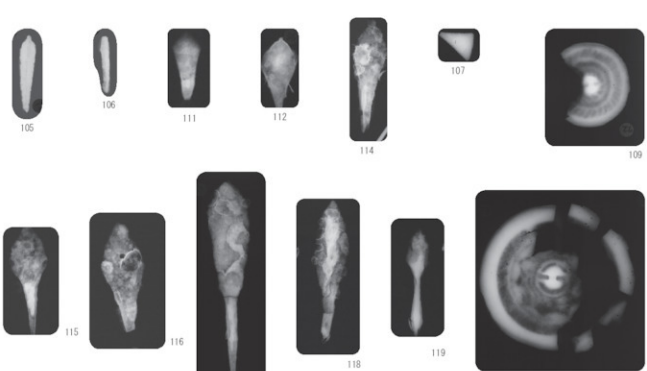
勾玉(第15図120)

120は明オリーブ灰2.5GYの蛇紋岩製で，長さ1.8cm，厚さ0.6cm。孔は両側から穿つ。

管玉(第15図121)

121は灰白5Yで，石材は不明。長さ1.9cm，厚さ0.4cm。





第15図　銅鏃・銅鏡・鉄鏃・勾玉・垂飾

2　古墳時代の調査

（1）調査の概要

古墳時代の遺構，遺物は，河川氾濫時の堆積層である砂層から検出された。基本層序としてはⅢｂ層（一部Ⅲ層の場合もある）であるが，一部Ⅳ層からも遺物が出土した。遺構はそのほとんどをⅣ層上面で検出した。しかしながら，調査区の大部分の場所で安定した層序をなしていなかったため，整理作業においては遺構，遺物の年代観を，基本層序によるものより，従来の研究等による遺物の編年をもととする年代観を優先して決定した。

遺構はA′～E－15～37区に集中しており，竪穴住居跡８基，竪穴状遺構19基，土坑36基，ピット13基，溝状遺構１条，焼土遺構１基，土器集中遺構８基が検出された。

竪穴住居跡はA～C－25～36区で検出された。土層が砂層のため住居のプランや柱穴の有無，切り合い関係等を明確につかむことができないものが多かった。また，床面についてもはっきりと捉えることができず，検出は掘り込み面でおこなった。そのため本遺跡では，遺構のプランや柱穴の有無及び配置，遺構内遺物の出土状況などを考慮し，方形もしくは円形プランを呈し，住居に伴う柱穴，遺物を有する遺構を竪穴住居跡とした。

竪穴状遺構はA′～E－20～34区で検出され，特にD，E－20～24区には11基が近在する。複数の竪穴住居の切り合いにより不定型な形状を呈している可能性のある遺構も見られるが，形状が不定型で方形もしくは円形プランを呈しておらず，また，遺構に伴う柱穴がないもの，もしくは柱穴があったとしても住居跡とは考えにくいものについては竪穴状遺構として掲載した。

土坑およびピットはA′～E－19～37区に集中して検出され，特に竪穴住居跡や竪穴状遺構が検出された付近で多数検出されたが，その関連性を明確にすることはできなかった。土坑は，土坑内より該期の土器が廃棄もしくは埋納された状態で出土したものと検出面がⅣ層で埋土中に中世以降の遺物が含まれていないものについて，該期の土坑と認定し掲載した。ピットについては中世以降のピットとの判別が難しく，ピット内に土器が埋納されているものを掲載した。土坑，ピットともに，時期判定がつかなかったものについては，遺構配置図のなかに灰色の線で表示した。

土器集中遺構は，B～D－32～37区で検出された。そのなかでもC，D－36，37区は集中が密であり，完形に近い土器が数多く出土した。このエリアでは包含層内出土遺物の中にも完形の甕型土器や壺型土器が出土しており，包含層内遺物と土器集中遺構に伴う遺物との区別が難しく，一部は包含層出土遺物として取り上げ，本報告の中でも包含層内出土遺物として掲載したが，これらは土器集中遺構に伴うものである可能性が高い。

（2）遺物の分類

本遺跡の土器群は，中津野式土器を中心に東原式土器で構成している。そのため，甕については中村直子〈註１〉（1987）の口縁部形態分類を判断の基準としたが，中津野式土器の新段階あるいは，東原式土器への過渡期と見られる土器群が存在している。それらは，中村分類の甕Ⅴ類と甕Ⅵ類の間に位置すると見られる土器群であり，そのため，本遺跡では甕１類，甕２類，甕３類即ち，１類中津野式土器，２類中津野式土器新段階，３類東原式土器とした。なお，既に，過渡期の存在については本田道輝〈註２〉（2005）が，言及し，八木澤一郎〈註３〉（2008）は堂園遺跡Ｂ地点で過渡期のその検討を行っている。

〈註１〉　中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古』６，1987
中村の甕５型式は，前段階の甕４型式に比べて外反する口縁部は立ち上がって細くなる。口唇部の厚さは先端までほとんどかわらないかわずかに薄くなり，口容部はⅢ類，Ⅳ類に比べて小さく収まるとされる。口縁内面の稜線が明瞭なものと不明瞭なものが見られる。また，胴部は，大きく球状に膨らむものと膨らみが緩くなるものがあり，中津野式に比定される。一方，甕６型式の口唇部及び口縁部等の形状はⅤ類に類似するとされ，外面をハケメ原体状の工具で縦方向の擦過（いわゆるカキアゲ）を行うことによって胴部との境に段をもつものとされる。なお，この口縁部と胴部の境界の縦方向の刷毛目は“カキアゲ口縁”と呼ばれ，東原式土器に比定されている。このような形状変化や製作技法の変化に着目し，甕５型式に先行する甕４型式を松木薗式土器，甕５型式を中津野式土器，甕６型式を東原式土器，甕７型式を辻堂原式土器に比定している。

〈註２〉　本田道輝「第Ⅹ章下堀遺跡の検討」『下堀遺跡』金峰町教育委員会発掘調査報告書20，2005本田によると過渡期の甕は，(1) 口縁部の立ち上がりが強くなるとともに，内傾の稜線が鈍くなる。(2) 口縁部つけね（頸部）の厚みが，先端部と変わらなくなる。(3)「カキアゲ口縁」が認められる。(4) 胴部に張りが見られるものが多くなる。(5) 胴下半部にケズリ痕が見られるようになる。(6) 底部成形が雑になるとされる。

〈註３〉　八木澤一郎「第Ⅵ章調査のまとめ第２節弥生時代終末～古墳時代初頭の堂園遺跡」『堂園遺跡Ｂ地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書123，2008
八木澤は，堂園遺跡Ｂ地点の甕は，①口縁部内面と胴部とでハケメ調整やヘラナデ調整を方向を違えて強く行い，境界に明瞭な稜線を形成するという中津野式土器の一つの指標を持ちながら，口縁部の外反度合いが弱い土器が多い。②口縁部外

面と胴部との境界に，ヘラナデ調整や指頭押圧調整あるいは胴部上端から口縁下端までカキアゲ調整などが施され，稜線は不明瞭な点も挙げられる。③胴部下半ではヘラナデ調整が雑になり，ケズリ痕が残ること等に着目し，これらを「堂園タイプ」と呼び，過渡期として抽出した。

なお，先記した本遺跡の甕１類は中村分類の甕５型式類に相当し，472や475をその典型例とする。口縁部はやや長めでくノ字に外反し，口唇部は細くなる傾向が見られる。口縁部と胴部との境界は明瞭な稜線が残され，胴部は丸く膨らみ，脚部は総じて低く端部が外側に開く傾向が見られる。甕２類は，447や490をその典型例とする。口縁部の稜線がやや不明瞭となり，所謂カキアゲ口縁は認められないが，胴部との境界にヘラの打ち込み痕が列状に残されるものが多い。甕３類は中村分類の甕６型式類に相当し，口縁部と胴部との境界は刷毛目のカキアゲが明瞭に残るいわゆる「カキアゲ口縁」を特徴とする。

また，丸底甕は，布留式土器及びその影響を反映する地域から搬入されたと判断したもので，注目すべき資料である。

大型壺も中村分類の壺Ａ～Ｃに準拠し，小型の短頸壺については，小型の丸底壺と，より小型の坩に細分した。なお，坩についても基本的には，中村の坩１型式～坩３型式分類を踏襲していが，坩１型式の前に坩０型式を設け，さらに坩０型式１と坩０型式２に二分した。

坩０型式１は，口縁部が長く，胴部上位即ち口縁部直下で偏球状に明瞭に屈折する一群で，口縁部に櫛描波状文を施すものが多数を占める。また，器の大部分を口縁部で構成し，中には器高の８割以上を占めるものもあり，赤色に発色するものが多いことから，精製鉢土と共に赤色の化粧土を使用した可能性を検証すべき資料も存在している。さらに，丁寧な器面調整が行われており，器壁を薄く仕上げる意図が看取される。次の坩０型式２も器の大部分を口縁部で占めるもので，坩０型式１同様に，胴上部で明瞭に屈折して偏球状の胴部を持つ等の型式学的視点から，坩０型式１から派生したと判断しているものである。

坩１型式は，坩０型式２から派生し，在地化したと判断したもので，短く直線的に立ち上がる口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群と，外に開く口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群がある。中でも，前述の一群は中村分類の坩１型式に該当する。なお，坩０型式及び坩１型式のいずれも，中津野式土器に伴うと判断している。坩２型式は，口縁部が外開きの傾向を示し，胴部が蕪状に膨らむ丸底で，中には丸底の中心に乳頭状の突起を持つものも見られ，中村編年の東原式土器に位置づけられると認識している。なお，器面調整は横方向のナデが中心で，口縁部での縦方向のヘラミガキ等は見られない。坩３型式についても中村編年に順次，口縁部は坏形を呈し，屈折する胴部の重心は低く，基本的に平底をなすもので，辻堂原式土器～笹貫式土器に比定している。

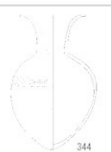
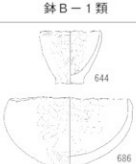
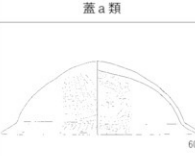
また，妻岡様中間形態の存在を主張する本田の壺は，(1) 口縁部が頸部から直接が外反する。(2) 頸部の締まりが強く，長胴化する。(3) 胴部凸帯が低く刻みが雑になる。(4) 胴部凸帯の始点と終点が一致しなく上下にずれるものが見られるようになる。(5) 胴下半部にケズリ痕がみらるようになる。(6) 底部が丸底化していくとするとし，これらが，中村の壺Ｂ３型式と壺Ｂ４型式の間に存在すると指摘しているが，本遺跡の資料からは，その評価までは至っていない。

〈註〉 中村の坩１型式は，短く直行する口縁部と偏球状に明瞭に屈折する胴部を持つもので中津野式土器に，坩２型式は口縁部が外開きの傾向で，胴部が蕪状に膨らんで丸底あるいはその中心に乳頭状の突起を持つもので東原式土器に，坩３型式は口縁部が坏形で，屈折する胴部の重心は低く平底をなすもので辻堂原式土器～笹貫式土器に編年される。

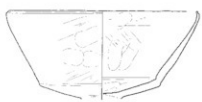
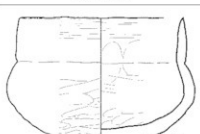
蓋は，ドーム状の身部と大きく外反する口縁部を持ち器高が低く把手を設けないＡ類と，身部と口縁部の区分が無く笠状に直線的に開き天井部に逆台形状の把手を持つもＢ類に二分した。

高坏も中村分類を踏襲し，高坏１型式は松木薗式土器，高坏２型式は中津野式土器，高坏３型式は東原式土器，高坏４型式は辻堂原式土器～笹貫式土器とした。なお，高坏２型式については抽出できたが，他の型式の具体的抽出はできていない。

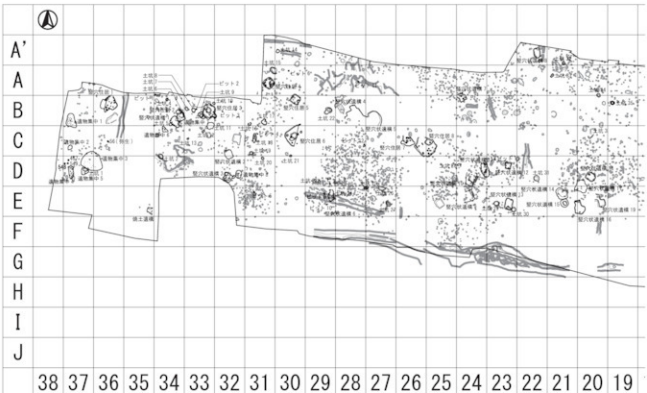
鉢については，口径が器高を越すものを取り扱い，広口で大型の鉢Ａと小型の鉢Ｂに大別し，さらに，鉢Ｂについては，底部が丸底や平底の鉢Ｂ１と，脚部を構成する鉢Ｂ２に細分している。なお，鉢Ｂ２では，脚の短い一群630，637と脚の長い一群623，624が存在している。

甕１類	甕２類	甕３類
口縁部はやや長めでくノ字に外反口 唇部は細くなる傾向 口縁部と胴部の境界は明瞭な稜線 胴部は丸く膨らむ 脚部は低く端部が外側に開く傾向	口縁部　稜線がやや不明瞭 　　カキアゲ口縁は認められる 胴部との境界にヘラの打ち込み痕が 列状に残されるものが多い	口縁部は緩やかに外反 もしくは内弯外 反するものは口縁部と胴部との境界 は刷毛目のカキアゲが明瞭に残る 「カキアゲ口縁」を特徴
壺Ａ類	壺Ｂ類	鉢Ａ類
		
黒髪式土器の系譜を引くもの Ａ２型式：松木薗式 Ａ３型式：中津野式 Ａ４型式：東原式	山ノ口式土器の系譜を引くもの Ｂ２型式：松木薗式 Ｂ３型式：中津野式 Ｂ４型式：東原式	広口で大型
鉢Ｂ－１類	鉢Ｂ－２類	蓋ａ類
		
小型 底部　丸底，平底	小型 底部　脚付	ドーム状の身部と大きく外側に外反 する口縁部からなる 器高は低く，把手を設けない

分類表１

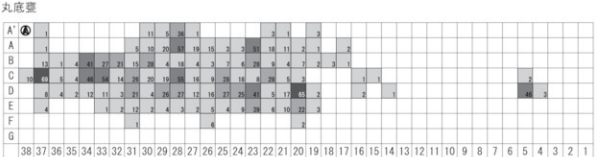
蓋Ｂ類	高坏２型式	高坏３型式
607	693	 708
身部と口縁部の区分が無く，笠状に直線的に開く形状 天井部に逆台形状の把手を持つ	中津野式	東原式
高坏４型式	坩０型式１	坩０型式２
709	818	832
辻堂原式～笹貫式	口縁部長い　器の大部分を口縁部で構成　櫛描波状文を施すものが多い 口縁部直下で偏球状に明瞭に屈折する 赤色に発色する事例が多い 器面調整丁寧　器壁は薄い	器高の大部分を口縁部で占める 胴部が屈折する
坩１型式	坩２型式	坩３型式
854	 861	876
外に開く口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群（Ａ）と，短く直線的に立ち上がる口縁部と丸底で無状の胴部で構成する一群（Ｂ）	口縁部が外開きの傾向 胴部が無状に膨らんで丸底を中心に構成 丸底の中心に乳頭状の突起を持つものもある	口縁部は坏形　屈折する胴部の重心は低い 基本的に平底をなす

分類表２

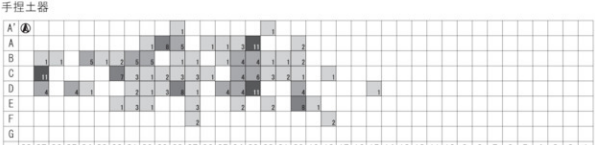


第16図　古墳時代全体遺構図１

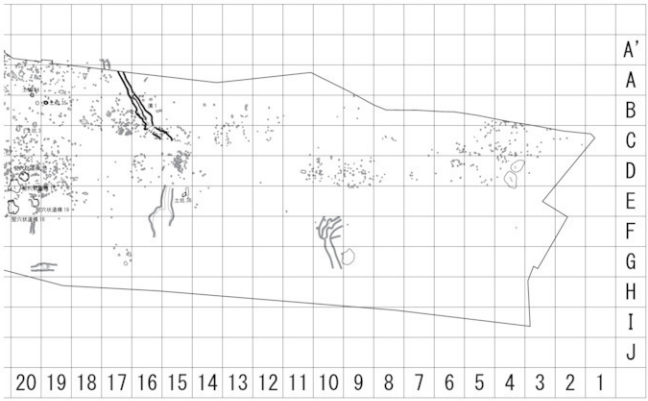
丸底甕



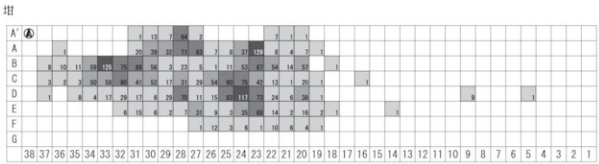
手捏土器



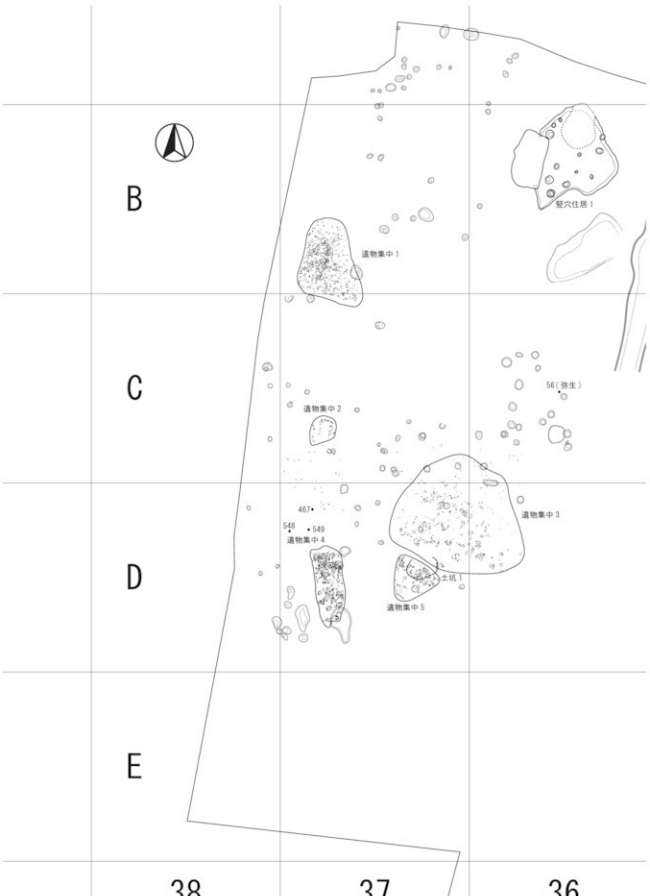
グリッド別の出土数１



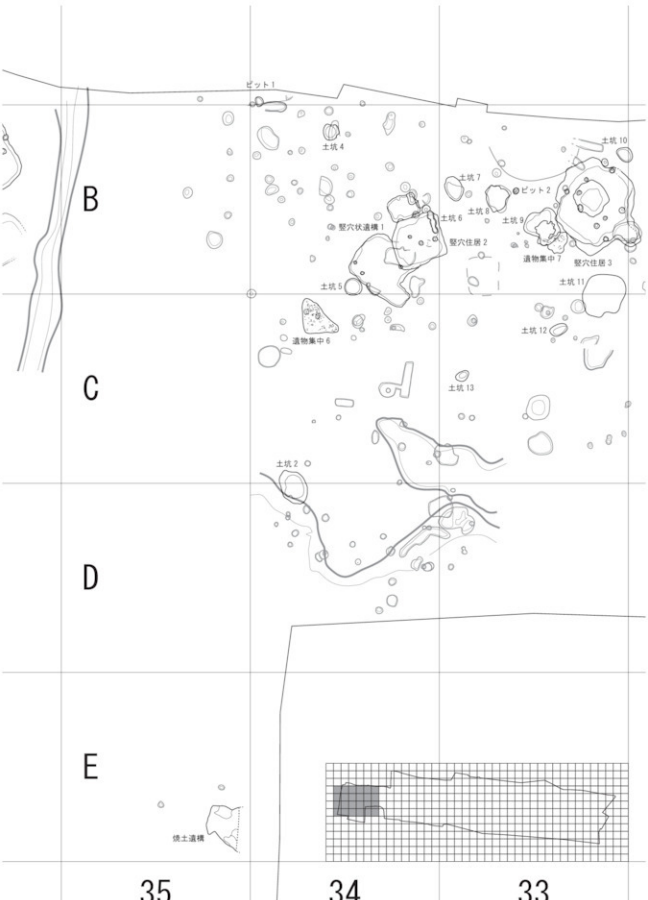
第17図　古墳時代全体遺構図２



グリッド別の出土数２

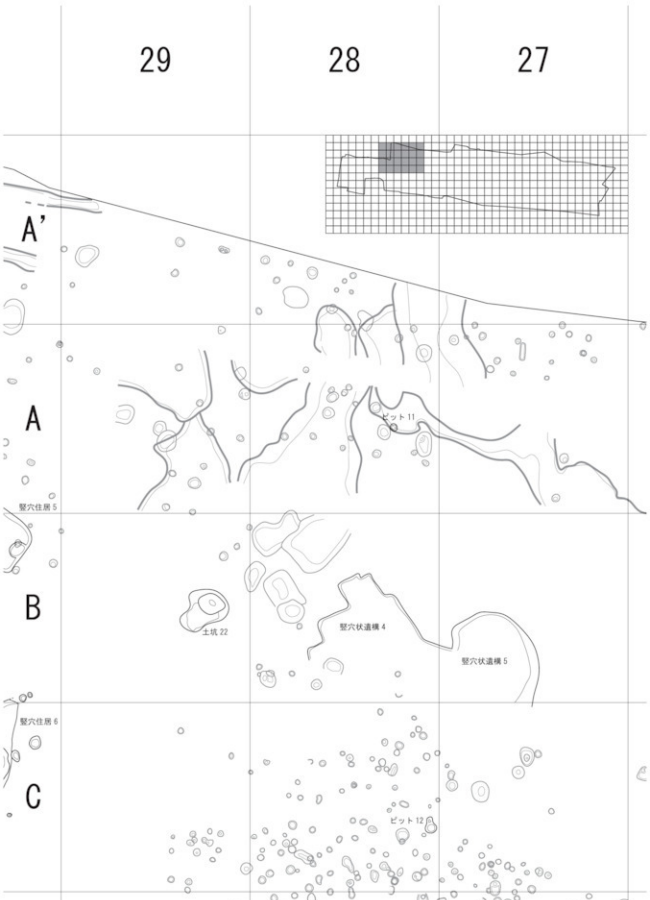


第18図　古墳時代遺構配置図 1

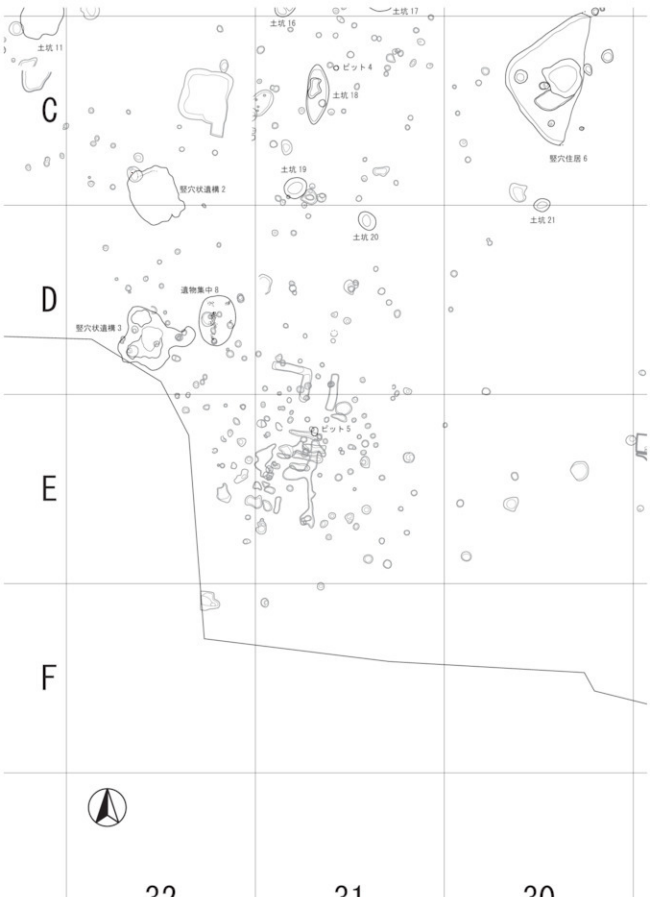


第19図　古墳時代遺構配置図２

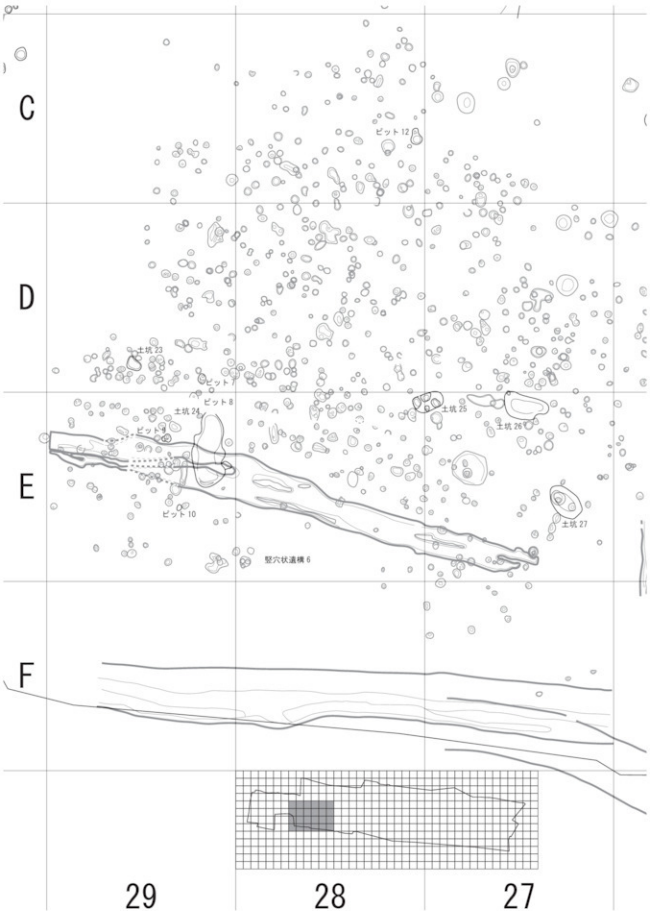
第20図　古墳時代遺構配置図３



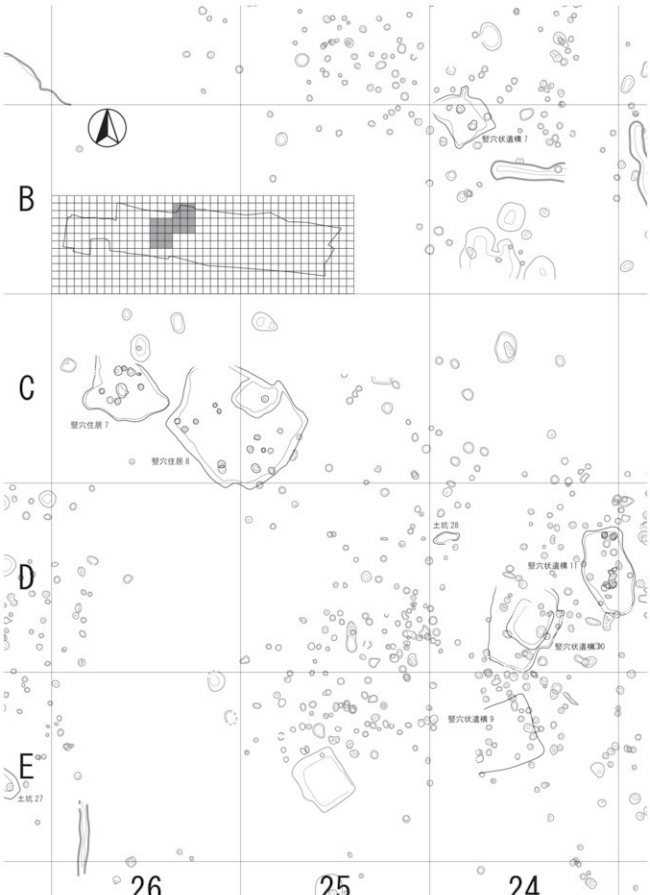
第21図　古墳時代遺構配置図 4



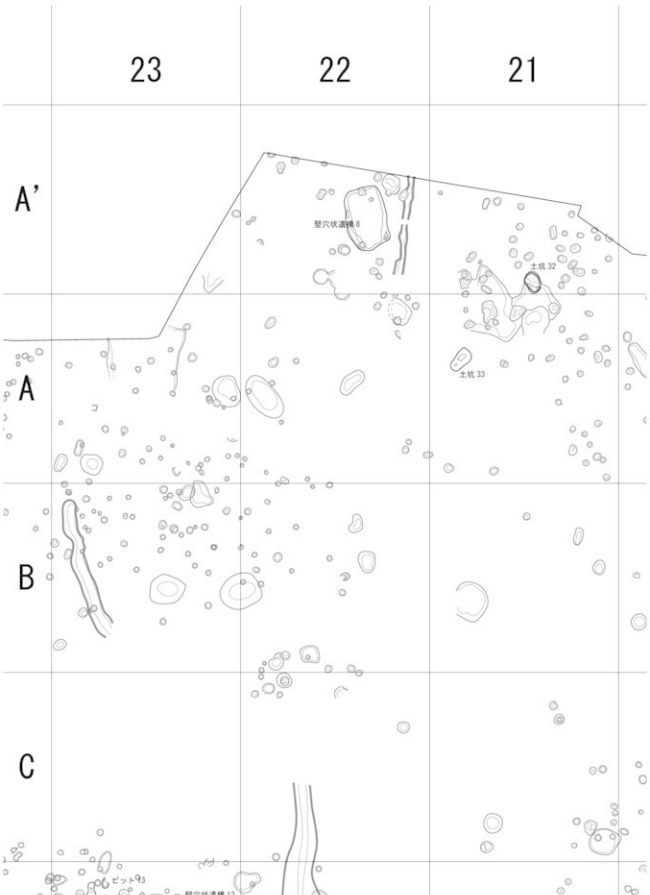
第22図　古墳時代遺構配置図５



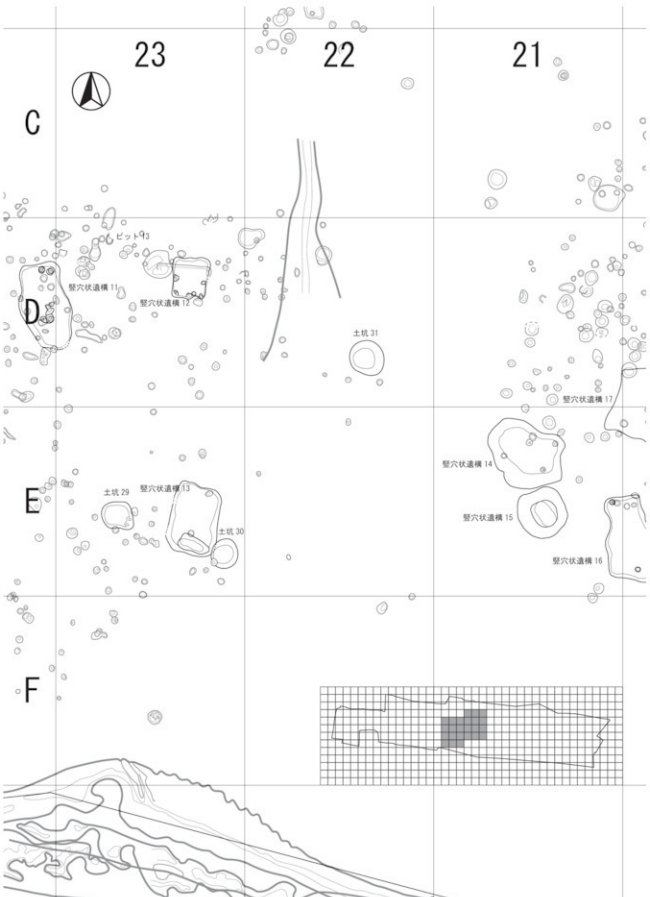
第23図　古墳時代遺構配置図6



第24図　古墳時代遺構配置図 7

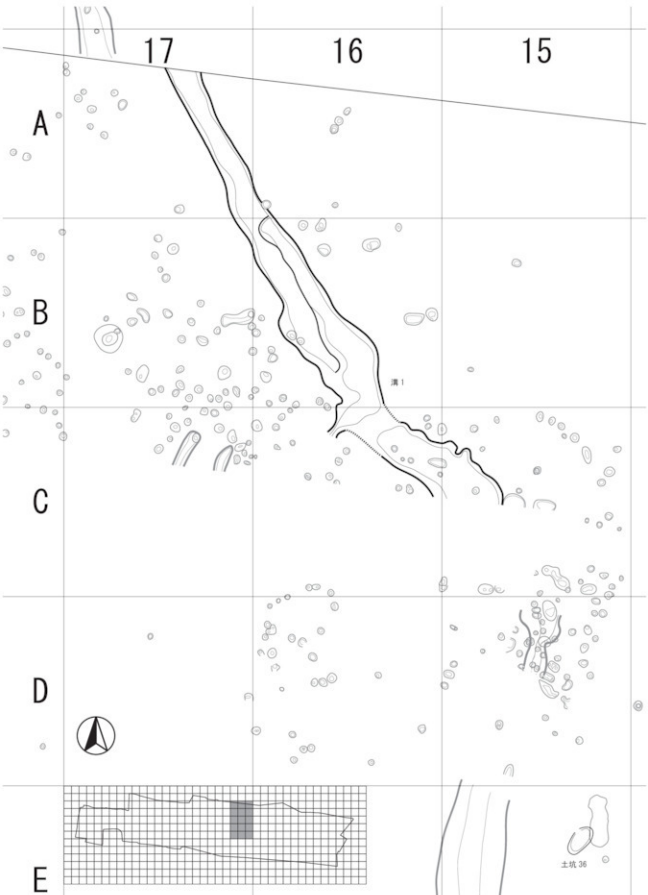


第25図　古墳時代遺構配置図 8



第26図　古墳時代遺構配置図 9

第27図　古墳時代遺構配置図10



第28図　古墳時代遺構配置図11

遺構計測表

整穴住居跡

番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	付属するpit 番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	11729	4.40 + α	4.40	0.27	P1	0.43	0.37	0.15
					P2	0.44	0.41	0.27
					P3	0.28	0.28	0.10
					P4	0.39	0.30	0.09
					P5	0.45	0.43	0.21
					P6	0.17	0.14	0.11
					P7	0.24	0.19	0.07
					P8	0.20	0.17	0.08
					P9	0.20	0.18	0.14
					P10	0.25	0.16	0.11
					P11	0.39	0.32	0.21
					P12	0.31	0.26	0.15
2	11536	2.70 1.60	2.50 1.30	0.34 0.14	P1	0.20	0.14	0.22
					P2	0.23	0.22	0.18
					P3	0.26	0.24	0.13
3	11684	5.20	4.35	0.38	P1	0.24	0.20	0.34
					P2	0.21	0.19	0.17
					P3	0.26	0.25	0.14
					P4	0.26	0.23	0.10
					P5	0.32	0.25	0.20
					P6	0.27	0.27	0.31
					P7	0.23	0.19	0.27
					P8	0.32	0.32	0.34
					P9	0.27	0.24	0.22
4	3149	3.30	3.30	0.30	P1	0.58	0.56	0.26
					P2	0.30	0.30	0.16
					P3	0.33	0.25	0.18
					P4	0.38	0.36	0.14
					P5	0.38	0.32	0.19
					P6	0.39	0.36	0.10
					P7	0.48	0.23	0.11
					P8	0.40	0.31	0.13
5	3126	2.90	2.80	0.21	P1	0.35	0.30	0.20
					P2	0.25	0.22	0.25
					P3	0.26	0.24	0.13
6	7389	5.30 + α	5.10 + α	0.55	P1	0.71	0.68	0.29
					P2	0.36	0.30	0.30
					P3	0.53	0.35	0.36
					P4	0.22	0.20	0.11
					P5	0.29	0.35	0.27
					P6	0.28	0.24	0.19
					P7	0.62	0.45	0.31
					P8	0.72	0.61	0.35
7	7453	4.50	3.20 + α	0.53	P1	0.50	0.42	0.09
					P2	0.27	0.26	0.05
					P3	0.44	0.43	0.07
					P4	0.24	0.13	0.05
					P5	0.33	0.31	0.05
					P6	0.30	0.29	0.03
					P7	0.36	0.30	0.07
					P8	0.76	0.54	0.14
8	7452	7.10 + α	5.90	0.63	P1	0.31	0.28	0.17
					P2	0.35	0.30	0.13
					P3	0.28	0.27	0.15
					P4	0.25	0.23	0.19
					P5	0.28	0.23	0.14
					P6	0.41	0.39	0.09
					P7	0.38	0.33	0.23
					P8	0.34	0.26	0.12
					P9	0.25	0.22	0.13
					P10	0.52	0.39	0.25
					P11	0.38	0.32	0.15
					P12	0.37	0.35	0.11

整穴状遺構

番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	付属するpit 番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	11718	3.60	2.70	0.33	P1	0.17	0.15	0.04
					P2	0.21	0.16	0.11
					P3	0.20	0.16	0.11
2	9610	2.90	2.40	0.20				
3	9395	3.45	2.90	0.16	張り出し部分	1.30	0.80	?
4	2483	5.80 + α	5.50	0.25				
5	2490	5.22	4.90 + α	0.20				
6	11005	1.85	1.80 + α	0.33	P1	0.46	0.33	
					P2	0.33	0.24	
7	1530	2.70	2.30	0.31	P1	0.35	0.24	0.16
					P2	0.44	0.40	0.16
					P3	0.52	0.41	0.20
8	872	3.30	2.20	0.20	P1	0.44	0.36	0.32
					P2	0.23	0.20	0.10
					P3	0.38	0.30	0.30
					P4	0.21	0.15	0.17
9	6397	3.70 + α	3.45	-				
10	6818	4.70	3.90 + α	0.45				
11	6821	4.80	2.60	0.50	P1	0.40	0.28	0.16
					P2	0.48	0.40	0.12
					P3	0.54	0.20	0.19
					P4	0.27	0.23	0.13
					P5	0.34	0.33	0.17
					P6	0.36	0.34	0.05
12	8033	2.20	1.90	0.20	P1	0.34	0.25 + α	0.47
					P2	0.23 + α	0.20 + α	0.45
					P3	0.30 + α	0.20 + α	0.23
					P4	0.24	0.19	0.11
					P5	0.21 + α	0.19 + α	0.30
					P6	0.24	0.18	0.35
13	5627	3.60	2.60	0.41				
14	5356	3.90	3.50	0.30				
15	5465	2.56	2.50	0.38				
16	5326	4.60	3.40	0.25	P1	0.30	0.26	0.38
					P2	0.29	0.25	0.28
17	6822	3.90	3.80	-				
18	5695	3.10	2.55	0.30	P1	0.78	0.45	0.24
19	5467	4.20 + α	3.70 + α	0.52				

土坑

番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	11741	1.47	1.00 + α	0.15
2	9536	1.87	1.34	0.20
3	8666	2.10	1.00 + α	0.31
4	11719	0.85	0.80	0.30
5	11358	0.88	0.85	0.26
6	11448	1.26	0.30	0.17
7	11417	1.30	0.87	0.14
8	11610	1.42	1.27	0.25
9	11450	2.00	1.90	-
10	11555	0.90	0.73	0.12
11	11562	2.24	2.13	0.23
12	11566	0.93	0.57	0.20
13	9406	0.74	0.49	0.28
14	2888	1.17	0.95	0.30
15	2936	2.65	1.90	0.30
16	7390	1.25	0.70 + α	0.58
17	7420	1.95	1.80	0.12
18	7370	3.15	1.15	0.35
19	7417	1.23	1.08	0.13
20	7382	1.05	0.84	0.11
21	7405	0.88	0.68	0.60
22	1943	2.60	1.96	0.62
23	6503	0.80	0.50	0.09
24	10372	4.00	1.50	0.48
25	7436	1.60	0.87	0.56
26	7380	2.37	1.25	0.19
27	10788	2.03	1.20	0.63
28	8452	1.40	0.60	0.20
29	5278	1.65	1.35	0.07
30	5626	1.60	1.42	0.28
31	5514	1.85	1.75	6.70
32	409	1.05	0.77	0.21
33	1414	1.30	0.57	0.47
34	1374	1.25	1.13	0.68
35	1130	1.35	1.20	0.78
36	6830	1.75	0.92	0.10

ピット

番号	遺構番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	11518	0.55	0.45	0.17
2	11341	0.33	0.28	0.14
3	11405	0.45	0.27	0.21
4	7278	0.27	0.26	0.70
5	9777	0.47	0.35	0.21
6	2974	0.26	0.25	0.37
7	6476	0.54	0.35	0.41
8	10906	0.47	0.20 + α	0.34
9	10430	0.67	0.42	0.36
10	10062	0.34	0.22	0.17
11	1865	0.40	0.36	0.09
12	7218	0.85	0.61	0.28
13	8013	0.40 + α	0.37	0.25

溝(501.521)

断面	長さ・幅(m)	深さ(cm)
A-A' 間	21.00	48
B-B' 間	7.50	22
①	1.20	20
②	3.05	30
③	2.70	27

（3） 遺構

竪穴住居跡

竪穴住居跡１号（第29図）

Ｂ－36，Ⅳ層上面で検出された。長軸約4.4m×短軸4.4m，深さ27cmを測る。遺構の北東側と北西側の一部は削平を受けており撹乱部分がみられるため，詳細なプランは不明である。住居に伴うと考えられるピットは12基検出された。遺物は総点数141点出土しているが，そのほとんどが小片で埋土ａ（暗褐色砂質土）中に含まれていた。そのうち２点を図化した。

122はくノ字に外反する比較的大型の壺の口縁部で，器台として転用したものと思われる。口径は20cmほどとなる。下位に１条の沈線が残ることから，頸部との破断は粘土紐の接合位置で行ったことが確認でき，意図的な行為と解される。きめの細かい精選胎土を使用し，両面とも刷毛目主体で調整する。123は口径8.6cm，高さ5.5cmのほぼ完形の坩で，赤色粒を含む精選胎土を使用し，器壁も薄く仕上げる。口縁部に沿って，２列の鋸歯文が描かれる。

竪穴住居跡２号（第30図）

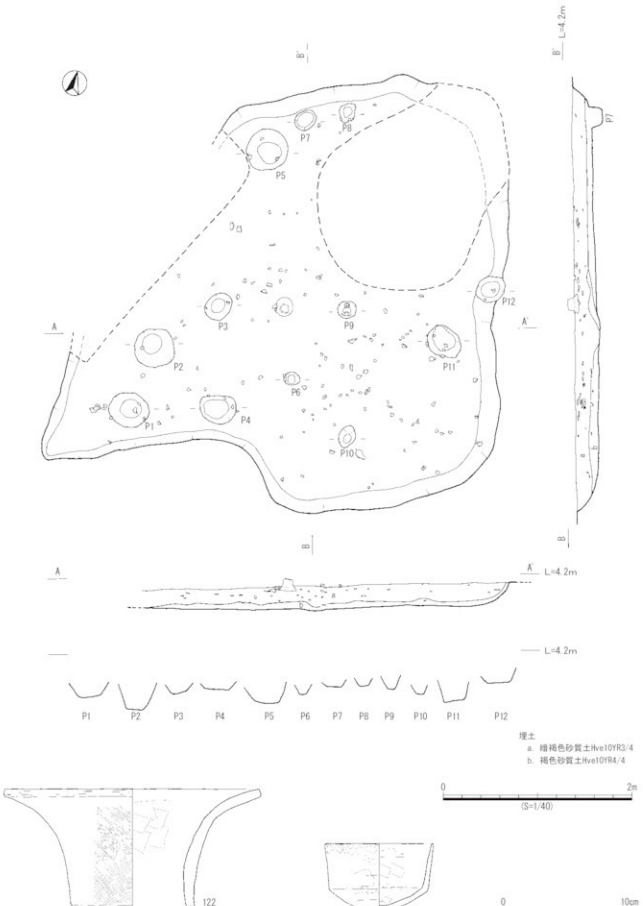
Ｂ－34区，Ⅲb層上面で検出された。南側の隅は竪穴状遺構１号を切り，北東側は土坑６号に切られる。プランはほぼ隅丸長方形で長軸2.7m×短軸2.5m，深さ34cmを測る。その北側には長軸1.6m×短軸1.3m，深さ約14cmを測る張り出部と思われる小部屋を有する。住居に伴うと考えられるピットは３基検出された。埋土はⅢ層で，埋土中より314点の遺物が出土した。そのうち３点を図化した。

124は口径15cm，高さ7.9cmの小型丸底壺で，口縁部は大きく開きながら直行し，胴部は碗状をなす。なお，口縁部とは刷毛目のカキアゲで区分するが，器壁は厚く，接地面のヘラケズリも不成形で，総じて粗雑なつくりが見られるが，精選されたきめの細かい胎土を用いる。淡橙5YRの器肌をなす。125は円錐の小型仿製鏡である。住居跡の北東側，壁の立ち上がり付近から出土した。平縁で，3.5cmほどの径を持つ。126は鉄鏃である。埋土中からの出土で，茎尻は欠損するが，鏃身部0.9cmの最小タイプの圭頭鏃である。小型仿製鏡も鉄鏃のどちらも，住居内から出土した坩と時期差が考えられ，住居との関連性等の詳細は不明である。

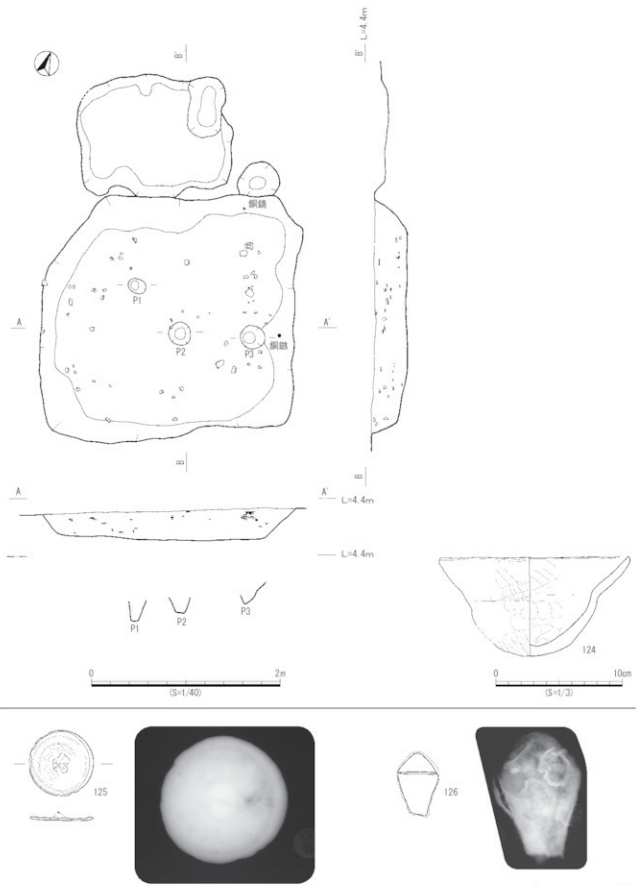
竪穴住居跡３号（第31図）

Ｂ－33区，Ⅳ層上面で検出された。竪穴住居跡２号とは約５mほどと近接しており，南西側は土坑９号と土器集中遺構７号と接するが，切り合い関係等詳細は不明である。プランは隅丸方形で，長軸5.2m×短軸4.35m，深さ20cmを測る。中心部は一段低くなっており，直径1.8m，深さ38cmを測る。住居に伴うと考えられるピットは９基検出された。遺物は約50点出土したが，小片が多く１点を図化した。

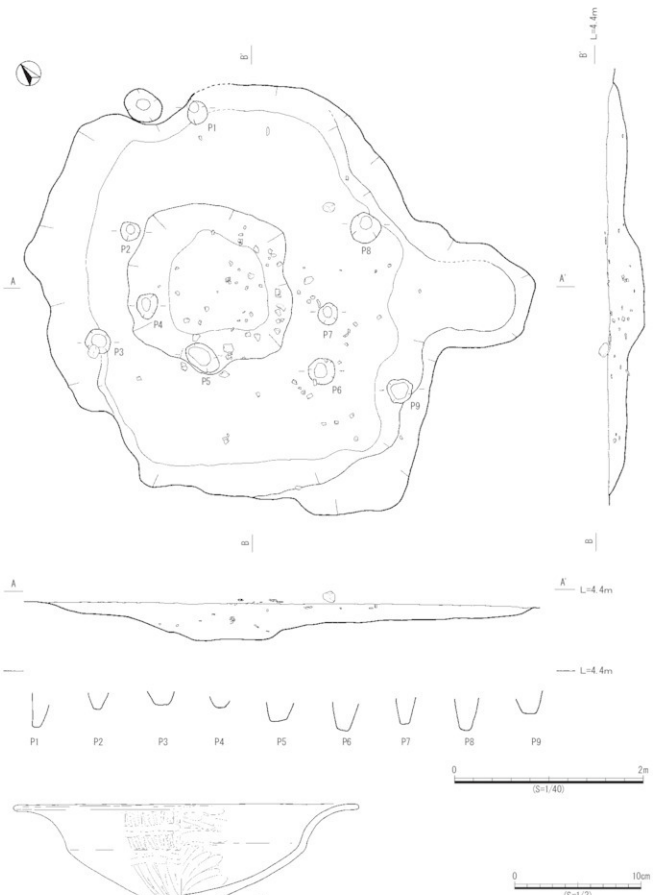
127は復元口径27cmの高坏の坏部で，坏部途中で屈折し大きく外反する。なお，脚部は欠損しているが穿孔する事例が多いとされる。外面はヘラケズリが先行し，内面は丁寧なナデで仕上げている。白色粒子等を多量に含む砂質胎土を使用し，両面に黒斑が残る。



第29図　竪穴住居跡１号および出土遺物



第30図　竪穴住居跡２号および出土遺物



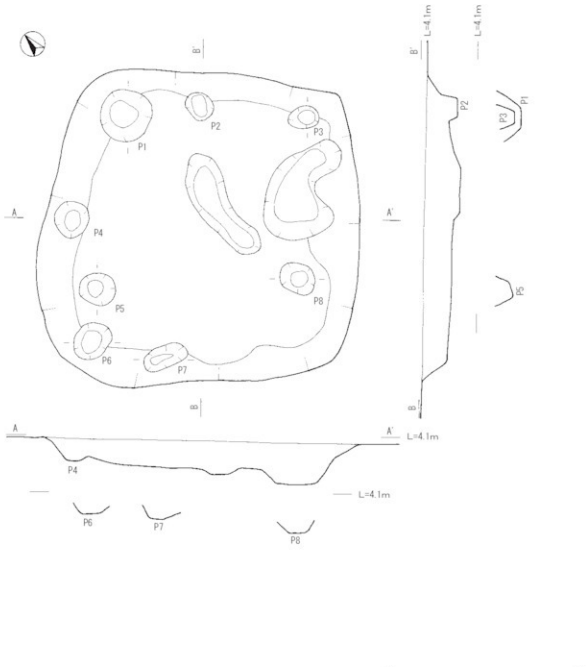
第31図　竪穴住居跡３号および出土遺物

竪穴住居跡４号（第32図）

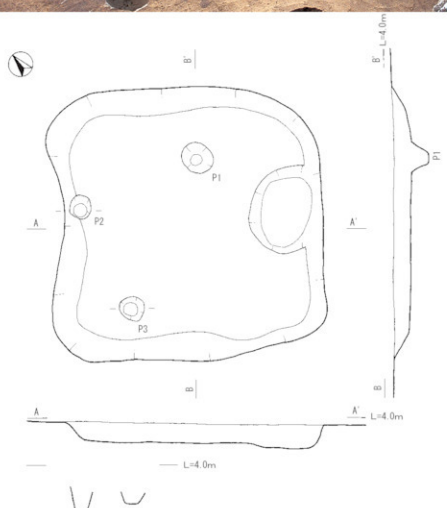
Ａ－31区，Ⅳ層上面で検出された。５号竪穴住居まで約８ｍほどと隣接し，軸方向も同じ方向を向く。プランは一辺が3.3ｍの隅丸方形を呈し，深さは30㎝を測る。内面には８基のピットと土坑状の掘り込みを２基有する。出土遺物はなかったが，検出面や埋土の状況から古墳時代の竪穴住居跡とした。

竪穴住居跡５号（第33図）

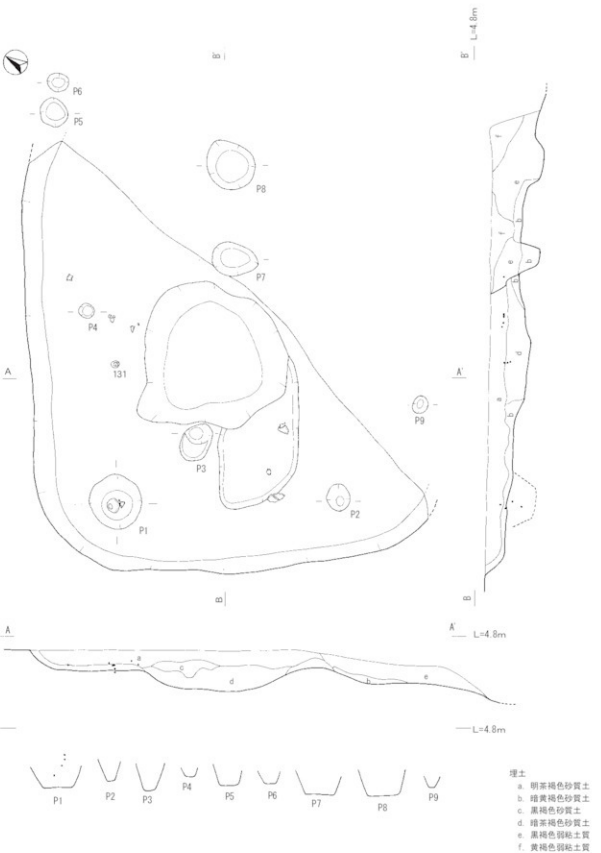
Ｂ－30区，Ⅳ層上面で検出された。４号竪穴住居まで約８ｍほどと隣接し，軸方向も同じ方向を向く。プランは長軸2.9ｍ×短軸2.8ｍの隅丸方形を呈し，深さ21㎝を測る。住居に伴うと考えられるピットは３基検出され，南東側の隅には浅い土坑状の落ち込みを有する。遺物は小片が多数出土したが，図化はできなかった。検出面や埋土の状況から古墳時代の竪穴住居跡とした。



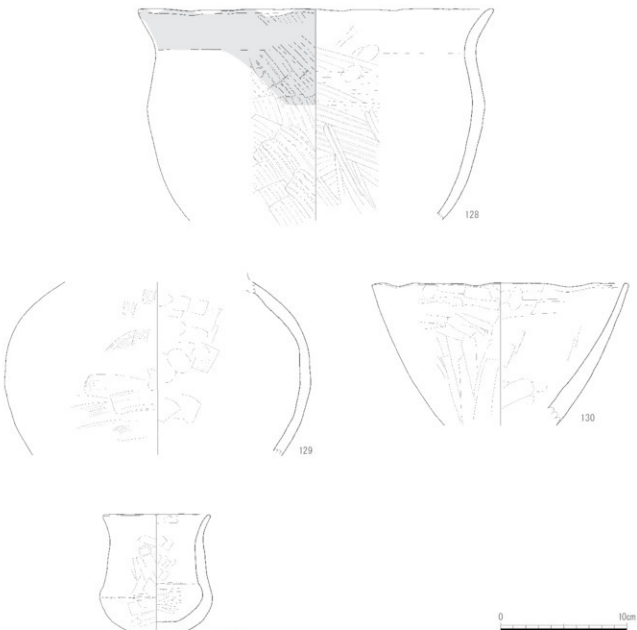
第32図　竪穴住居跡４号



第33図　竪穴住居跡５号



第34図　竪穴住居跡６号

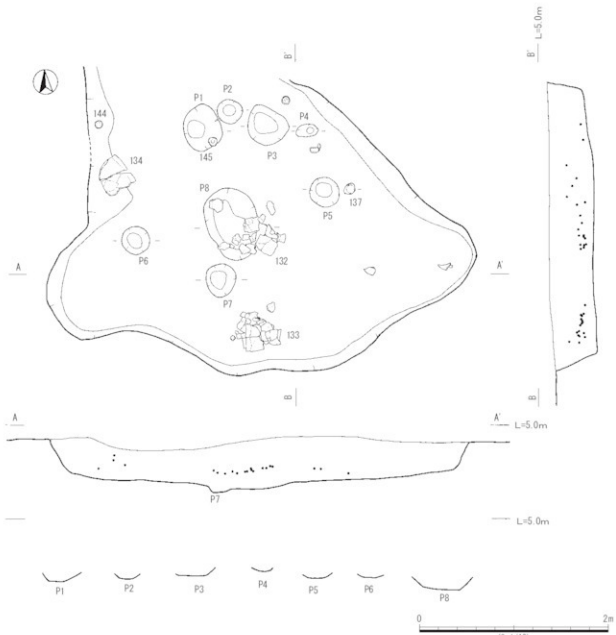


第35図　竪穴住居跡６号内出土遺物

竪穴住居跡６号（第34・35図）

C－30区，Ⅳ層上面で検出された。遺構の東側は，近世の自然流路により削平を受けている。そのため，全体的なプランはつかめないが，残存部より想定すると長軸約5.3m×短軸約5.1m，深さ55cmの隅丸長方形を呈するものと思われる。住居に伴うピットは９基検出され，そのうちピット５～ピット９は近世の自然流路により削平を受けているが，住居に伴うものと思われる。また，中央部には土坑が２基切り合った状態で検出された。遺物は小片が1095点出土しており，そのうち図化できたものは４点である。

128は復元口径28.1cmの厚手の甕で，口縁部との境界付近は刷毛目後ナデで仕上げる。器壁は厚く，重量のある仕上がりで，緩やかな波状口縁の可能性がある。129は球形状の胴部の壺で，器面は丁寧にナデるが，器壁は厚く重量がある。130は口径19.8cmの鉢で，器壁は厚い。内外とも基本は工具ナデで，内面がより丁寧である。131は復元口径8.4cm，高さ9.6cmの小型丸底壺で，口縁部は長く直行し，胴部はいわゆる偏球形で，底部は平底に近い。ヘラケズリや工具ナデを行っているが，器壁は厚く，重量のある仕上がりである。両面ともにぶい橙10YRの器肌をなす。

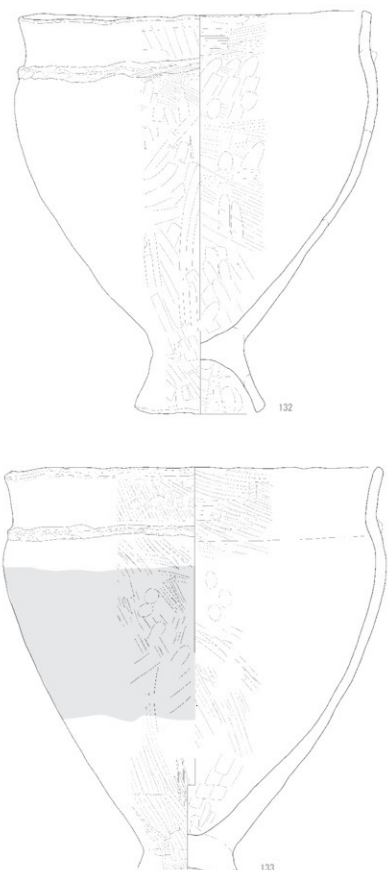


第36図　竪穴住居跡７号

竪穴住居跡７号（第36～39図）

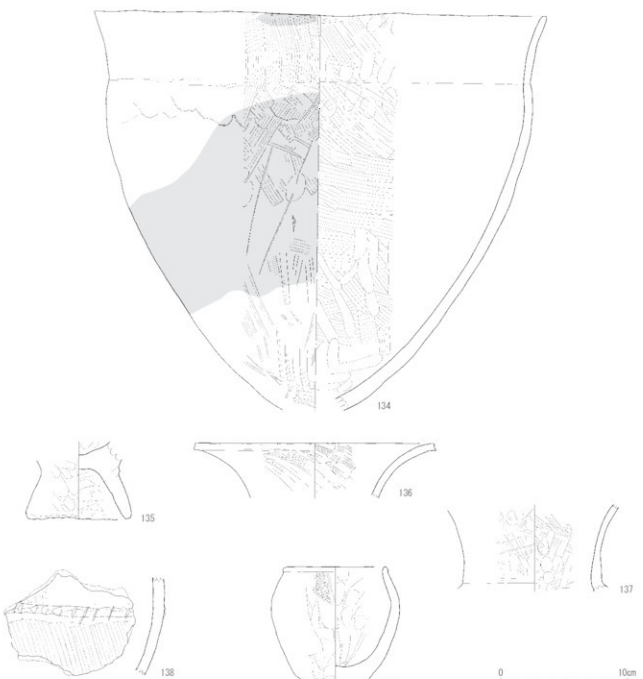
C－26区，Ⅳ層上面で検出され，竪穴住居８号に近接する。プランは歪な形状を呈し，長軸4.5m×短軸約3.2m，深さ53cmを測る。遺構の北側は前年度の調査区にあたり，その年度には遺構が確認されていないため，遺構の詳細な形状等はつかめなかった。住居に伴うと考えられるピットは８基検出された。遺物は内面を下に伏せた状態で重なって出土した甕やほぼ完形の坩など約1816点出土した。そのうち，15点を図化した。

132～135は甕である。132は口径27.1cm，高さ32cm，底径9.1cmのほぼ完形のもので，器の最大部は胴部にあり，口縁部は若干開きながら立ち上がる。脚部端部は平坦で，内面天井部は丸い。口縁部は縦方向の刷毛目を基調とし，その後，横にナデて仕上げる。胎土粒子は粗く，器壁の厚い重量のある仕上がりである。133は口径27.5～30cmと歪みをなし，脚部は破損するが，32cmほどの高さがある。口縁部は緩やかな波状で，口縁部と胴部の境に無刻突帯文を持ち，胴部が口縁部より若干張り出す。内外面とも刷毛目後，工具ナデや指頭痕で調整される。胴部を中心にベルト状に煤状炭化物の付着が見られ，外面に２か所，内面に上位に１か所の黒斑も見られる。器壁は厚く，特に重量のある甕で，浅黄橙7.5YRの器肌である。134は脚部を欠損する口径36cmの甕で，口縁部の立ち上がり，胴部との境界は刷毛目のカキアゲで段が形成される。両面とも刷毛目調整を主とし，胴上部付近では×状に重なる調整痕も残される。胴中央部に煤

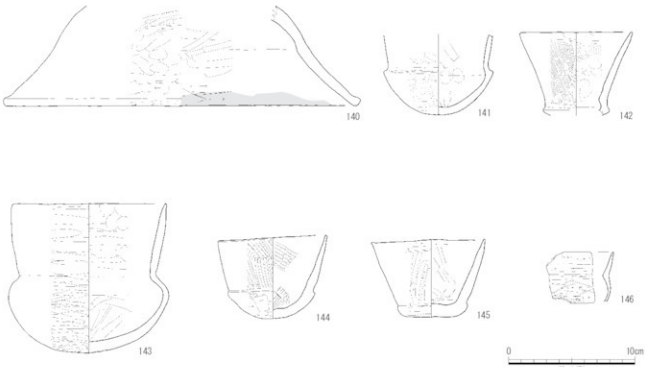


第37図　竪穴住居跡７号内出土遺物１

状炭化物が付着し，赤色粒を含む胎土はにぶい橙5YRを呈す。135は内面に輪積み痕が残る資料で，天井部は平坦面をなす。136 ～ 139は壺である。136は口径19cmの壺で，口縁部上方がラッパ状に弧を描く様に外反するタイプで，立ち上がりは直に近く，外反部は長くなると思われる。刷毛目後，部分的にナデで仕上げている。きめの細かい精選胎土を使用し，橙5YRの器肌で器壁は薄い。137は上部を欠損する壺の口縁部である。頸部との破断が粘土紐の接合面で行われており，器台に転用されたものと思われる。きめの細かい精選胎土を使用し，器面は刷毛目，内面はナデで調整する。色調は橙5YRである。138は壺の胴部片である。139は復元口径8.4cm，高さ9.7cmの平底壺で，いわゆる蛸壺状をなす。口縁部は帯状に肥厚し，器壁は底部に近づくにつれ厚くなり，安定感と重量が増す。140は復元口径28cmの蓋で，ドーム状の身部と，下方に緩やかに外反する口縁部で構成する。内面口縁部に煤状炭化物が付着し，火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。141 ～ 146は坩である。141は直行する口縁で，胴部は上位で屈折して偏球状をなすもので，口縁部と胴部比が近似するタイ



第38図　竪穴住居跡７号内出土遺物２



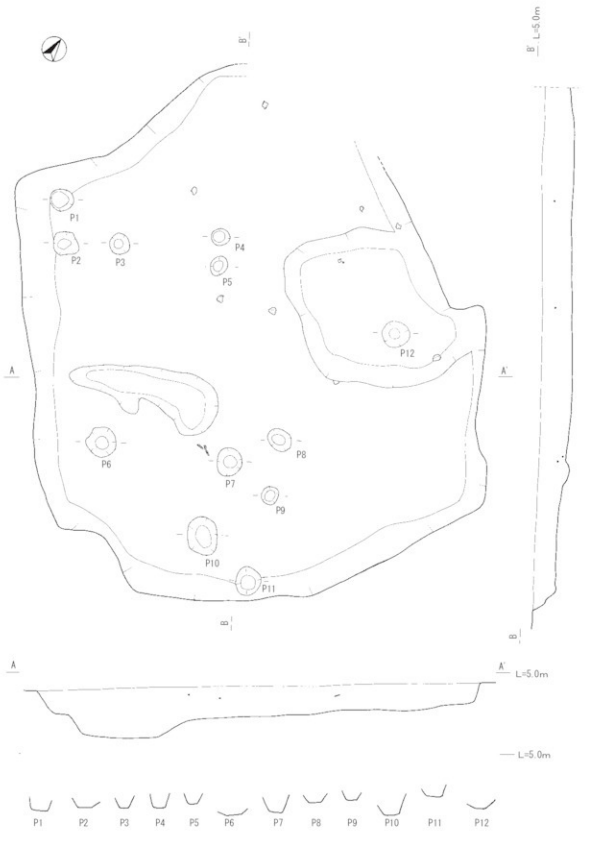
第39図　竪穴住居跡７号内出土遺物３

ブと見られる。器壁は薄く，砂質の強い胎土を使用し，ヘラミガキにより淡橙5YRと赤く仕上げる。142はラッパ状に大きく開く口縁で，胴部は上位で明瞭に屈折し，そのまま浅い偏球状の胴部を構成する。口径8.9cm，高さ6.3cmが復元され，その間の5cm近くを口縁部で占める。にぶい黄橙10YRと個性的な色調で，硬質な仕上がりをなす。143は口径12.2cm，高さ11.9cmのほぼ完形のもので，大型に区分できる。直行する外開きの口縁部と半球形の胴部で構成し，器面は入念に磨かれる。赤色粒を含む胎土で，底部に黒斑を残し硬質な焼成である。赤色顔料が塗彩された可能性がある。144は口径8.5cm，高さ6.7cmの完形の坩で，直行する外開きの口縁部と半球形の胴部で構成する。白色鉱物を含む胎土で，にぶい橙5YRの器肌は部分的に黒斑を残し，硬質な焼成をなす。145は口径9cm，高さ6.2cmの完形のもので，直行する外開きの口縁部と平底で構成する。胎土は精選されたきめの細かいもので，灰白10YRと白く発色し，底部から口縁部の1/3ほどが赤変している。146は胴部が丸く膨らむタイプで，きめの細かい精選胎土を使用し，橙2.5YRの器肌をなし，器壁は薄い。

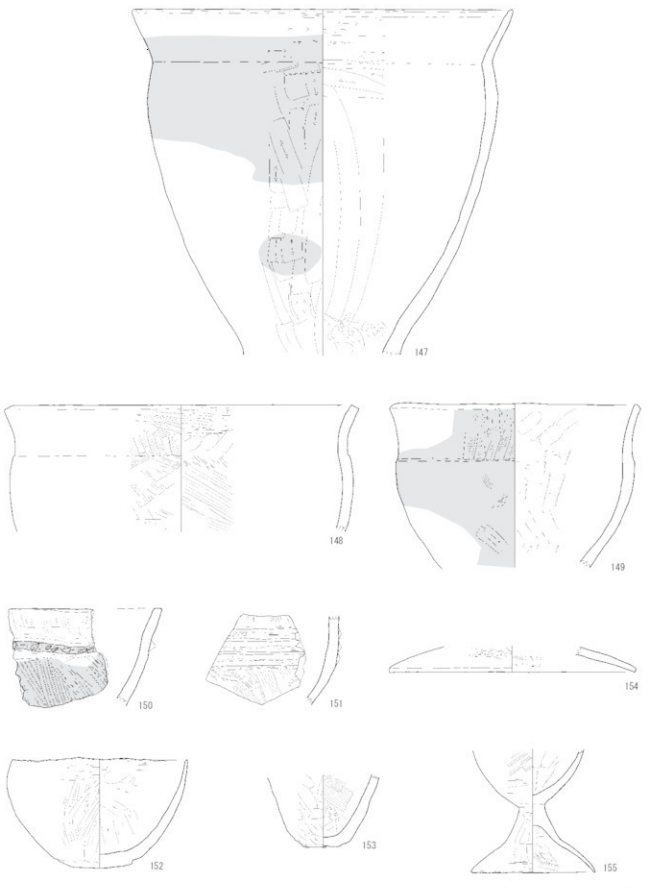
竪穴住居跡８号（第40～42図）

C－25・26区，Ⅳ層上面で検出され，西側は竪穴住居７号と近接する。プランは長軸約7.1m×短軸約６mの不定形な形状を呈し，深さは約63cmを測る。遺構の北側は前年度の調査区にあたり，その年度には遺構が確認されていないため，遺構の詳細な形状等はつかめなかった。内部には土坑状の落込みが２か所みられる。住居に伴うと考えられるピットは12基検出された。遺物は1033点出土し，そのうち15点を図化した。

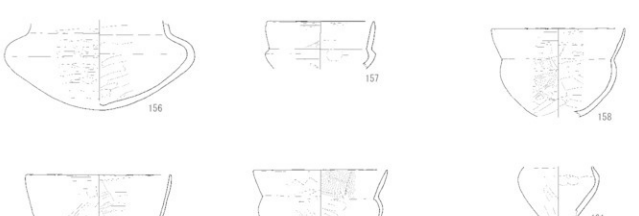
147～150は甕である。147は復元口径30cmほどで，口縁部はくノ字に外反する。なお，口縁部と胴部の境界に残る横方向の痕跡から，刷毛目のカキアゲが先行したことが読み取れる。内外ともにぶい橙10YRで，口縁部から胴中央部に煤状炭化物が付着する。器面調整は丁寧な工具ナデで，火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で，キラキラな器面をなす。148は復元口径28.2cmほどで，刷毛目のカキアゲで胴部との境が造られる。砂粒の多い胎土で，特に，赤色粒の混入が目立つ。149は刷毛目のカキアゲで胴部との間に段を設けた後，再度ナデて仕上げたもので，19cmの口径を復元している。リング状の煤状炭化物の付着が見られる。150は傾きが不明であるが，頸部に刻目突帯を持つ甕で，極めて堅牢な焼成が見られる。特に内面では，胎土に含まれる大粒の粒子が発泡する。151は壺の胴部で突帯文が巡る。152は口径14cm，高さ8.6cmの鉢で，5cmほどの平坦な接地面を持つ。口縁部が緩やかに内弯気味に立ち上がる鉢で，器



第40図　竪穴住居跡８号



第41図　竪穴住居跡８号内出土遺物１



第42図　竪穴住居跡８号内出土遺物２

壁が厚く，重量があり，接地面を起点にヘラケズリ痕跡が明瞭に残される。底部周辺に黒斑が円形に広がる。器肌はにぶい橙7.5YRを呈す。153は平底の小型鉢で，砂質の強い胎土を使用し，重量のある仕上がりをなす。なお，黒色と赤色の２つの破片に分割される。154は高坏の脚部と判断し，19.5cmほどの底径を復元した。火山灰性のガラス質粒子を含む，超微細で精選された胎土を使用し，両面とも丁寧に磨かれ，光沢のある橙5YRの器面を呈している。155は小型器台として取り扱い，中村分類の小型器台Ａ型式に区分する。精選されたきめの細かい胎土を使用し，器壁は薄い。丁寧な工具ナデやミガキ状の仕上げが見られ，器肌は浅黄橙7.5YRをなす。搬入品の可能性が高い。156 ～ 161は坩である。156は内傾に直線的に立ち上がる口縁部と，偏球状の胴部で構成するもので，精選されたきめの細かい胎土を使用している。器壁は薄く，丁寧な工具ナデやミガキ状の仕上げが見られることから搬入品の可能性が高い。器肌はにぶい橙5YRを呈する。157は復元口径8.6cmの坩で，短い口縁部に偏球形の胴部を持つ（１型式）。口唇部は尖り，工具ナデに指ナデを重ねている。胎土は，精選したきめの細かいものを使用する。158は復元口径10.6cmで，口縁部は外に開き，丸く膨らむ胴部からそのまま丸底に至る（２型式）。器面では刷毛目にナデを重ね，精選したきめの細かい胎土を使用する。器肌はにぶい橙7.5YRをなす。159は復元口径11.6cmの坩で，口縁部は外に開き，丸く膨らむ胴部からそのまま丸底に至る特徴は，158と同じである。器面は丁寧にナデ，精選したきめの細かい胎土を使用し，器壁は特に薄い。器肌は赤みが強く橙2.5YRを呈する。160は復元口径10.5cmの胴部の丸い坩で，口縁部の一部に細沈線による鋸歯文が描かれる。外面は工具ナデ後指ナデ，内面は口縁部に刷毛目が残される。精選された胎土で，器壁は薄く，浅黄橙7.5YRと白い。161は6.5cmの丸い胴部で，口縁部は短く外に開く形状が想定される。精選された胎土で，器壁は薄く，浅黄橙7.5YRと白い。

竪穴状遺構

竪穴状遺構１号（第43図）

Ｂ－34区，Ⅳ層上面で検出された。北側の隅を竪穴住居２号により切られる。プランは長軸3.6m×短軸2.7mの隅丸長方形状で，深さは33cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは３基検出された。遺物は小片が出土し，図化するには至らなかった。竪穴住居２号との切り合い関係から，２号竪穴住居より古い時期の遺構と考えられる。竪穴住居の可能性も考えられる遺構である。

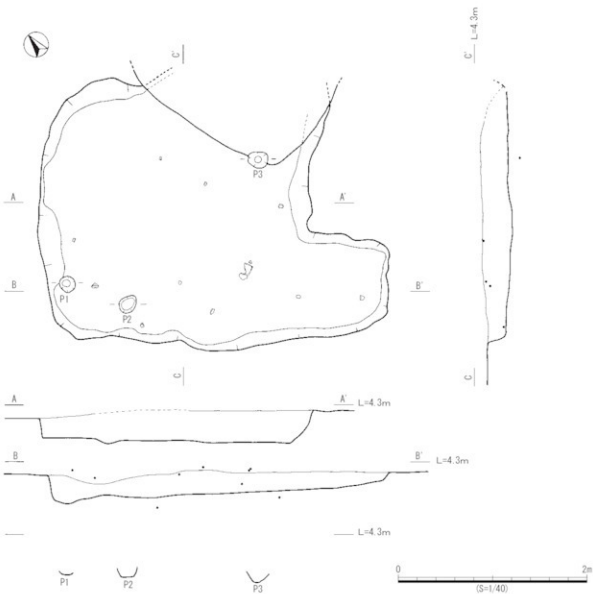
竪穴状遺構２号（第44図）

Ｃ・Ｄ－32区，Ⅳ層上面で検出された。プランは長軸2.9m×短軸2.4mの楕円形を呈し，深さは20cmを測る。遺物は158点出土したが，そのほとんどが小片で，図化できたものは２点である。

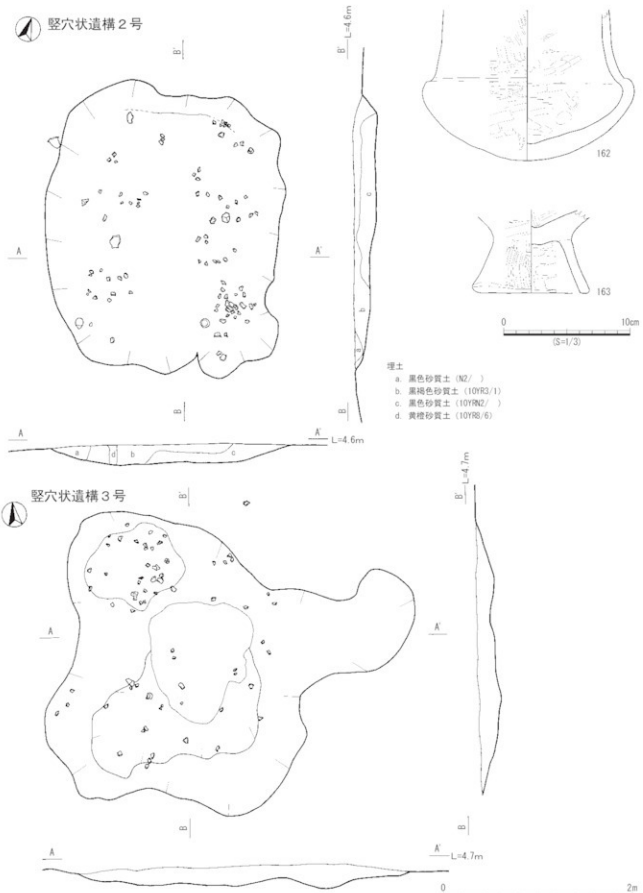
162は坩である。胴部の最大径が17cmほどで，口縁部は直行し，胴部は扁形を呈す。外面はヘラ状工具によるミガキ，内面は工具ナデや指ナデで仕上げ，器壁は厚く，重量がある。胎土は，多量の火山灰性のガラス質粒子を含み，外面が赤褐2.5YR，内面が赤灰2.5YRに発色する。163は底径8.2cmの脚部で，内面天井部は平坦に仕上げる。

竪穴状遺構３号（第44図）

Ｄ－32区，Ⅳ層上面で検出された。プランは不定形である。長軸3.45m×短軸2.9mの不定形な形状を呈し，深さは16cmを測る。近隣には土器集中遺構８号が存在する。遺物は168点出土しているが，すべて小片であったため図化できなかった。



第43図　竪穴状遺構１号



第44図　竪穴状遺構２・３号および２号内出土遺物

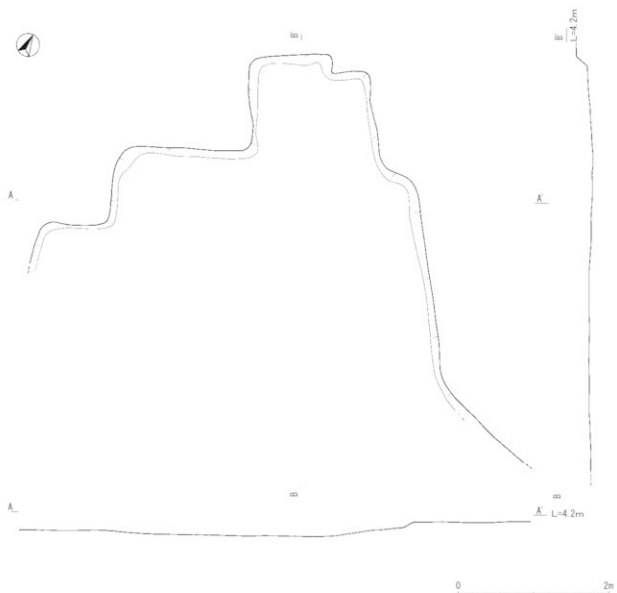
竪穴状遺構４号（第45図）

Ｂ－27・28区，Ⅳ層状面で検出された。東側は５号竪穴状遺構と接するが，切り合い関係はつかめなかった。南側は調査年度が異なり，次年度の調査区にあたるが遺構は確認されていない。プランは不定形で，数基の遺構が切り合っている可能性も考えられる。遺構内にピット等は検出されなかった。遺物は317点出土したが，小片のため図化できなかった。

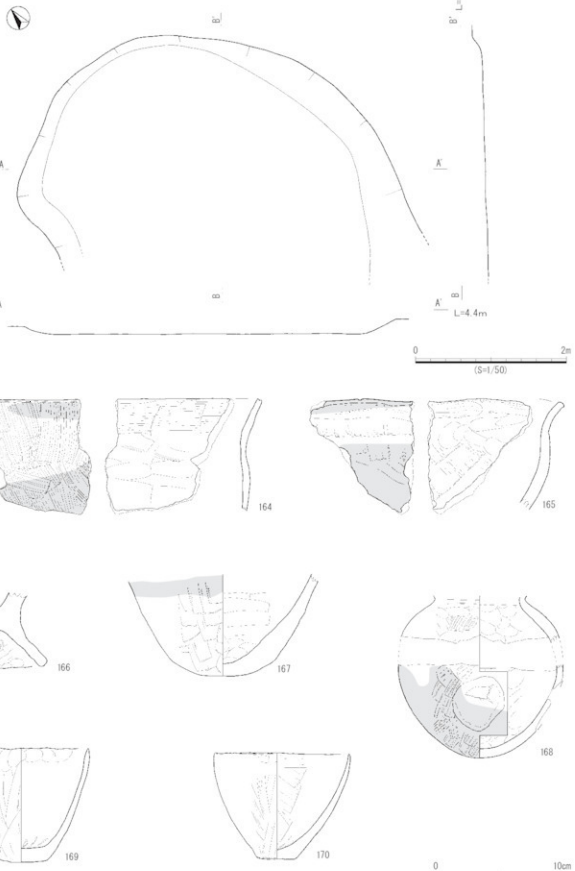
竪穴状遺構５号（第46図）

Ｂ－27区，Ⅳ層上面で検出された。西側は４号竪穴状遺構と接するが，切り合い関係はつかめなかった。南側は調査年度が異なり，次年度の調査区にあたるが遺構は確認されていないため，詳細なプランは不明で，数基の遺構が切り合っている可能性も考えられる。遺物は423点出土し，そのうち７点を図化した。前述したように，本遺構は４号竪穴状遺構と切り合っているため，これら遺物は４号竪穴状遺構のものである可能性も残る。

164・165は甕または鉢の口縁部である。164は口縁部に縦方向に施された刷毛目で，胴部との境界を明確にしている。両面とも浅黄橙7.5YRの器肌で，器壁は薄く，軽量な仕上がりを見せる。165は波状で口縁部の短い鉢で，胴部との境界は刷毛目状工具のカキアゲが明瞭である。煤状炭化物の付着も認められる。166は外反気味に開く小振りの脚部で，端部は外に丸く収められる。長石等の白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で，重量のある仕上がりとなる。なお，内面は煤状炭化物が付着



第45図　竪穴状遺構４号



第46図　竪穴状遺構５号および出土遺物

する。167は壺の底部で，器壁は厚く重量がある。長石等の白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子を大量に含む。168は小型丸底壺である。図上復元をおこなったもので，口縁部は欠損し，胴部下位には焼成後外面からあけられた穿孔が確認される。外面は細かい刷毛目を重ね，内面はナデで仕上げる。なお，外面の観察からは赤色の化粧土を塗られていた可能性がある。破断面はサンドイッチ状を呈する。169は小型鉢で，口径10.4cm，高さ9.1cmで4.6cmほどの平底をなす。精選されたきめの細かい胎土で，若干軟質な焼成のため器面の風化が著しい。器肌は橙5YRと明るい。170は口径10.6cm，高さ8.5cmほどの完形の鉢で，口唇部は周辺はナデで仕上げる。胎土は赤色粒を含み，やや軟質の焼成である。器肌は淡橙5YRをなす。

竪穴状遺構６号（第47図）

Ｅ－28区，Ⅳ層上面で検出されたが，詳細な位置情報は不明である。南側はトレンチにより削平されている。プランは残存部分で長軸約1.85m×短軸約1.8mの隅丸方形を呈し，深さは43cmを測る。遺構の中央部には２基のピットが検出された。遺物は214点出土したが，小片で図化できなかった。

竪穴状遺構７号（第47～50図）

Ａ・Ｂ－24区で検出された。プランは長軸2.7m×短軸2.3mの隅丸方形を呈し，深さは約31cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは３基検出された。検出面の層位や埋土の状況，遺物の出土状況などの情報もないため，時期判定が困難であったが，遺物が古墳時代のものであったため，この時期の遺構として認定した。遺物は1035点出土しており，そのうち29点を図化した。

171～177は甕である。171は復元口径28.4cmの甕で，口唇部は狭い平坦面をなし，外面は刷毛目で横線を形成する。薄手且つ堅牢な焼成で，両面は黄橙10YR，中央は掲灰のサンドイッチ状の破断面である。胴部には煤状炭化物の付着が見られる。胎土では白色鉱物が目立つ。172は復元口径28cmで，2mmほどの白色粒子が大量に含まれる。内面では，口縁部のヘラナデと頸部下位の刷毛目が明確に区分される。173は復元口径31cmの甕の口縁部で，胴部との境界は殆ど見られない。やや軟質な焼成で，2～3mmの白色粒子と大量の火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含み，キラキラとした器面をなしている。174は復元口径30cmの甕の口縁部である。きめの細かい胎土を使用し，器壁は薄く，内外面ともに丁寧な刷毛目調整痕を残すが，特に内面では輪積み痕を明瞭に観察できる。また，特徴的な煤状炭化物付着が見られる。175は復元口径30.4cmの甕で，口縁部は直行し，胴部との境界は刷毛目のカキアゲでかろうじて形成される。重量のある器体で，両面に激しい刷毛目が残される。176は復元口径21cmで，器壁は薄く，赤色粒が目立つ。煤状炭化物は，ベルト状に付着する。胴部との境界は，刷毛目のカキアゲで区分される。177は復元口径21.4cmの甕で，直行する口縁部で，口唇部は尖り気味にナデ，外面は刷毛目で稜線を形成する。器壁は厚く，硬質且つ堅牢な焼成である。胎土は特に，火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含み，キラキラとした器面をなしている。胴部には縦方向の煤状炭化物（吹きこぼれ）の付着が見られる。

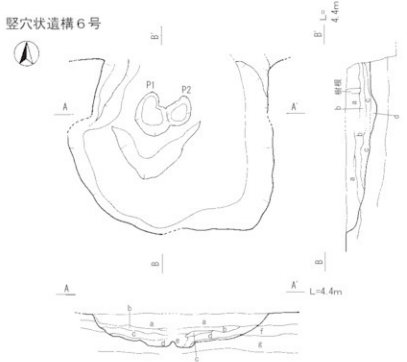
178，179は壺である。178は口径17.8cm，高さ24cmの丸底壺で，外面は口縁部が刷毛目のナデ，胴部がヘラケズリ状の工具ナデ，底部が工具ナデで，内面は刷毛目の工具ナデを主に，底部では指頭痕が残される。胎土は白色粒子と多量の火山灰性のガラス質粒子で構成され，キラキラとした器面を呈している。胴部を取り巻くように煤状炭化物の付着が見られる。179は復元口径18cmの壺で，両面ともにぶい橙5YRで，きめの細かい胎土を使用している。

180～183は鉢である。180は復元口径21.8cmの台付鉢で，脚部の端部は欠損する。口縁部が短く直行するもので，口唇部はナデで丸く収まる。器壁は厚く，重量のある仕上がりで，多量の火山灰性のガラス質粒子を含むことから，特徴的にキラキラとした器面をなす。器肌はにぶい橙7.5YRをなす。181は復元口径32.3cmの器壁の薄い鉢で，両面に激しい刷毛目が残される。182は甕あるいは鉢の脚部で，端部は丸く，天井部もドーム状をなす。器壁は厚いが，若干軽量な仕上がりで，多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。183は甕あるいは鉢の脚部で，端部は平坦で，天井部は平坦に近いドーム状をなす。器壁は厚く，重量な仕上がりで，白色粒子等を多量に含む砂質胎土を使用する。

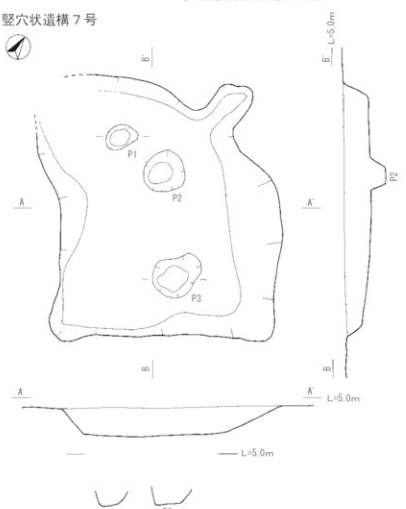
184～188は小型丸底壺である。184は胴部での復元最大径が14.5cm程で，口縁部が直行し，偏球形の胴部の小型丸底壺と見られる。頸部は刷毛目状工具のカキアゲで，外面はミガキ，内面は工具ナデや指ナデで器壁を薄く仕上げる傾向が見られる。胎土は，多量の火山灰性のガラス質粒子を含み，きめは細かい。185は胴部での復元最大径が24.6cmの，小型丸底壺の胴部と見られる。多量の火山灰性のガラス質粒子を含むきめの細かい胎土を用いているが，器壁は厚く，重量がある。186は坩ないし小型丸底壺で，平坦な接地面を持つ。胴部形状は蕪形で，白色粒子等を多量に含む砂質胎土を用い，重量のある仕上がりで，黒斑がある。187は，丸底壺と思われるが詳細な形状は不明。器壁の厚い，重量のある仕上がりで，黒斑がある。188は平底で袋状の胴部形状で，頸部が急激に締まる丸底壺で，きめの細かい胎土を使用し，外面は丁寧にナデられる。なお，破断面では，輪積み痕がそのまま残される。カクセン石等の黒色鉱物や火山灰性のガラス質粒子も含まれる。

189～191は坩である。189は復元口径10cmの器壁の厚いもので，外面はミガキ後ナデで仕上げている。190

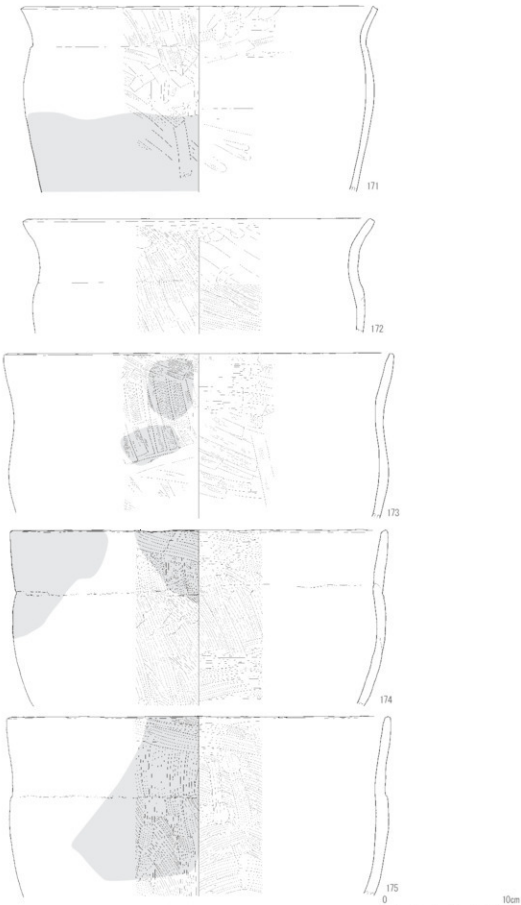
竪穴状遺構６号



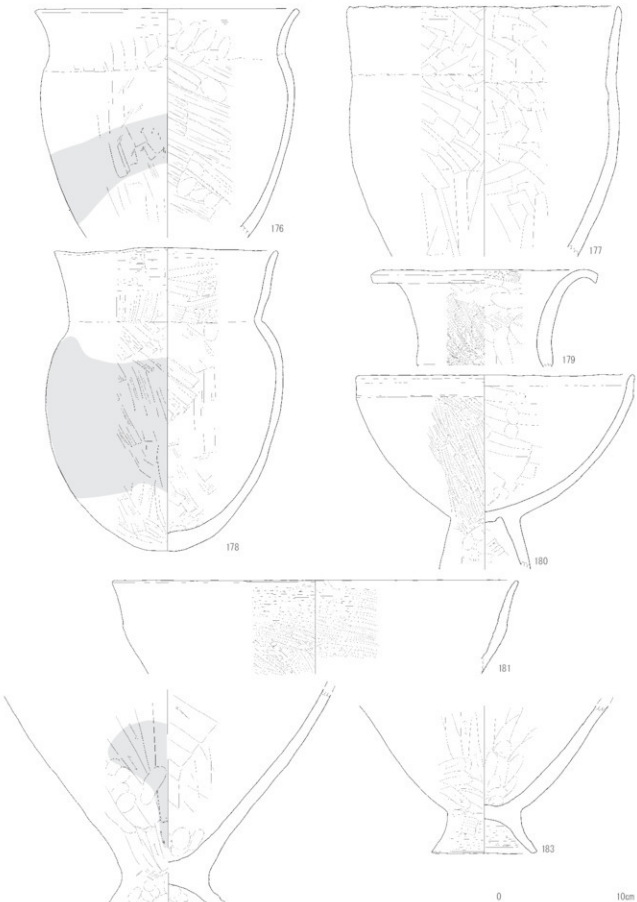
竪穴状遺構７号



第47図　竪穴状遺構６・７号



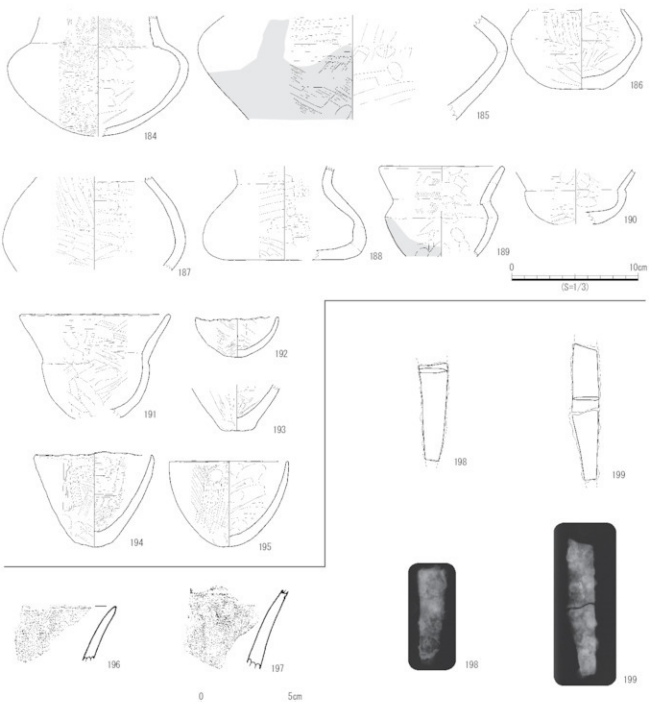
第48図　竪穴状遺構７号内出土遺物１



第49図　竪穴状遺構７号内出土遺物２

は口縁部は直線的に外反し，偏球形の胴部で，きめの細かい胎土を用いるが，器壁は厚い。胴部境界は端正な正円である。191は復元口径12cmの器壁の厚い壺で，外面は工具ナデ後指ナデ，内面は工具ナデに一部指ナデが加えられる。火山灰性のガラス質粒子に加え，1～2mmの長石や2～3mmの岩粒を含み，ザラザラとした器面で，橙5YRと赤い。

192～195は小型鉢である。192は口径6.6cm，高さ3.3cmの小型鉢で，外面は工具ナデ，内面は指ナデや指押さえが見られる。口縁部は指押さえにより小さな波状をなし，胎土には火山灰に含まれるガラス質粒子を含む。193は小型鉢の底部で，2.5cmほどの丸平な接地面を持つ。両面とも工具ナデであるが，内面は丁寧に指でナデられ，鮮やかな橙5YR'で，光沢を保っている。胎土にはガラス質の粒子を含む。194は口径9.1cm，高さ7.6cmの器壁の厚い小型鉢で，接地面中央部がわずかに突出する。外面は縦方向，内面は横方向の刷毛目が明瞭で，内底面は指で押さえられる。やや大粒の赤色粒を含み，ガラス質の



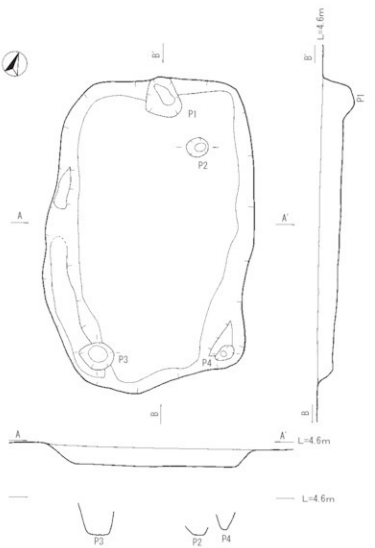
第50図　竪穴状遺構７号内出土遺物３

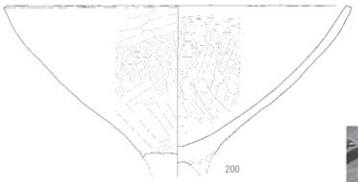
粒子も確認される。195は復元口径9.4cm，高さ6.8cmの小型丸底鉢で，端正な刷毛目が見られる。196，197は外面に櫛歯文を有する壺の口縁部で，小片のため口径，傾き等の詳細は不明である。196の器肌はにぶい橙2.5YRを呈する。197は精選胎土で，器肌はにぶい橙5YRを呈する。198，199は混入品と考えられるが，ここで掲載した。198は右側を，199は左側を刃部とする刀子の可能性が高い。

竪穴状遺構８号（第51図）

A'−22区で検出された。検出時の層位や埋土の情報は不明であるが，遺構内より出土した遺物より古墳時代の遺構と認定した。プランは長軸3.3m×短軸2.2mの長方形状のプランを呈し，深さは20cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは４基検出された。竪穴状遺構としたが，竪穴住居跡の可能性も考えられる遺構である。遺物は158点出土したが，そのほとんどは小片で，そのうち１点を図化した。

200は口唇部が平坦な鉢で，脚部を欠損する。復元口径26.8cmの漏斗状の鉢で，外面は刷毛目後工具でナデ，内面は刷毛目にヘラケズリを加え，更に，部分的にナデて仕上げている。赤色粒や黒色鉱物を含む胎土で，器面はザラザラとした感じで粗い。





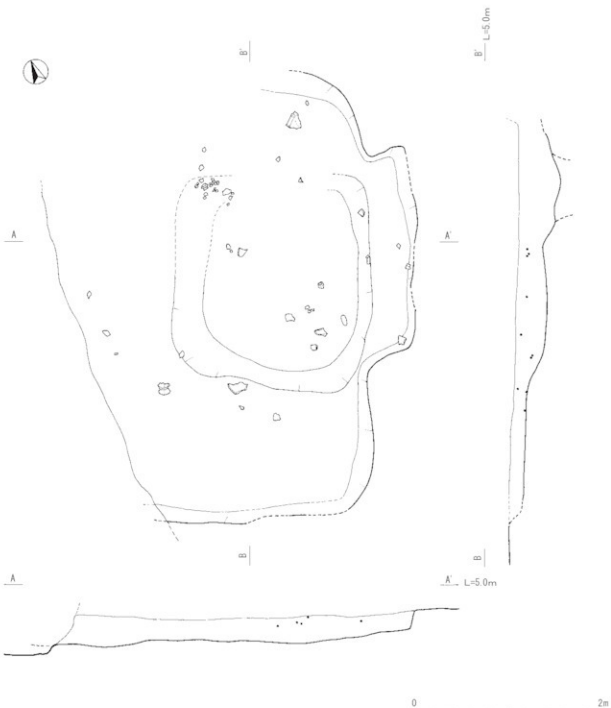
第51図　竪穴状遺構８号および出土遺物

竪穴状遺構９号（第24図参照）

Ｅ－24区，Ⅲ層上面で検出された。竪穴状遺構10～13号とは近在する位置にある。埋土はⅡ層である。プランは隅丸方形を呈すると思われる。遺構の深さや埋土の状況，遺構に伴うピット等の詳細な情報が記載された遺構図がないため，これ以上のことは不明であるが，検出された層位より古墳時代の遺構と認定した。遺構の位置と形状は第24図（ｐ44）に掲載した。遺物は452点出土しているが，全て小片で図化するにいたらなかった。

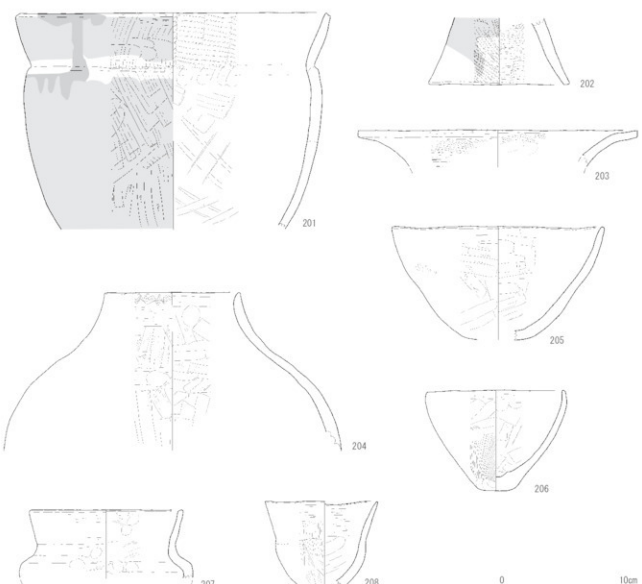
竪穴状遺構10号（第52，53図）

Ｄ－24区，Ⅲｂ層上面で検出された。竪穴状遺構９号，11～13号とは近在する位置にある。西側は後世の溝状遺構で削平を受けており詳細なプランは不明である。中央部には一辺約2ｍの隅丸方形状の浅い落ち込みが見られる。竪穴住居跡の可能性も考えられるが，ピットが検出されなかったため竪穴状遺構とした。遺物は231点出土し，そのうち８点を図化した。



第52図　竪穴状遺構10号

201は復元口径25cmの甕で，外面のくびれは，縦方向の刷毛目により深く明瞭に形成される。口唇部からくびれ部にかけ及びくびれ部直下に，煤状炭化物を縦方向に断ち切る筋状の消失（吹きこぼれ痕）が認められる。202は直線的形状を呈する甕の脚台の裾部で，内外とも短い刷毛目調整が繰り返されされ，硬質な焼成をなす。203は復元口径22.2cmの壺で，口唇部は平坦で，内外とも刷毛目後ナデ，微細な胎土を用い器肌は橙2.5YRと赤く，軽量な仕上がりとなる。204は復元口径10.8cmの短頸壺で，口縁端部にヘラ描き鋸歯文を描く。外面は縦方向の刷毛目や工具ナデ，内面は横方向の工具ナデで調整しているが，輪積み痕は残される。内外ともににぶい橙7.5YR，破断面の中央は褐灰7.5YRで，サンドイッチ状となる。205は復元口径17.0cm，高さ9cmの鉢で，口縁部は横にナデて尖り気味で，3cm程の平坦な接地面が復元される。外面上部にはヘラナデ時の粘土だまりが残され，2～3mmほどの岩粒を含む胎土で，硬質な焼成である。206は口径10.5～11.2cm，高さ8cmの完形の小型鉢で，口唇部は丸くナデ，口縁部は内弯気味に仕上げ，接地面は2.5cmほどの円形の平坦面をなす。胎土は微細な白色粒や黒色粒を含み，外面の刷毛目は丁寧で，内底面は指押さえで仕上げる。207は復元口径12.2cmほどの小型丸底壺と見られる。ザラザラな器面で，カクセン石や火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含み，両面ともにぶい橙7.5YRの器肌である。208は復元口径8.4cmの坩で，底部は欠損する。口縁部は，ナデて波状で尖り気味に仕上げる。胴部以下の器壁が厚く，輪台充填による成形との指摘（久住氏）を受ける。器肌は光沢のある明赤褐2.5YRと赤く，硬質で2mmほどの白色粒が見られる。

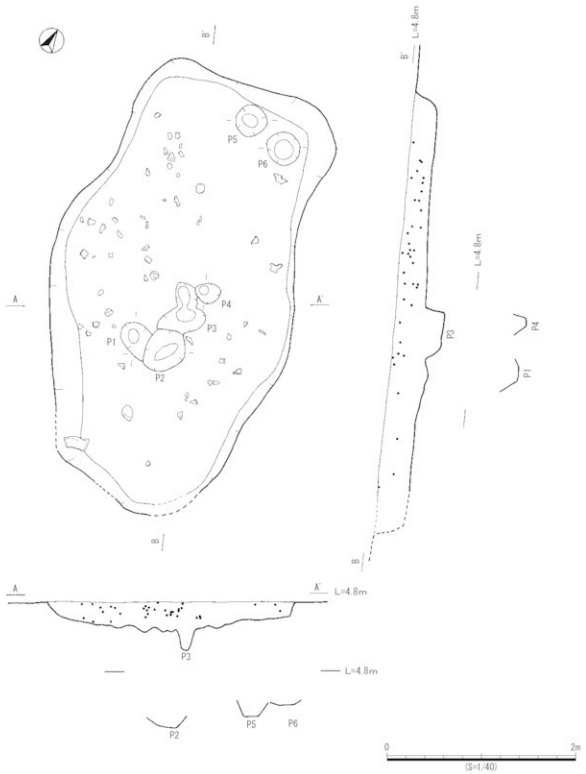


第53図　竪穴状遺構10号内出土遺物

竪穴状遺構11号（第54，55図）

D－23・24区，Ⅲ層上面で検出された。竪穴状遺構９号，10号，12号，13号とは近在する位置にある。プランは長軸4.8m×短軸2.6mの隅丸長方形を呈し，深さは50cmを測る。遺構に伴うピットは６基検出された。形状は不定形であるが，竪穴住居の可能性も考えられる。遺物は埋土中より小片が474点出土した。そのうち６点を図化した。

209は縦方向の刷毛目のカキアゲが明瞭な資料で，器種及び傾き等は不明である。なお，内面も横方向の刷毛目調整が行われている。210は底径5.8cmを測る。器種は不明である。211は底径9cmを測る甕の脚部である。212

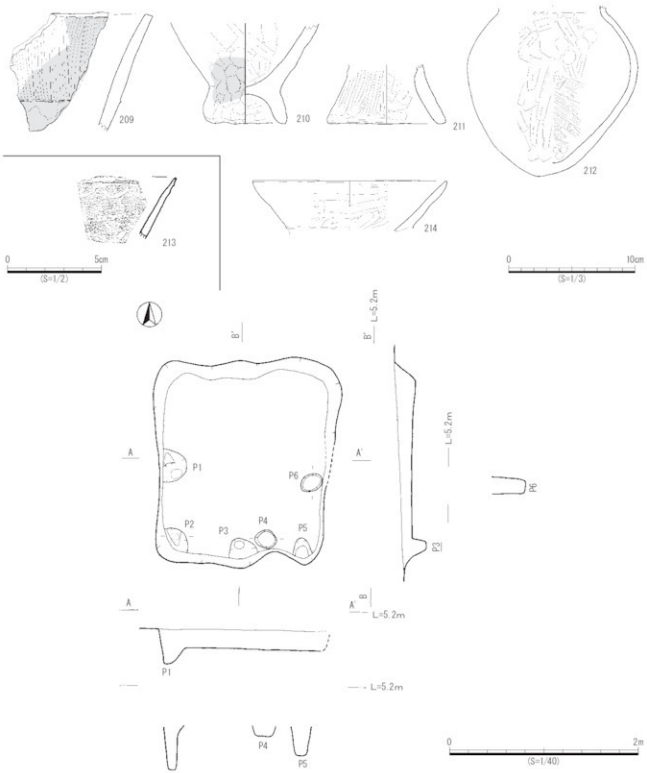


第54図　竪穴状遺構11号

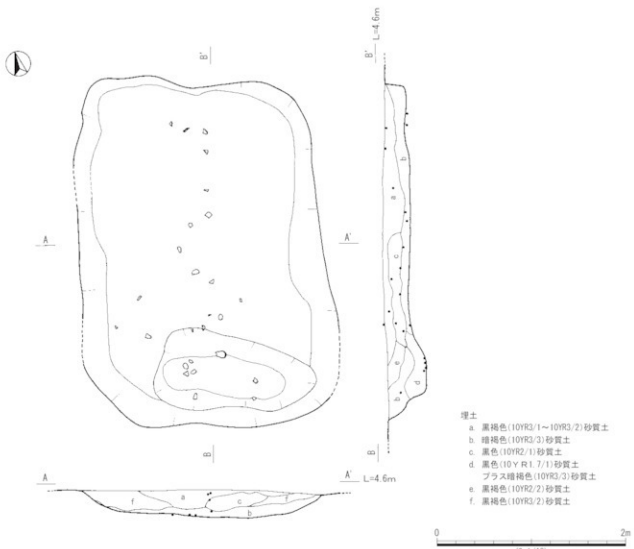
は尖り気味の小型壺の底部で，器壁が厚く，重量がある。213は口縁部に櫛描波状文を有す坩で，口径，傾き等は不明である。器壁は淡橙5YRを呈する。214は口径15.4cmを測る。器種及び傾き等は不明である。

竪穴状遺構12号（第55図）

D－23区，Ⅲb層上面で検出された。竪穴状遺構９～11号，13号とは近在する位置にある。プランは長軸2.2m×1.9mの隅丸方形を呈し，深さは約20cmを測る。遺構に伴うと考えられるピットは，６基検出された。竪穴状遺構としたが，竪穴住居跡の可能性も考えられる。遺物は土器の小片が１点出土しているが，図化はしなかった。



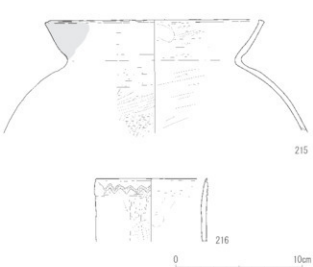
第55図　竪穴状遺構11号内出土遺物および12号



竪穴状遺構13号（第56図）

E－23区，Ⅳ層上面で検出された。竪穴状遺構９～12号とは近在する位置にある。プランは長軸3.6m×短軸2.6mの隅丸長方形を呈し，深さは41cmを測る。南壁の隅は後世の土坑により切られる。また，住居内の南壁には，長軸1.8m×短軸0.8mの土坑状の落ち込みがみられ，その部分の埋土は，黒色砂質土と暗褐色砂質土であった。遺構に伴うピットは確認されなかったが，竪穴住居跡の可能性も考えられる遺構である。遺物は約375点出土したが小片が多い。そのうち２点を図化した。

215は丸底甕の口縁部で，復元口径は16.8cmとなる。器壁が薄く，最終的にはナデで仕上げるが，胴部の一部にはタタキ痕らしき痕跡も見られる。内面はヘラケズリで，1mmほどの金雲母を含む胎土で，にぶい黄橙10YRと特徴的な器肌を呈し，軽量な仕上がりをなす。216は復元口径8.8cmで，精選したきめの細かい胎土を使用し



第56図　竪穴状遺構13号および出土遺物

た器壁の薄い堆で，明るい橙5YRの器肌をなす。外面では縦方向の工具ナデ，内面では横方向にナデ，口縁部直下の浅い沈線で区画間に，櫛状工具で鋸歯文が施される。

竪穴状遺構14号（第57図）

E－21区，Ⅲ層上面で検出された。竪穴状遺構15号とはほぼ接する位置関係にあり，竪穴状遺構16～19号とは近在する位置にある。プランは不定形で，長軸3.9m×短軸3.5m，深さ30cmを測る。遺構に伴うピットは検出されなかった。遺物は埋土中より小片が816点出土した。そのうち3点を図化した。

217は甕又は鉢の口縁部で，詳細な傾き等は不明である。口縁部と胴部の境界は刷毛目のカキアゲで区分される。両面ともに丁寧な仕上げで，外面は黒7.5YR，内面は褐灰7.5YRで光沢を保っている。また，火山灰性のガラス質粒子を大量に含む胎土で，特徴的なキラキラとした器面を呈している。218は甕の底部資料で，内底面の工具ナデが良く残される。脚は短く，据が若干外に広がる。外はにぶい橙，内は褐灰で，胎土は砂粒を多く含み，キラキラとした器面である。219は高坏の脚部で，外は刷毛目，内は指ナデと工具ナデが整然と行われた痕跡が見られる。きめが細かく火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で，キラキラとした器面を呈している。

竪穴状遺構15号（第58図）

E－21区，Ⅳ層上面で検出された。竪穴状遺構14号とはほぼ接する位置関係にあり，竪穴状遺構16～19号とは近在する位置にある。プランは直径約2.56mの円形を呈し，深さは38cmを測る。遺構の中央部は一段落ち込む。ピットは検出されなかった。遺物は埋土中より小片が375点出土した。そのうち6点を図化した。

220は復元口径27.6cmの甕で，口唇部は平坦面を維持し，内外面とも，頸部の稜線は不明瞭となる。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで形成し，その後の斜め方向の刷毛目を重ねる。内面胴部は斜め方向，口縁部では横方向に変化する。赤色粒を特徴的に含む胎土で，破断面はサンドイッチ状をなし，内面は橙7.5YR，外面はにぶい橙7.5YRを呈す。部分的に煤状炭化物の付着が見られる。221は復元口径15.6cmの鉢ないしは丸底壺で，口縁部は小さな波状をなす。外面は粗い工具ナデと指ナデ，内面は刷毛目で口唇部を指ナデする。胎土は砂質が強く，ザラザラした器面を呈し，ひび割れも見られる。222は鉢の胴部資料。外はにぶい橙7.5YR，内は灰褐7.5YRで，5～10mmほどの岩粒と白色鉱物を特徴的に含む胎土で，内面の一部は剥落する。223は鉢の底部で，外面は小振りの刷毛目，内面は太めの刷毛目で，器壁は厚く，重量がある。なお，接地面は円盤状の平底で，ランダムなヘラによるナデ成形痕が残され，接地面には籾痕状の圧痕も残される。外はにぶい橙7.5YR，内は灰褐7.5YRで，胎土粒子は細かく，白色鉱物の混入が目立つ。224は器種不明の資料である。外は刷毛目，内は刷毛目に指ナデを重ね，硬質な仕上がりを見せる。なお，内面2ヶ所に籾痕らしき圧痕が見られ，外面には煤状炭化物の付着も見られる。225は復元口径34cmほどの鉢と見られ，口縁部との境界は直行する刷毛目のカキアゲで段差を設ける。砂質の胎土で，赤色粒，白色の凝灰岩粒，石英，輝石を含み，内面上位は斜め方向の指頭痕が明瞭に残る。内面は橙7.5YR，外面はにぶい橙7.5YRで，器壁は薄く軽量な仕上がりをなす。

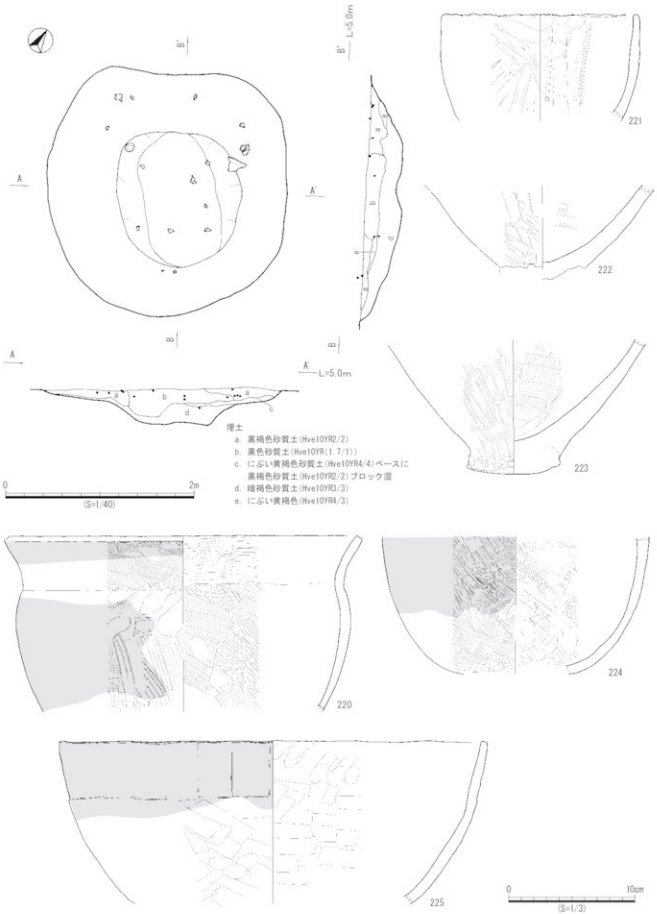
竪穴状遺構16号（第59～62図）

E－20・21区，Ⅳ層上面で検出された。竪穴状遺構14号，15号，17～19号とは近在する位置にある。プランは不定形で，長軸4.6m×短軸3.4m，深さ25cmを測る。遺構に伴うピットは2基検出された。竪穴住居などの遺構が切り合っている可能性も考えられる。遺物は埋土中より254点出土し，そのうち9点を図化した。

226～229は甕である。226は復元口径33.8cmで，口縁部との境界は刷毛目のカキアゲが見られるが，口縁部は緩やかに外反し，胴部へはスムーズに移行する。227は復元口径28.7cmの甕で，口唇部は平坦面を維持する。内外ともに頸部の稜線は形成しないが，口縁部は横方向の刷毛目，頸部以下は縦方向の刷毛目と区分が図られている。多量の赤色粒と石英を含む胎土で，破断面はサンドイッチ状，内面は浅黄橙，外面はにぶい橙をなす。胴部張部にはベルト状に煤状炭化物の付着が見られ，その下位の器面は剥落が著しい。228は復元口径23.2cmの甕で，口唇部はヘラ状工具の押圧により鋸歯様の波状口縁をなす。口縁部との明瞭な境界は形成しないが，口縁部に直行する縦方向の刷毛目のカキアゲが先行して行われている。砂質の強い胎土で器面はザラザラし，器面にはひび割れと，煤状炭化物が付着するが，煮炊きの吹きこぼれに起因すると見られる付着煤状炭化物の縦方向の消失が見られる。229は甕の胴部と思われる。3mm程の白色の岩粒を含む胎土で，両面とも刷毛目に工具ナデが重ねられるが，暗褐色で光沢のある器面を保ち，サンドイッチ状の破断面をなす。

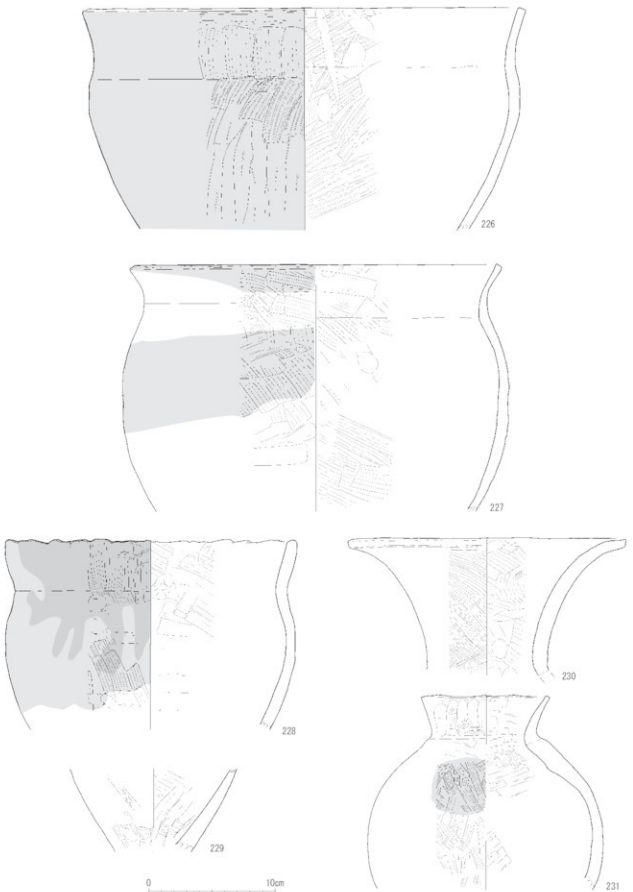
230～234は壺である。230はくノ字に外反する比較的大型の壺の口縁部で，口径は22cmほどとなる。頸部との切り離しは，粘土紐の接合位置で行っていることから，意図的な行為と解され，器台に転用したものと考えられる。きめの細かい精選胎土を使用し，赤色の化粧土が使用された可能性もあり，両面とも刷毛目主体で調整し，重量がある。231は口径10.3cmで，器壁は厚く，特に重量がある。口縁部は刷毛目後指ナデし，胴部は刷毛目が顕著である。内面の口縁部と頸部の接合部は厚く，粗い工具ナデの痕跡が見られる。232は肩部に台形状突帯をヘラで刻んだ，いわゆる見せかけの突帯文を持つ壺で，器壁は厚く，長石や石英に加え多量の黒色鉱物を含む胎土で，重量のある仕上がりである。肩部内面には接合痕がそのまま残され，外面の煤状炭化物状も明瞭である。

第57図　竪穴状遺構14号および出土遺物



第58図　竪穴状遺構15号および出土遺物

第59図　竪穴状遺構16号

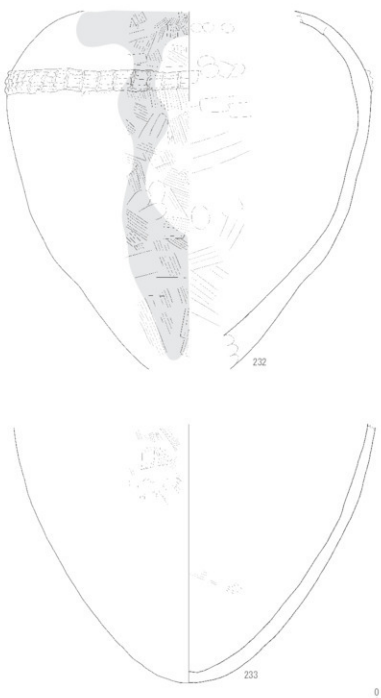


第60図　竪穴状遺構16号内出土遺物 1

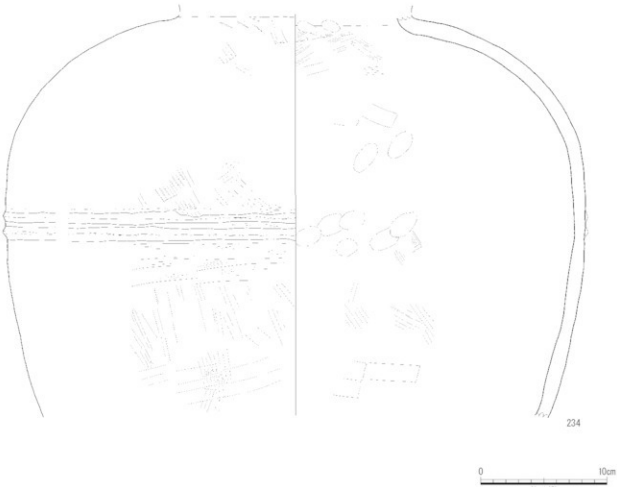
233は壺の底部資料で，きめの細かい胎土を使用し，軟質で軽量な焼成である。また，内底面は大きく面的に剥落し，接地面はクレーター状に剥落している。234は壺の胴部で，三角形突帯文部では46.4cmほどの径が復元できる。きめの細かい胎土を使用し，外は刷毛目後，工具で丁寧にナデて仕上げている。橙7.5YRの器肌で，胴部には黒斑も残される。

竪穴状遺構17号（第27，63，64図参照）

D・E－20・21区，Ⅲ層上面で検出された。竪穴状遺構14～16号，18号，19号とは近在する位置にある。埋土はⅡ層である。プランは南側隅を削平されているが，隅丸方形を呈すると思われる。遺構の深さや埋土の状況，遺構に伴うピット等の詳細な情報が記載された図がないため，これ以上のことは不明であるが，検出された層位や出土遺物より古墳時代の遺構と認定した。遺構の位置と形状は第27図（p47）に掲載した。遺物は818点出土しており，そのうち7点を図化した。

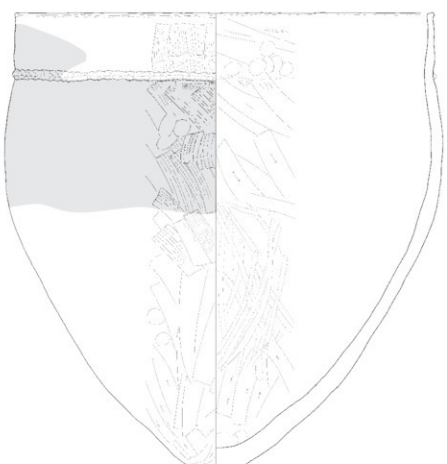


第61図　竪穴状遺構16号内出土遺物２

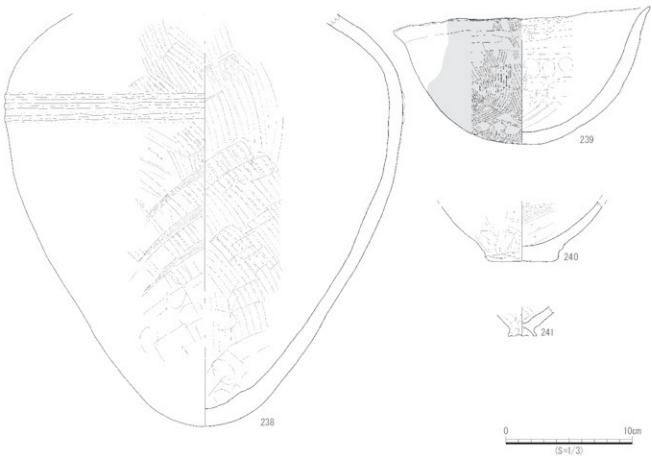


第62図　竪穴状遺構16号内出土遺物３

235は復元口径29.8cmで，外面全域を斜め方向の刷毛目で調整する。なお，口縁部との境界が刷毛目の転換点であるが，下胴部への移行はスムーズに行われる。内面は，屈曲部のみにナデ調整が見られる。胎土は砂質性の高いものに火山灰性のガラス質粒子を含み，両面とも橙2.5YRで，いわゆる指宿胎土に近い。236はわずかに外反する口縁部と胴部との境界に１条の無刻目突帯を持つ甕で，硬質な焼成である。237は復元口径33.2cm，高さ36.6cmの甕で，類例の少ない器形で，口縁部との境界に1条の三角突帯文を持つ。口縁部は直行し，口縁部では刷毛目を縦方向，胴部では斜め方向に使用し，胴部との区分は突帯文に依存する。1mm前後の石英や長石，カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で，特に内面下部ではヘラ状工具によりミガキ様の仕上げが見られる。238は胴部に３条の無刻目突帯文を持つ丸底壺で，突帯部では32cmの径が計れる。両面とも刷毛目主体の調整で，部分的に工具ナデや指ナデが見られる。少数であるがやや大粒の岩粒を含み，器壁は厚く，重量がある。239は口径20.4cm，高さ10cmほどの鉢で，外面は丁寧に刷毛目を重ね，口縁部では横方向の工具ナデで仕上げ，内面はヘラケズリ，口縁部は横方向にナデられる。特徴的な器形で，頸部付近では光沢を残し，器壁は厚く，特に重量のある仕上がりで，火山灰性のガラス質粒子を大量に含み，キラキラとした器面をなす。240は鉢の底部で，5cmほどの底径が復元される。内外ともにケズリ，接地面は丁寧なナデが見られる。破断面はサンドイッチ状をなす。241は径2cmほどの高台を持つ手捏土器で，内底面は指押さえで凹む。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で，浅黄橙7.5YRの器肌が，黒をサンドイッチ状に挟む。



第63図　竪穴状遺構17号内出土遺物 1



第64図　竪穴状遺構17号内出土遺物２

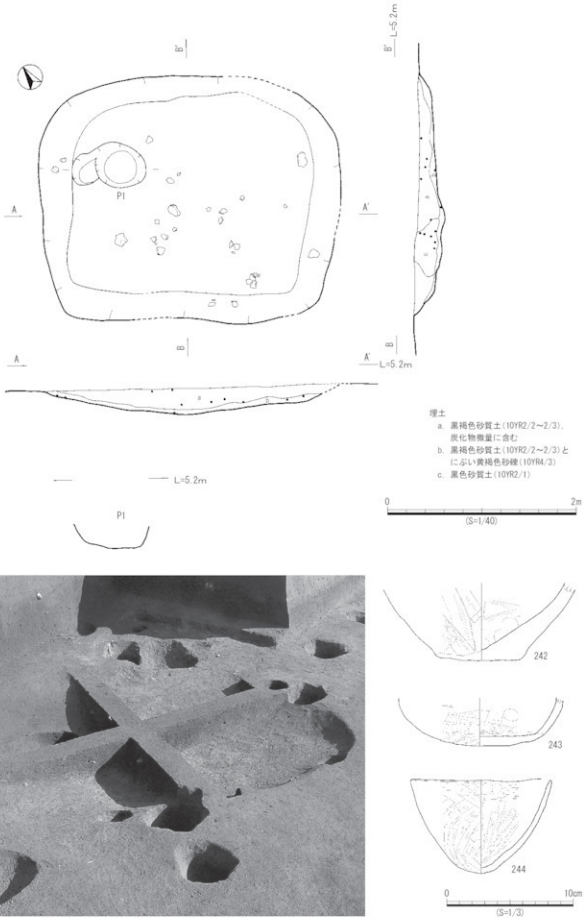
竪穴状遺構18号（第65図）

D－20区，Ⅳ層上面で検出された。竪穴状遺構14～17号，19号とは近在する位置にある。プランは長軸約3.1m×短軸約2.55mの隅丸長方形を呈し，深さは約30cmである。東西方向断面の底ラインは，中央にむかって浅く落ち込む。遺構に伴うピットは１基検出された。遺物は145点出土したが，そのほとんどが小片で埋土中からの出土であった。そのうち３点を図化した。

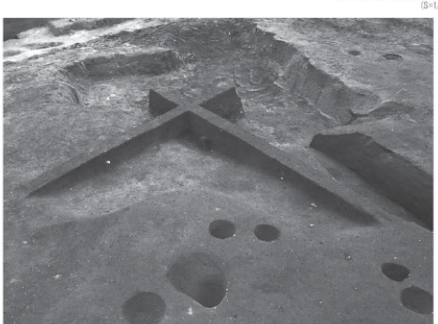
242は平底壺の底部で，接地面やその周辺は粗いヘラケズリで仕上げられる。内底面は指押さえで尖底状で，破断面はサンドイッチ状を呈す。243は丸底壺の9cm程の底部。薄手硬質の焼成で，１～２mmほどの長石が目立つ胎土で，内面は工具と指ナデ，外面は工具ナデ調整である。底部の円盤状の粘土板のつなぎ目と，内外面の黒斑エリアが明瞭に残される。244は口径11.2cm，高さ7.5cmほどの完形の鉢で，口縁部のみを横にナデて仕上げる。胎土に火山灰性のガラス質粒子を大量に含み，硬質に仕上げ，掌に収まりが良い。

竪穴状遺構19号（第66図）

E－20区，Ⅳ層正面で検出された。竪穴状遺構14～18号とは近在する位置にある。遺構の西側と南側はトレンチにより削平を受けている。中央部は一段落ち込む。遺構に伴うピットは検出されなかった。遺物は埋土中より438点出土したが，小片であったため図化できなかった。



第65図　竪穴状遺構18号および出土遺物



第66図　竪穴状遺構19号

土坑

土坑１号（第67図）

D－37区，Ⅳ層正面で検出された。平面プランは楕円形を呈し，北側は調査年度が異なりすでに削平を受けていた。また，土器集中遺構３号とは近接し５号とは切り合い関係にあり，土坑の検出面上に土器集中遺構が存在した。Ⅲb層に相当する埋土内からは土器片が出土したが，その一部は３号，５号土器集中遺構内出土の遺物と接合できたため，それらの遺物についてはそれぞれ土器集中遺構内出土遺物として捉えた。また，その他の遺物についても土器集中遺構３号もしくは５号の遺物と思われるが判断が難しいうえ，小片のため図化できなかった。

土坑２号（第68図）

C・D－34区，Ⅲ層上面で検出された。平面プランはほぼ円形を呈し，Ⅲ層に相当する黒褐色の埋土中に，大型の土器片と多数の炭化物が含まれていた。遺物は16点出土し，そのうち２点を図化した。

245は復元口径25cm程の甕で，口縁部の外反は明瞭で，長石等の白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し，器壁は薄い。246は口径12.8cmの鉢で，脚の一部が欠損する。胴中央部から口縁部が直行する形状で，橙2.5YRを呈する胴部には，ひび割れが目立つ。

土坑３号（第69図）

C－20区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは不定形な形状で，土坑が切り合っている可能性も考えられるが，判別はできなかった。埋土はⅢ層で，遺構の西側の埋土中からは大型の土器片が集中して出土し，接合により壺に復元できた。遺物は51点出土し，そのうち２点を図化した。

247は口径11.6cm，高さ35cm程の丸底の壺で，口縁部は直立気味に外反する。器壁が厚く，重量のある仕上がりで，内面肩口にはしぼり痕が明瞭に残る。外面の刷毛目調整は緻密で，口縁部と底部では縦方向，胴部では横方向に施す。なお，赤褐2.5YRと特徴的な器肌をなす。248は頁岩製の砥石である。上面と下面及び四側面すべて使用されている。

土坑４号（第70図）

B－34区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランはほぼ円形で，遺物は出土しなかったが，埋土がⅢb層であることから古墳時代の土坑と判断した。

土坑５号（第70図）

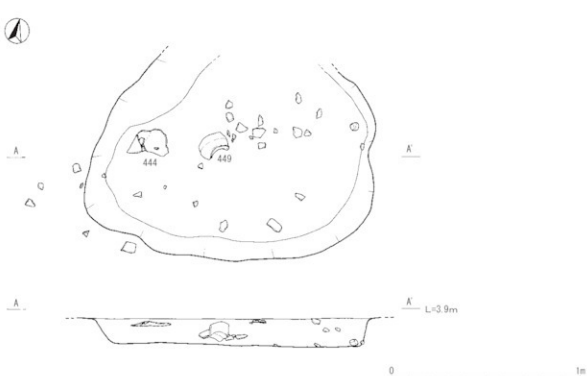
B－34区，Ⅲb層上面で検出された。北東側は竪穴状遺構１号に接するが，関連については不明である。

平面プランはほぼ円形で，埋土はⅢ層であった。埋土中より土器片が１点出土したが，小片のため図化できなかった。

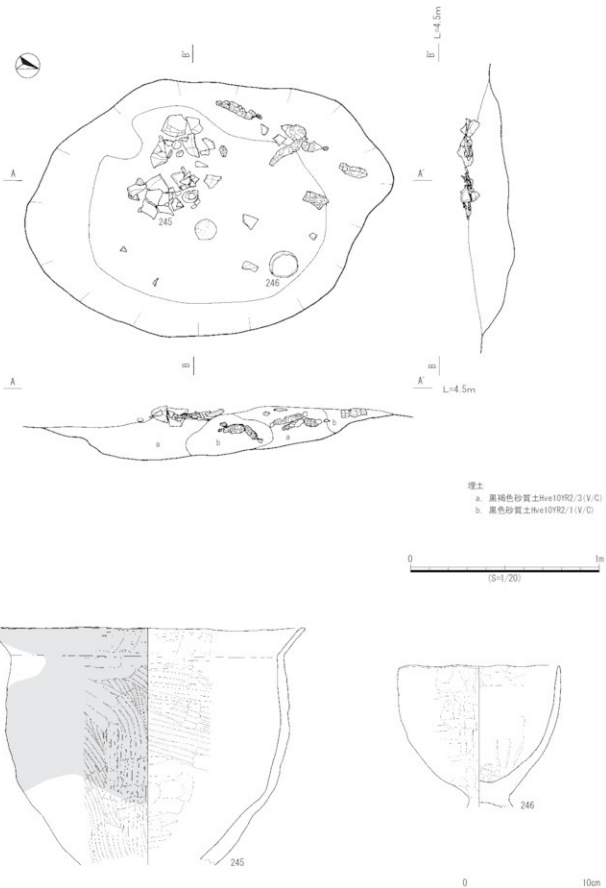
土坑６号（第70図）

B－34区，Ⅲb層上面で検出された。竪穴住居跡２号の北東側を切って掘り込まれる。平面プランは３基のピットが連結した形状を呈し，埋土はⅢ層である。

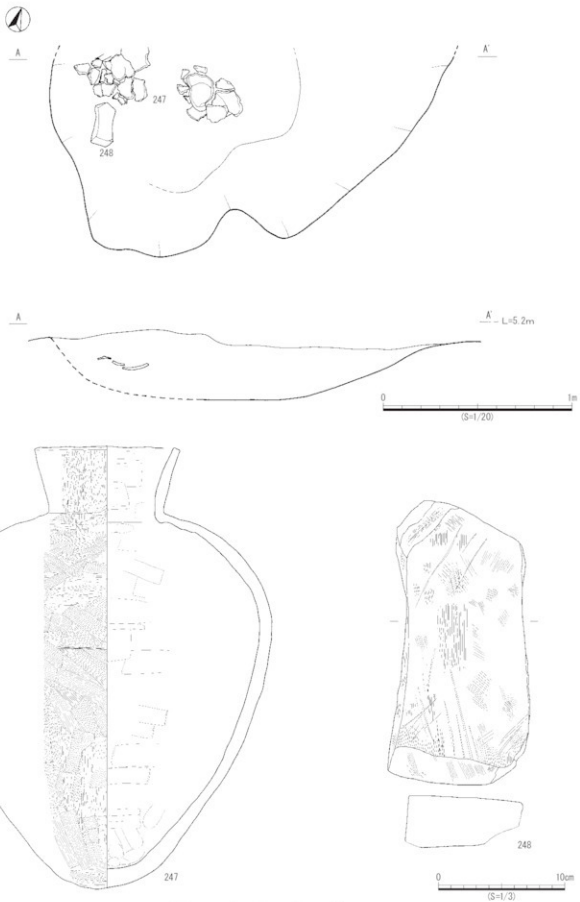
土坑の南端からは完形の台付鉢が出土した。埋納されていたものと思われる。



第67図　土坑１号

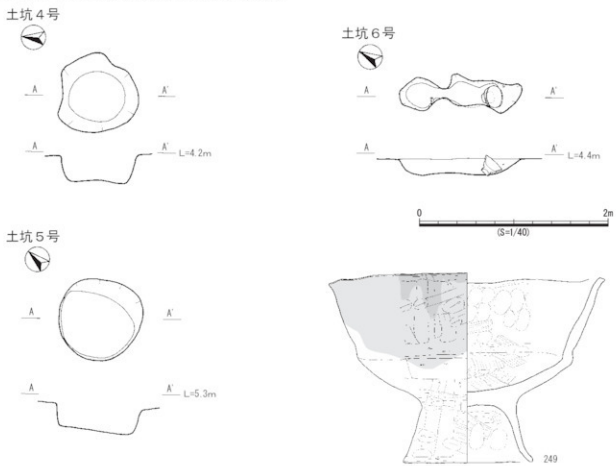


第68図　土坑２号および出土遺物



第69図　土坑３号および出土遺物

249は口径22cm，高さ15cm程の台付鉢で，底部径は10.5cmである。外面調整は口縁部，胴部，脚部のそれぞれで異なるが，最終は縦方向に工具でナデられている。内面の口縁部立ち上がりは指で斜めにナデ，最終は口唇部を横にナデて仕上げている。なお，口縁部は緩やかな波状を呈し，口唇部は狭い平坦面をなす。外面では，煤状炭化物を縦方向に断ち切る筋状の消失（吹きこぼれ痕）が認められ，蓋に転用した可能性が想定される。また，連続して剥落する脚の端部は，意図的に打ち欠いた可能性が高い。器壁は厚いが，軽量である。

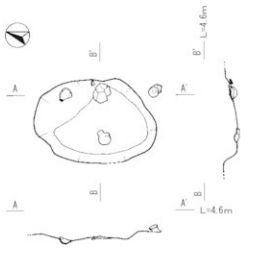


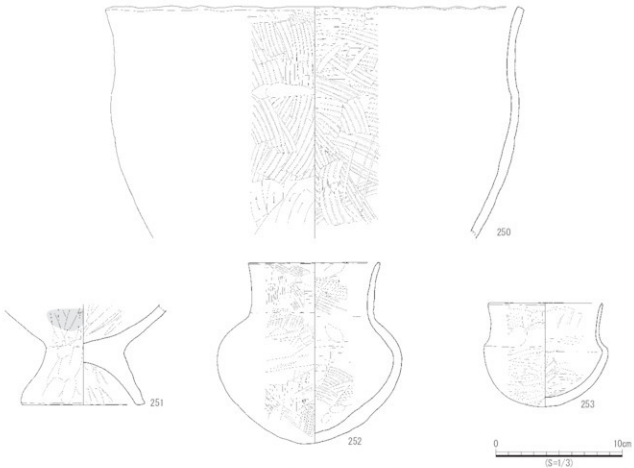
第70図　土坑４～６号および６号出土遺物

土坑７号（第71図）

Ｂ－33区，Ⅲb層上面で検出された。土坑８～12号，竪穴住居跡２，３号，竪穴状遺構１号とは近在する位置にある。埋土はⅢ層で，平面プランは楕円形を呈する。西側がやや深くなっているものの，全体的に深さの浅い土坑である。遺物はほぼ完形のものも含め９点出土し，そのうち４点を図化した。

250は傾きに疑問も残るが甕と思われる。復元口径は33cm程で，口縁部と胴部の境界は不明瞭である。器壁は薄く，内外とも黒10YRで，内面では光沢を保つ部分も見られる。251は甕あるいは鉢の脚部で，端部は平坦で，天井部はドーム状をなす。器壁は厚く，重量な仕上がりで，ヘラミガキの内底面は光沢を保つ。252は口径10.5cm，高さ14.4cmの小型丸底壺で，胴部以下の器壁は厚く重量がある。中でも，底部周辺の器壁が厚く輪台充填工法と見られる。外面は刷毛目後指ナデし，内面は刷毛目を主体に，内底面は指押さえ，屈曲部は指ナデ，口唇部は横にナデで仕上げている。内外とも明黄褐10YRで，キラキラとした器面である。253は復元口径9cm，高さ8.3cmの壺で，ヘラミガキの内外は光沢を保つ。外面の大半は黒斑に覆われ，火山灰性のガラス質粒子を含む胎土はキラキラとした器面をなす。





第71図　土坑７号および出土遺物

土坑８号（第72図）

Ｂ－33区，Ⅲb層上面で検出された。土坑７，９～12号，竪穴住居跡２，３号，竪穴状遺構１号とは近在する位置にある。平面プランは不定形で，埋土はⅢ層である。遺物は小片が118点出土し，そのうち２点を図化した。

254は口径9.3cm，高さ７cmの坩で，先行して胴部以下を作りだし最後に底面を円盤状の粘土で埋める輪台充填の成型方法がみられるとの指摘を受けた。(久住氏)。内面は刷毛目の後ナデ消して成形し，外面は底部付近はヘラケズリ，胴部から上位は刷毛目を用い，屈曲部も刷毛目を強く押しつけて作りだしている。輝石等が含まれることからキラキラとした器面で，破断面はサンドイッチ状を呈している。また，底部外面には少量であるが，煤状炭化物が残される。なお，復元には赤変した２点の破片が含まれる。　255は鋸歯文を有する坩の口縁部である。小片のため口径，傾き等は不明である。精選胎土を使用し，器肌はにぶい橙5YRをなす。

土坑９号（第72図）

Ｂ－33区，Ⅳ層正面で検出された。北東側は竪穴住居跡３号に接し，南東側は土器集中遺構７号に接する。関連や時期差など詳細は不明である。平面プランは不定形で，長軸2.0m×短軸1.9mを測り，深さについては不明である。遺物は１点出土した。

256は丸底甕である。くノ字口縁で，口唇部内側に段を持つ。復元口径14.8cmで，胴部は丸く膨らむ。口縁部は丁寧に横にナデ，胴部は規格の異なる刷毛目で縦横に調整し，内面のヘラケズリで薄く仕上げる。頸部屈折部を除き煤状炭化物が付着する。器肌は内外面ともにぶい橙2.5YRをなし，胎土は1～2mm程の長石と石英，1mm以下の金雲母を含む。肥後系の搬入品と思われる。

土坑10号（第72図）

Ｂ－32・33区，Ⅲb層上面で検出された。土坑７，８，10～12号，竪穴住居跡２，３号，竪穴状遺構１号とは近在する位置にある。平面プランは楕円形で深さは浅く，埋土はⅢa層である。遺物は1点を図化した。

257は復元口径15.5cm，高さ13.8cm程の鉢で，4cm程の高台を持つ。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で，器壁は厚く，特に，底部付近ではヘラケズリが繰り返されるが，重厚のある仕上がりである。器面に意図的と見られる線刻が確認できるが，その一部しか残されず意匠は読み取れない。

土坑11号（第72図）

Ｂ・Ｃ－33区，Ⅲb層上面で検出された。土坑７～９，11，12号，竪穴住居跡２，３号，竪穴状遺構１号とは近在する位置にある。平面プランは隅丸方形で，埋土はⅢ層である。遺物は110点出土し，２点を図化した。

258は復元口径18.6cmの甕で，口縁部は緩やかにくノ字に外反し，特に口縁部は，指頭で丁寧にナデて仕上げる。器壁は薄く，軽量な仕上がりであるが，微細なひび割れと，発泡痕のような小孔が残される。259は復元口径12.6cmの鉢で，形状や傾き等不明である。口縁部は緩やかにくノ字に外反し，特に内面は指頭で丁寧にナデる。外面には指頭痕とひび割れが明瞭に残り，内面の屈曲部に沿って煤状炭化物が帯状に付着する。きめの細かい胎土を使用し，器壁は薄く，硬質な焼成で，灰白10YRの器肌をなす。

土坑12号（第73図）

Ｃ－33区，Ⅲb層上面で検出された。土坑７～10，12号，竪穴住居跡２，３号，竪穴状遺構１号とは近在する位置にある。平面プランは楕円形で，埋土は黒褐色を呈するⅢ層で，炭化物も含まれていた。遺物は小片が多数出土したが，図化できなかった。

土坑13号（第73図）

Ｃ－33区，Ⅳ層上面で検出された。土坑７～11号，竪穴住居跡２，３号，竪穴状遺構１号とは近在する位置にある。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層である。遺物は３点出土したが，図化できなかった。

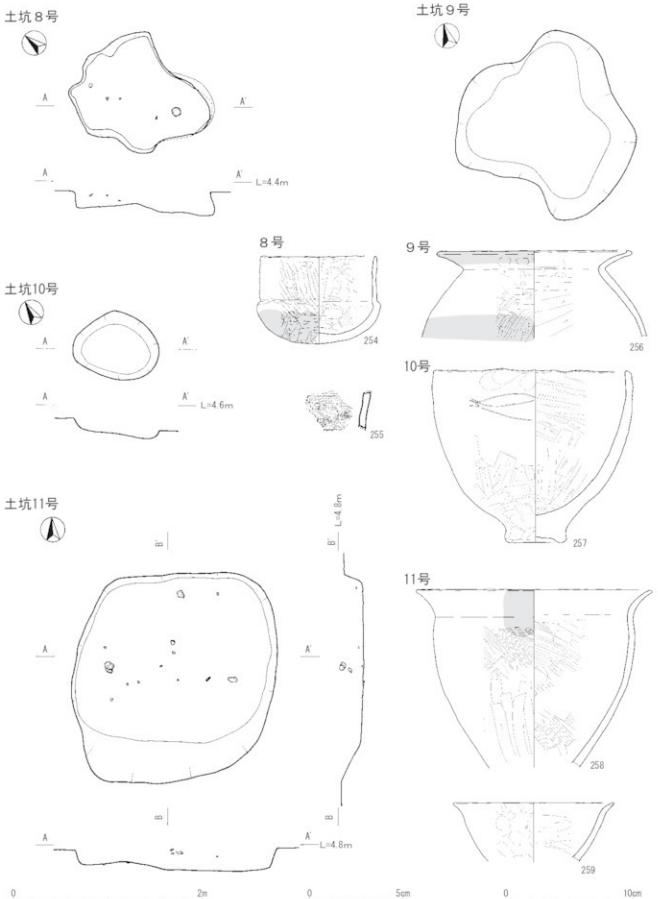
土坑14号（第73図）

A'－30区，Ⅲ層中で検出された。平面プランは不定形な形状で，埋土も黒色砂質土のⅢ層である。遺物は215点出土したが，すべて小片で図化できなかった。

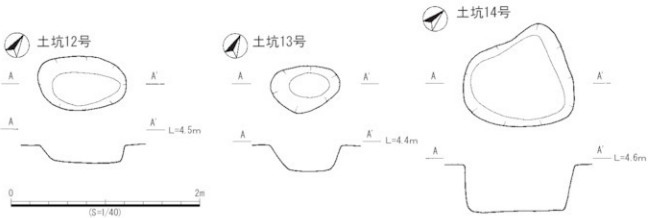
土坑15号（第74図）

Ａ－30・31区で検出された。検出層位は不明で，埋土は黒褐色砂質土であるが，出土した遺物より古墳時代の土坑と判断した。平面プランはほぼ楕円形を呈する。遺物は287点出土し，そのうち８点を図化した。

260は甕または鉢の口縁部と思われる。口径，傾き等は不明である。砂粒の多い胎土で，最終的にはナデて仕上げる。器面に籾状？圧痕が複数残る。261は短く直線的に伸びる脚で，脚部内面天井は丸い。特に，内面は明赤褐2.5YRと赤い。器壁は厚く，長石等の白色鉱物入が目立つ。262は長く直線的に伸びる脚で，胴部の横方向の工具ナデが特徴的である。脚の径は10.2cmで，器壁は厚く，若干軟質な焼成で，石英やカクセン石等の混入が目立つ。263はくノ字に外反する比較的大型の壺の口縁部で，口径は23cm程となる。火山灰性のガラス質粒子を多量に含み，きめの細かい精選胎土で，赤色の化粧土が使用された可能性もあり，両面とも刷毛目主体で調整する。264は坏の途中で屈折し，大きく外反する大型高坏の坏部と見られる。きめの細かい胎土で，器壁は薄く成形するが，両面に刷毛目が多く残される。265は坏の途中で屈折し，大きく外反する高坏の坏部と見られる。精選されたきめの細かい胎土で，内面のヘラミガキは丁寧である。266は高坏の脚部で，筒部との境に器面方向からの５ヶ所の穿孔が見られる。筒部の接合部で剥落しているが，筒は中空の可能性が高い。17.8cm程の径が復元され，器壁は厚く，火山灰性のガラス質粒子を



第72図　土坑８～11号および出土遺物



第73図　土坑12～14号

多量に含む胎土を使用する。器面は浅黄橙7.5YRを呈する。267は復元口径13.6cm，高さ6.5cm程の埴で，両面とも工具ナデを繰り返した後，指ナデで器面調整を行った後，接地面のヘラケズリで仕上げている。この資料については，伝統的Ⅴ様式を示すものとして，熊本県中北部との交流を示すとの久住氏の見解がある。器面はにぶい褐7.5YRを呈する。

土坑16号（第75図）

Ｂ－31区，Ⅳ層上面で検出された。竪穴住居4号に近接する。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層である。遺物は55点出土し，そのうち１点を図化した。

268は口径8.4cm，高さ7.8cmの小型丸底壺で，口縁部はやや開きながら直行し，胴部は算盤玉状に明瞭に屈折する。精選されたきめの細かい胎土を用い，淡橙5YRの器肌を成す。

土坑17号（第75図）

Ｂ－31区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは不定形な形状で，埋土は黒褐色のⅢa層である。遺物は161点出土し，そのうち１点を図化した。

269は口縁部との境界には，刷毛目のカキアゲを明瞭に残す。また，口縁部とも境界付近はナデ調整が見られるが，以下はヘラケズリで，内面口縁部はナデられ，胴部は粗い工具ナデが見られる。両面ともにぶい黄橙10YRで，硬質で，軽量な仕上がりとなる。

土坑18号（第75図）

Ｃ－31区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，深さが深い。埋土はⅢ層である。遺物は16点出土したが，図化できなかった。

土坑19号（第75図）

Ｃ－31区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，埋土は黒褐色のⅢa層である。遺物は６点出土したが，図化できなかった。

土坑20号（第75図）

Ｄ－31区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層であるが，深さの浅い土坑である。遺物は10点出土したが，図化できなかった。

土坑21号（第76図）

Ｃ・Ｄ－30区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層である。遺物は４点出土したが，図化できなかった。

土坑22号（第76図）

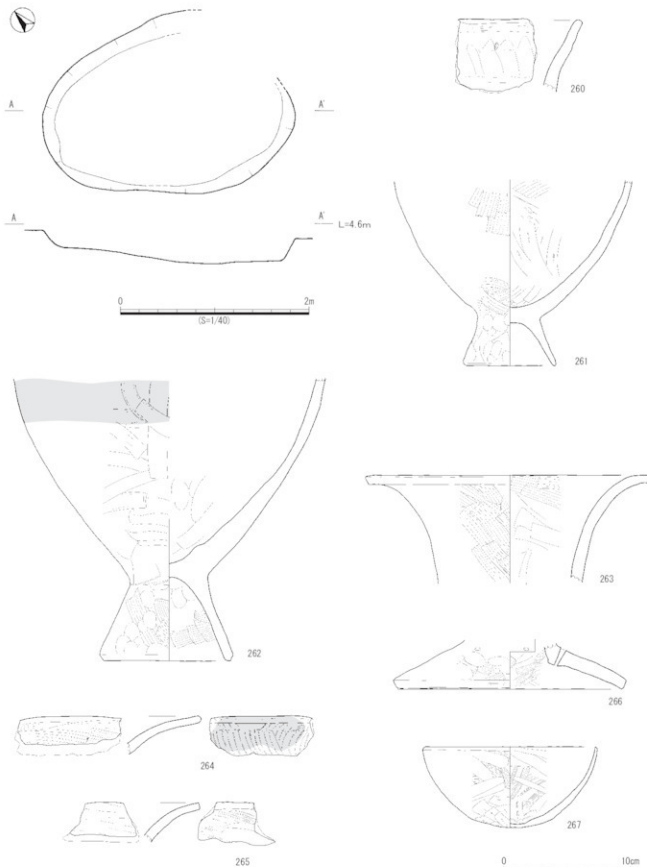
Ｂ－29区で検出された。検出層位は不明であるが，遺構内より古墳時代の大型の土器片が出土したことから，同時期の遺構と判断した。平面プランは不定形で，東側がやや深くなる。遺物は１点を図化した。

270は口径29cm，高さ30cmをわずかに超す脚付甕で，脚の一部は欠損する。口唇部は平坦面で，口縁部と胴部の区分は刷毛目のカキアゲで行い，口縁部は緩やかに外反する。器面の広範囲と，内面の口唇部沿い10mm程に煤状炭化物の付着が見られる。石英や長石，カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で，器壁は厚い。

土坑23号（第76図）

Ｄ－29区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形を呈する。埋土はⅢ層で，焼土と炭化物を含む。遺構内より古墳時代の大型の土器片が出土したことから，同時期の遺構と判断した。遺物は55点出土し，そのうち２点を図化した。

271は復元口径23cm，口縁部との境界は刷毛目のカキアゲ状に工具を繰り返し重ね，その後，丁寧にナデて

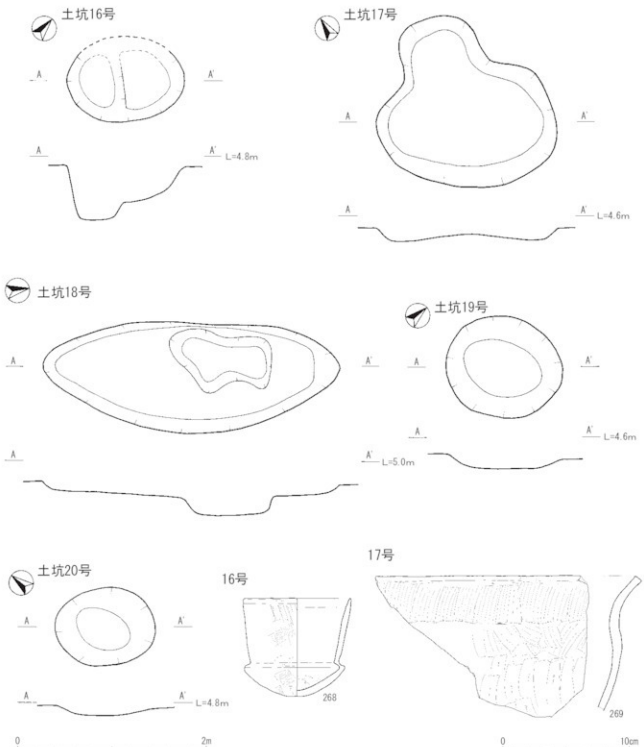


第74図　土坑15号および出土遺物

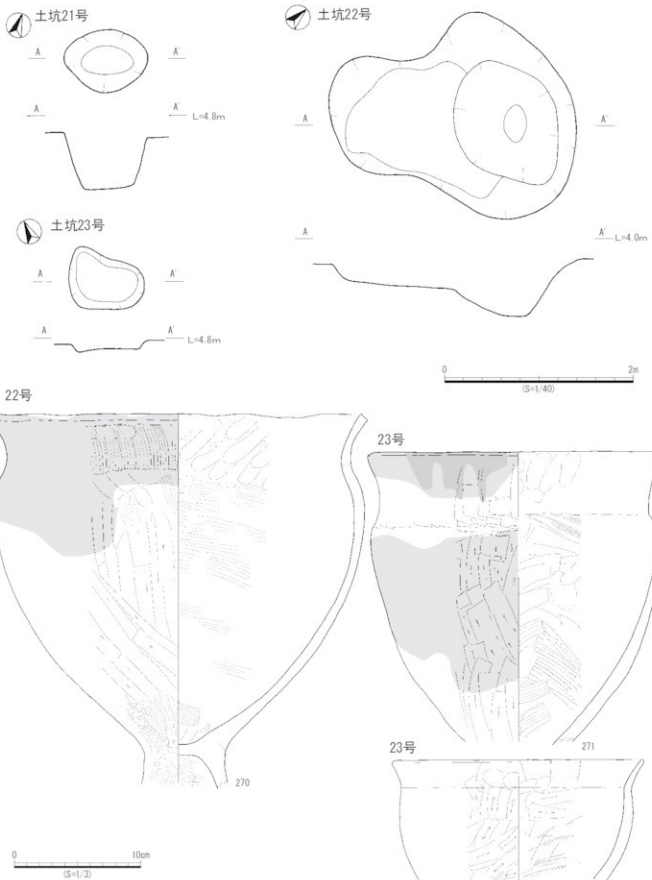
仕上げる。内面は刷毛目を横方向に深く施すことにより，稜線が形成されている。煤状炭化物は胴部を中心に帯状に付着し，口唇部から屈曲部間には糸柱状に付着する。また，胴下部では器壁の剥落も見られる。272は復元口径19.8cm，内外面とも工具ナデを重ね，特に内面には丁寧な仕上げが見られる。胴部には黒斑と，ひび割れを残す。

土坑24号（第77図）

E－29区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形を呈し，埋土はⅢ層である。遺構内からは甕の大型土器片が出土した。遺物は651点出土し，そのうち5点を図化した。



第75図　土坑16～20号および16・17号内出土遺物



第76図　土坑21～23号および22・23号内出土遺物

273は口縁部と脚部が欠損する甕で，口縁部の外反即ち口縁部と胴部の境界は明瞭である。胎土に大粒の金雲母を含み，器面調整の丁寧な器壁は薄く，硬質で端正な仕上がりが見られる。274は復元口径18.3cm程で，口縁部から胴上部はにぶい橙10YRで，中央部は煤状炭化物が付着し，下部から脚部は赤変しにぶい橙5YRを呈している。なお，口縁部と胴部の境界に残る痕跡から，刷毛目のカキアゲが先行したことが読み取れる。275は復元口径24cm程の，口縁部の短い甕で，口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分するが，その後のナデで掻き消される。両面とも橙5YRで，外面に煤状炭化物の付着が見られる。276は復元口径28.2cm程の，口縁部の短い甕で，口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分するが，その後のナデで掻き消され，刷毛目の起点のみが残る。外面には多数のひび割れや煤状炭化物の付着が見られ，石英の混入が目立つ。277は口唇部は丸く，緩やかに外反する口縁部で，口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分し，明確な段を有する。内外ともきめの細かい刷毛目を使用する。硬質な焼成で，火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土を使用する。

土坑25号（第78図）

E－27・28区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形である。遺構内にピットを4基有する。埋土はⅢ層である。遺物は60点出土したが，小片で図化できなかった。

土坑26号（第78図）

D・E－27区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層である。遺物は86点出土したが，小片で図化できなかった。

土坑27号（第78図）

E－27区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，南側にはピットを有する。埋土はⅢ層で，焼土やブロック状の炭化物を多く含む。遺物は44点出土したが，小片で図化できなかった。

土坑28号（第78図）

D－24区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層である。遺物は9点出土したが，小片で図化できなかった。

土坑29号（第78図）

E－23区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは隅丸方形状で，埋土はⅢ層である。遺物は22点出土したが，小片で図化できなかった。

土坑30号（第78図）

E－23区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランはほぼ円形で，埋土はⅢ層である。西側は，13号竪穴住居跡を切る。遺物は1点を図化したが，13号竪穴住居跡の遺物の可能性も考えられる。

278は口径23cm，高さ13.2cmの丸底の鉢とした。外面は縦方向の刷毛目，内面は横方向の工具ナデで，大粒の岩粒を多く含むことから，その方向に沿った粒子の移動が顕著に観察できる。なお，最終段階で口縁部を横方向にナデることから，口縁部は尖り気味に仕上がる。石英の混入が目立ち，破断面はサンドイッチ状を呈している。また，接地面付近は指宿胎土で，口縁部から胴部上位は赤変し，下部では帯状に煤状炭化物が付着する。

土坑31号（第79図）

D－22区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層である。遺物は出土しなかった。

土坑32号（第79図）

A'－21区で検出された。検出層位の詳細は不明で，埋土は黒褐色砂質土であるが，出土遺物より古墳時代の土坑と判断した。平面プランは楕円形である。遺物は23点出土し，1点を図化した。

279は復元口径16cm，高さ11.9cm，底部径5.2cm程で，口縁部が緩やかに内弯する鉢である。口唇部は工具でナデることから仕上がりは一様ではない。器壁が厚く，重量があり，外面下部では刷毛目後，再度ヘラケズリを加えた痕跡が明瞭に残される。器面の一部であるが，クレーター状の破裂痕が見られる。1mm程の赤色粒や黒色鉱物を多量に含む胎土で，器面のザラザラ感が強く，破断面はサンドイッチ状を呈す。

土坑33号（第79図）

A－21区で検出された。平面プランは楕円形を呈し，検出層位は不明であるが，埋土はⅢ層である。遺物は出土しなかった。

土坑34号（第79図）

A・B－20区で検出された。平面プランはほぼ円形で，検出層位は不明であるが，埋土は茶褐色砂質土でⅢ層である。遺物は49点出土したが，小片で図化できなかった。

土坑35号（第79図）

B－19区で検出された。平面プランはほぼ円形で，検出層位は不明であるが埋土は黒褐色砂質土のⅢ層である。遺物は13点出土したが，小片で図化できなかった。

土坑36号（第79図）

E－15区，Ⅳ層上面で検出された。平面プランは楕円形で，埋土はⅢ層である。遺物は出土しなかった。

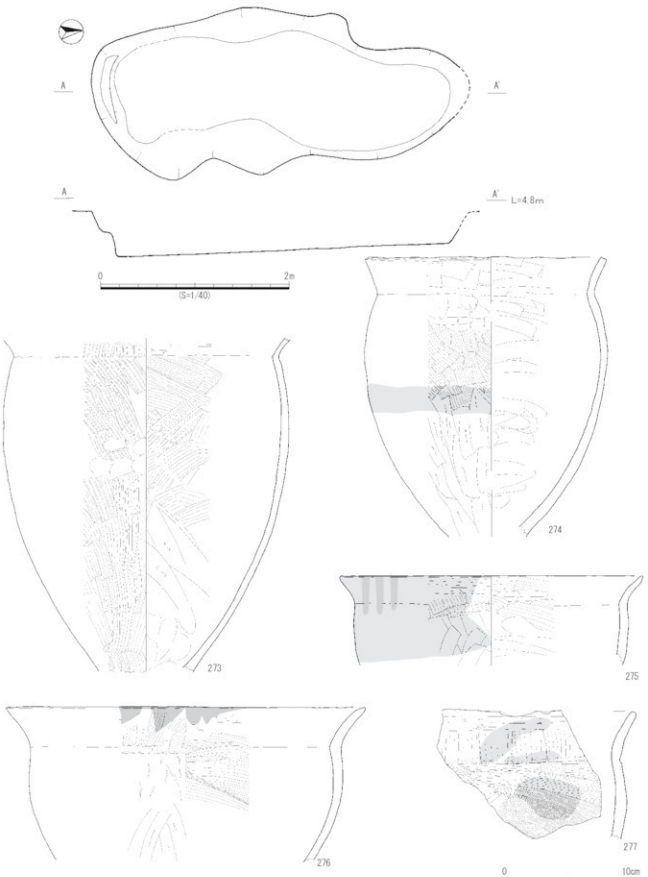
ピット

ピット1号（第80図）

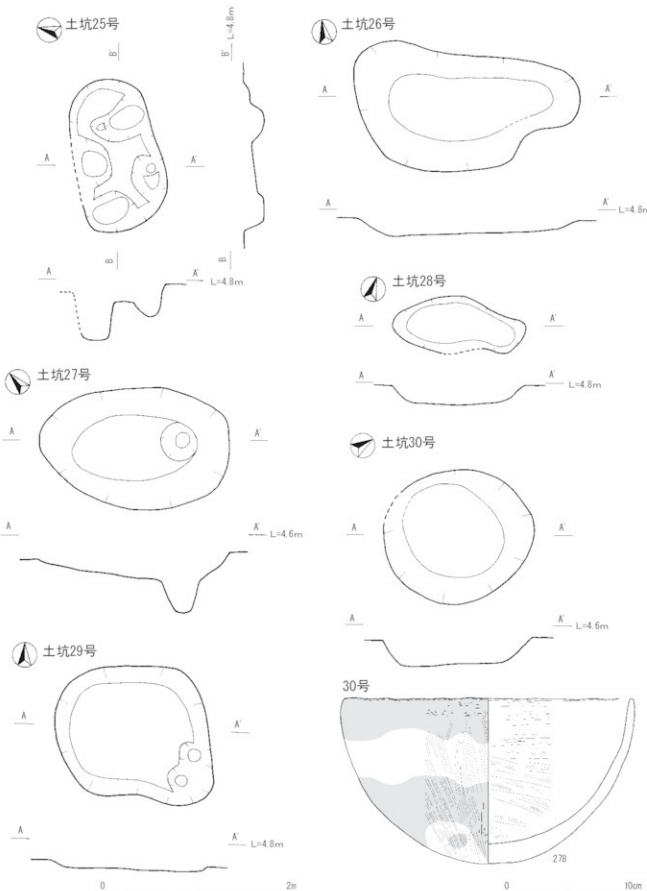
A・B－34区，Ⅲb層上面で検出された。埋土はⅢ層である。直径約50cmの円形を呈し，深さ17cmを測る。ピットの中からは，壺胴部の土器片が重なった状態で出土した。壺の頸部から口縁部と底部は検出されなかった。

280は胴部に2条の刻目突帯を持つ大型壺で，突帯部では40cmの径が計れる。

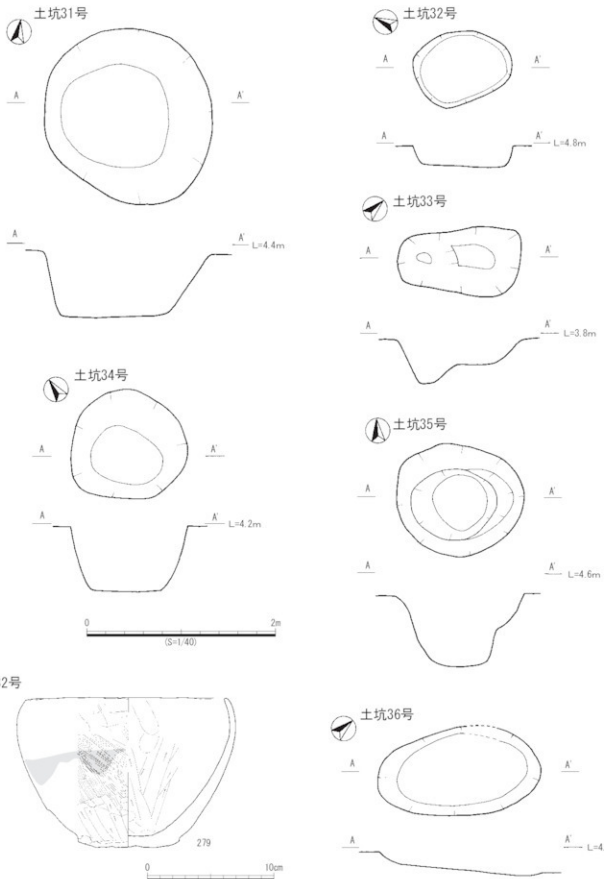
両面とも刷毛目主体の調整で，内面肩口などでナデ仕上げが見られる。2.5mmほどの赤色粒や白色の岩粒を含



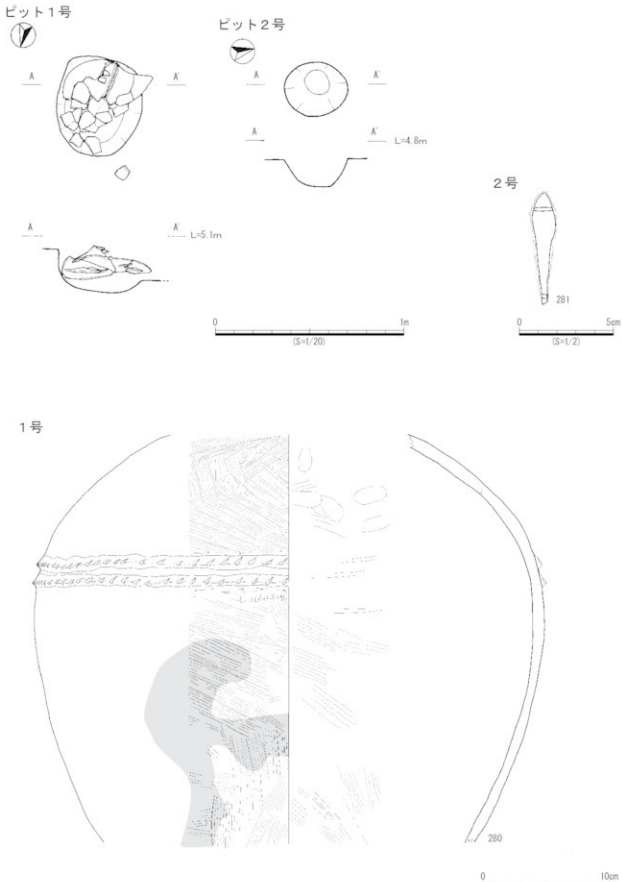
第77図　土坑24号および出土遺物



第78図　土坑25～30号および30号内出土遺物



第79図　土坑31～36号および32号内出土遺物



第80図　ピット１・２号および出土遺物

み，器壁は厚く，重量がある。明褐色2.5YRと赤い器肌で，下部の一部には煤状炭化物の付着が認められる。

ピット２号（第80図）

B－33区，Ⅲb層上面で検出された。埋土はⅢ層である。直径約33cmの円形を呈し，深さは14cmを測る。ピット内からは鉄鏃が検出された。281は全長6cm，鏃身部1.5cmの短頸の鉄鏃で，この規格から４世紀後半から５世紀前半に限定できる可能性がある。

ピット３号（第81図）

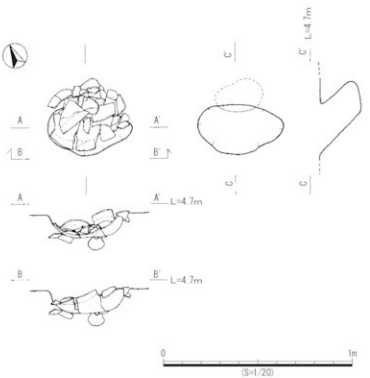
B－32区，Ⅲb層で検出された。埋土はⅢ層である。直径約45cmの円形を呈し，深さは21cmを測る。ピットからは，甕の大型土器片が出土し，接合によりほぼ完形に復元することができた。ピットの底部分に脚部があり，その上に口縁部が重なっていることから，ピット内に甕を立てた状態で埋納した可能性も考えられる。

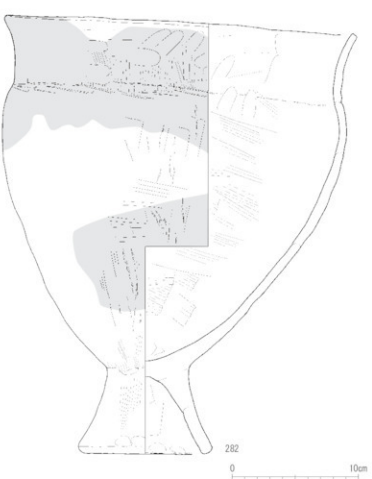
282は口径28cm，高さ34cm底部径10.6cmで，径の最大は口縁部にある大型甕である。内面の稜線は消失し，外面では刷毛目を横方向に移動することで，稜線の存在を意識している。なお，狭い口唇部は平坦面を形成している。砂質の強い胎土で，石英や長石，カクセン石等の黒色鉱物を多く含み，キラキラとした器面はザラザラ感が強く，縦方向のひび割れや，同じく縦方向のケズリによる粒子の移動が顕著に見られる。また，煤状炭化物は，口唇部から胴部の一部で付着が見られる。硬質な焼成は橙2.5YRで，いわゆる指宿胎土に属する。

ピット4号（第82図）

C－31区，Ⅲb層で検出された。埋土はⅡ層である。直径約27cmの円形を呈し，深さ70cmを測る。遺物は坩が１点出土した。

283は口径7.9cm，高さ6.6cmで，底部はわずかな接地面を持つ。器壁は厚く，特に内面はヘラケズリを重ねている。砂粒を多く含む胎土で，器面はザラザラ感が強く，重量があり，サンドイッチ状の破断面が見られる。口縁部外面は縦方向の刷毛目で，最終的に最上位を横に工具でナデ，鋭利な工具で鋸歯文が施される。



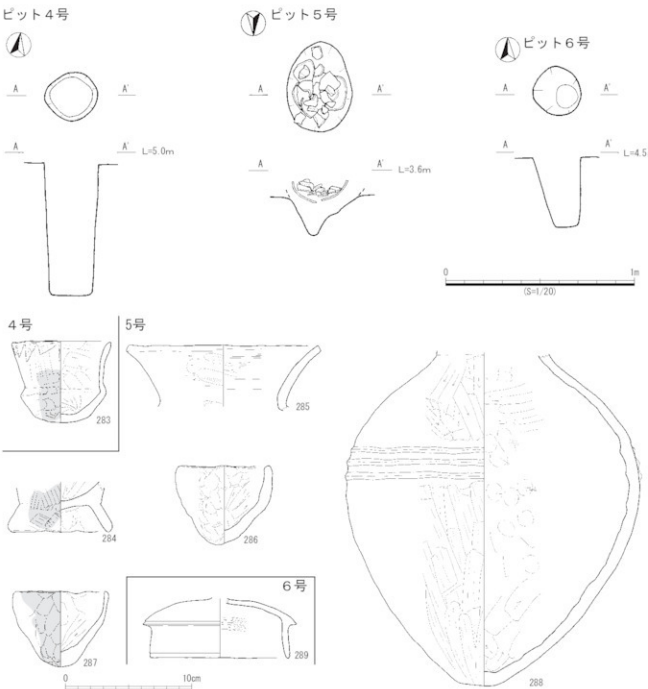


第81図　ピット３号および出土遺物

ピット５号（第82図）

Ｅ－31区，Ⅳ層上面で検出された。プランは楕円形を呈し，長軸50cm×短軸35cm，深さ21cmを測る。断面がＶ字状に凹むピット内には，壺の肩部の大型土器片が内面を上にして入れられ，さらにその上には手捏土器やその他の土器片が入れられていた。

284は甕の脚部で，特に硬質な焼成が見られる。285はくノ字状に外反する壺の口縁部で，口径15cm程が復元される。286は口径7cm，高さ6.3cmの完形の内弯タイプの手捏土器で，器壁は厚く，重量がある。口唇部は丸く，底部は尖り気味で，火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土を使用する。器面は橙5YRと灰黄褐10YRで二分する。287は口径72cm，高さ6cmの完形の内弯タイプの手捏土器で，口唇部は丸く，接地面は凸レンズ状で，砂粒の多い胎土を使用する。器面は灰黄褐10YR。288は胴部に３条の無文の三角突帯文を持つもので，胴部は若干膨らみ，底部は狭い接地面を持つ。なお，外面はヘラケズリや工具ナデ調整が行われてい



第82図　ピット４～６号および出土遺物

るが，内面は粘土紐の接合痕の凹凸が残される。

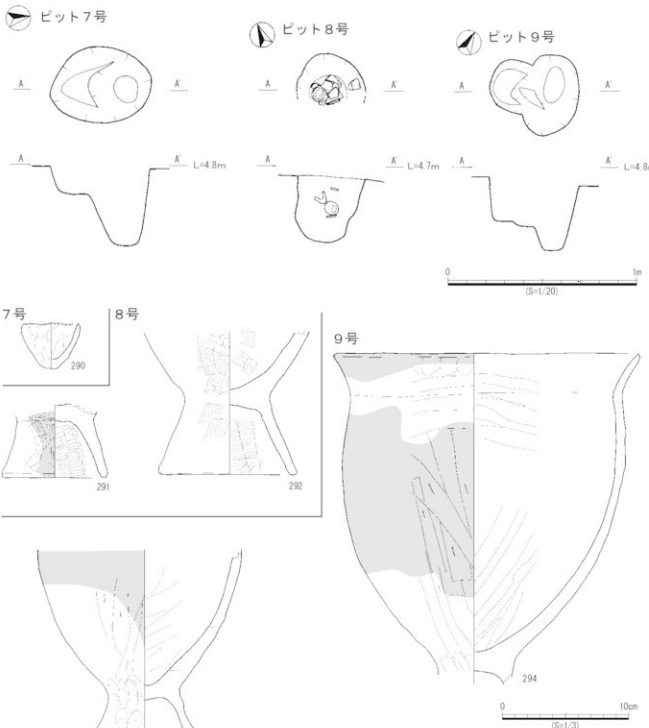
ピット６号（第82図）

A－30区で検出された。プランは直径約26cmの円形を呈し，深さは37cmを測る。層位は不明であるが，埋土は黒褐色砂質土で，ピット内からは坏蓋が出土した。

289は約1/3程が残存する坏蓋で，口径10.2cm，高さ4.6cm程が復元される。内面天井部に刷毛目が残される。口縁部は歪り気味で，やや外に開く。浅黄橙7.5YR。

ピット７号（第83図）

D－29区，Ⅳ層上面で検出された。プランは楕円形で，埋土はⅡ層である。２基のピットが切り合っているものと思われるが，切り合い関係等詳細は不明であった。遺物は64点出土したがほとんど小片であった。そのうち手捏土器１点を図化した。



第83図　ピット７～９号および出土遺物

290は口径4.5cm，高さ3.6cm程の手捏土器である。

ピット８号（第83図）

E－29区　Ⅳ層中で検出された。北側は調査範囲外で検出していない。ピット内より38点の遺物が出土し，そのうち接合により復元できた２点を図化した。

291は底部径8.2cmの直線的に伸びる脚部で，内面天井部は平坦である。器壁は厚く安定感のあるつくりで，重量もある。内面は黒変する。292は直線的に伸びる脚部で，内面天井部は平坦である。器壁は厚く安定感のあるつくりで，重量もある。内面は黒変する。

ピット９号（第83図）

E－29区，Ⅲ層上面で検出された。埋土はⅡ層で炭化物を含む。プランは楕円形で，２基のピットが切り合っているものと思われるが，切り合い関係等詳細は不明である。遺物は小片が45点出土し，そのうち接合により復元できた２点を図化した。

293は底部径7.8cmの甕である。口縁部は欠損している。脚部内面天井部は，下方に膨らむ。胎土には，長石等の白色鉱物の他，5mm程の岩粒が含まれる。294は口径24cmの脚付甕で，脚部は欠損する。口縁部はくノ字に外反し，口唇部先端部が若干薄くなり，長胴部の傾向が見られ，脚部内面天井は平らに仕上げる。器面はヘラケズリで薄く仕上げ，胴上部から口縁部周辺ではナデで仕上げる。

ピット10号（第84図）

E－29区，Ⅳ層上面で検出された。埋土はⅡ層である。プランは楕円形を呈し，長軸34cm×短軸22cm，深さ17cmを測る。ピット内からは壺形土器が完形の状態で出土した。

295は口径10cm，高さ18.3cmの小型丸底壺で，胴の最大は15.2cm程で球状に近い。刷毛目調整が中心で，口縁部は基本的に縦方向に施している。器壁は厚い。

ピット11号（第84図）

A－28区で検出された。検出層位，埋土は不明であるが，ピット内より古墳時代の土器が出土し，接合により１個体に復元できたことからこの時期のピットと判断した。プランは円形を呈し，直径約40cm，深さ9cmを測る。

296は小型丸底壺と見られるが，口縁形状は不明。内面はヘラケズリを主に指ナデを加え，底部付近ではミガキ状のヘラナデも見られる。器壁は均一でなく，部位で異なる。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で，黒斑の占める範囲が広い。

ピット12号（第84図）

C－28区，Ⅳ層上面で検出された。埋土はⅢ層である。プランは瓢箪形を呈し，２基のピットが切り合っているものと思われるが，切り合い関係等詳細は不明である。遺物は37点出土し，接合により復元できた２点を図化した。

297は丸底壺で，口縁形状は不明。算盤玉状の胴部で，赤色粒を多く含むきめの細かい胎土を使用し，軽量な仕上がりをなす。298は脚部の形状からは，屈曲部から斜め上方に直線的に伸びる坏部形状が想定される。筒部はミガキ状のナデで，脚部内面は刷毛目を残す。器肌は明るい5YRの橙で，精選された微細な胎土が使用される。

ピット13号（第84図）

D－23区，Ⅲb層上面で検出された。埋土はⅢ層である。プランは楕円形を呈すると思われるが，中世以降の時期と考えられるピットにより切られている。遺物は７点出土し，接合により小型丸底壺が復元できた。埋納されていた可能性が考えられる。

299は口径10.3cm，中心部の高さ17cmの小型丸底壺で，口縁部は直行気味に立ち上がり，胴部は大きく球状に膨らみ，接地面はデフォルメされ扁状に突出する。なお，接地面はケズリが重ねられ，胴部は丁寧なミガキで光沢を保っている。赤色粒と大粒の白色粒が目立つ胎土で，輝石やカクセン石等の黒色鉱物も見られる。重量はある。

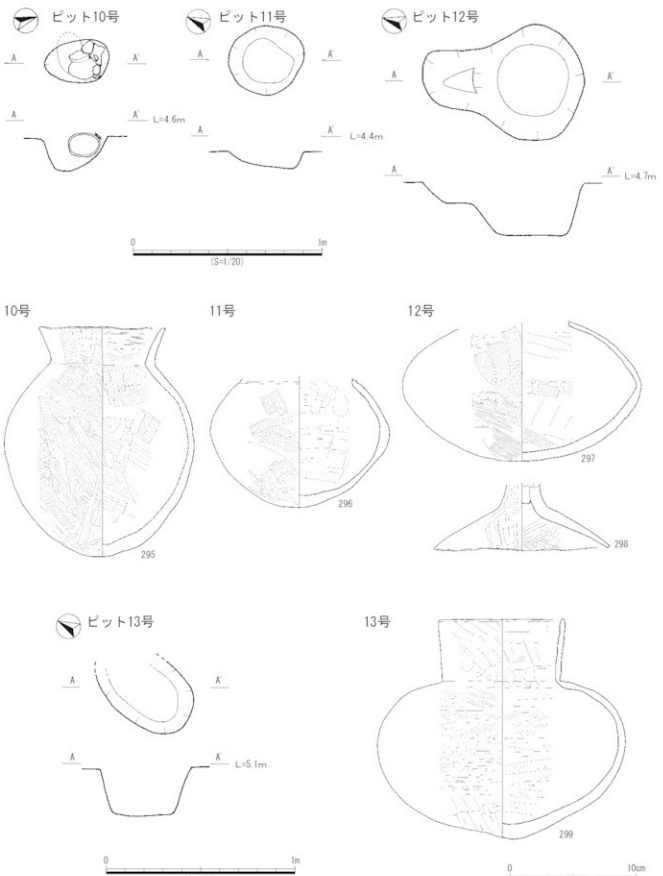
溝状遺構（第85～92図）

A－17区からC－15区，Ⅳ層上面で検出された。A－A′間21m，B－B′間7.5mを測り，幅1.25m～3.05m，検出面からの深さは20～30cmである。C－16区で途切れ，そこから北西側と南東側に向かって緩やかに下るが，出土遺物の接合状況などから連続する遺構として捉えた。両端は調査区外にのびると思われるが，南東側の続きは検出できなかった。

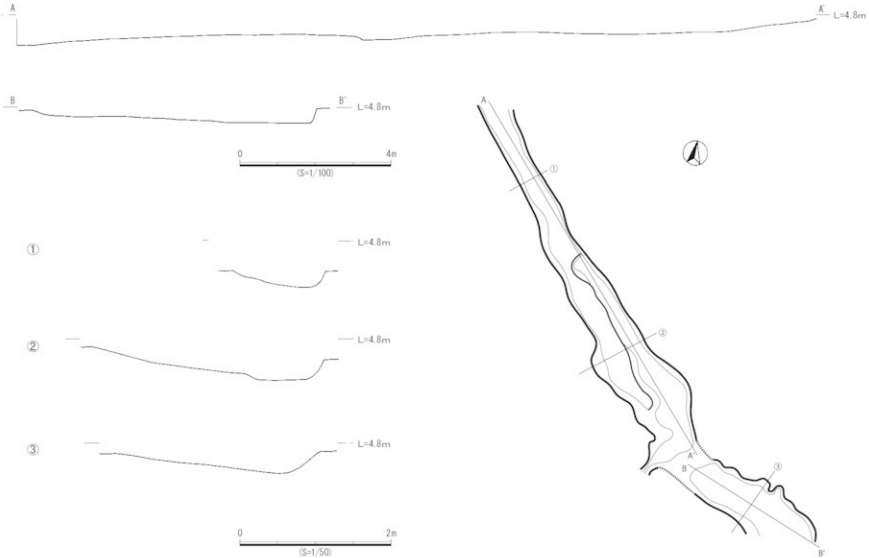
遺物は完形に近いものを含め241点出土し，そのうち38点を図化した。

300～325は甕である。300は口径24cm程で，口縁部はくノ字に外反し，口唇部は厚みを持ち丸くなる。器壁は薄く，胴部は丸い。301は復元口径26.5cm程で，口縁部はくノ字に外反し，口縁部と胴部の境界は指で押さえる。胎土は，長石等の白色鉱物が目立つ。302は復元口径24.2cm，高さ30cm，底部径10cm程の脚付甕で，口縁部と胴部の段を残し，口縁部は緩やかに外反し端部は先細りする。胴部は，繰り返しのヘラケズリで器壁を薄くする意図が見られる。脚部端部は直線的に伸び，内面天井部は平坦に仕上げる。胎土は，長石に加え大粒の赤色粒が目立つ。器壁は厚く，重量がある。303は口径26cm，高さ29.8cm，底部径8.4cmのほぼ完形の脚付甕で，脚部周辺を除く広域に煤状炭化物が付着している。白色鉱物とカクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土が使用し，にぶい橙5YRを基本色調とする。

304は口縁部を欠く脚付甕で，内外とも丁寧な工具ナデ仕上げが見られる。胴上部にベルト状に煤状炭化物が付着し，白色鉱物とカクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土が使用される。305は復元口径20.7cmで，くノ字に外



第84図　ピット10～13号および出土遺物

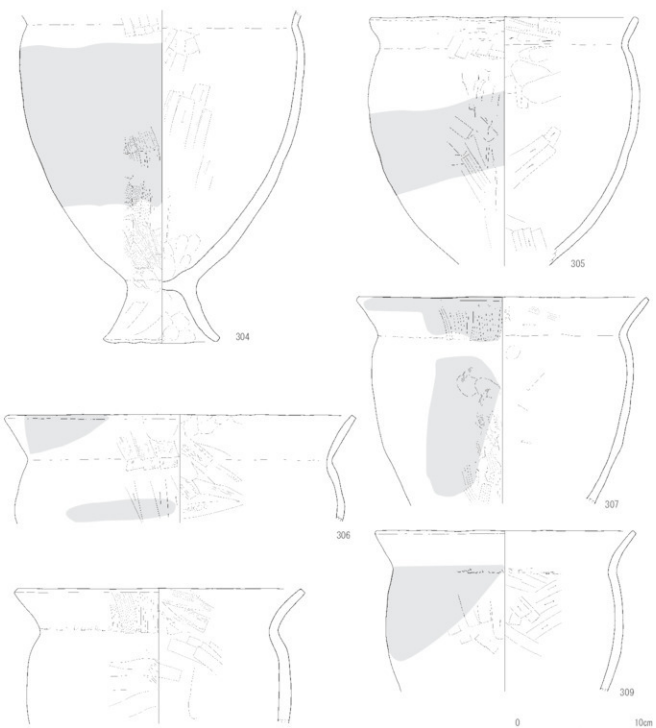


第85図　溝状遺構

反する口縁部は指頭で押さえ，緩やかに外反する。器壁は薄く，軽量かつ硬質な焼成である。胴部に煤状炭化物が付着し，胴下部にはひび割れが残る。また，胴下部は熱破砕によるとみられる剥落も見られる。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。306は復元口径28cm程の甕で，口縁部は緩やかに外反し，口唇部は平坦面をなし，屈曲部を除く口縁部と胴部に煤状炭化物が付着する。カクセン石等黒色鉱物の目立つ胎土で，浅黄橙7.5YRの器肌を呈す。307は復元口径23cmの甕である。口縁部は絞りこんだ頸部からくノ字に外反し，指頭で屈曲させた後，刷毛目のカキアゲを施す。硬質な焼成で器壁は薄い。屈折部を除き，煤状炭化物が付着し，胴下部にはひび割れが残る。308は復元口径22.5cm程の甕で，口唇部は平坦面をなす。口縁部と胴部の境は指で押さえた後，口縁部を縦方向の刷毛目で仕上げる。309は復元口径20.5cm程の甕で，緩やかに外反する口縁端

第86図　溝状遺構内出土遺物１

部は先細りの傾向が見られる。両面とも工具ナデで仕上げ，特に，内面は丁寧である。長石，石英に加え火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で，キラキラとした器面を呈している。310は復元口径21cm，高さ28cm，底部径9cm程の脚付甕である。口縁部と胴部の境は段をなし，口縁部は緩やかに先細りで外反し，口唇部は丸い。また，口縁部は緩やかな波状で，胴部はヘラケズリを繰り返している。器壁は厚く，重量がある。脚部端部は直線的に伸び，内面天井部は丸く仕上げる。長石に加え，やや大粒の長石粒や赤色粒が目立つ。311は復元口径21.8cm程の脚付甕で，内面稜線は明瞭で，緩やかに外反する口縁端部は先細りする。器壁が特別に厚く重量がある。胴部では粘土板の接合部が窪んで残される。長石，石英に加え，黒色鉱物を含む胎土で，胴上部から口縁部



第87図　溝状遺構内出土遺物２